

東北学院大学 教養学部論集

第 157 号

2010 年 12 月

〔論 文〕

- 「中」意識の飽和と潜在する変化：戦後日本の階層帰属意識に関するノート（2）
 ……………神 林 博 史…… 1
- A Reading of *The Waste Land*, 2. “A Game of Chess” ……………菊 地 弘…… 25
- Tilesius und Thunberg (4. Teil) ……………フリーダー・ゾンダーマン…… 39
 ギュンダ・シュテルバ
- Coming of Age in America: A Rite of Passage Away
 ……………スコット・ワトソン…… 75

〔翻 訳〕

- ロバート・スコット，アーノルド・ショア共著 社会学はなぜ応用されないのか
 —公共政策における社会学利用の一研究（部分訳後半）……久 慈 利 武…… 111

東北学院大学学術研究会

目 次

〔論 文〕

- 「中」意識の飽和と潜在する変化：戦後日本の階層帰属意識に関するノート（2）
.....神 林 博 史..... 1
- A Reading of *The Waste Land*, 2. “A Game of Chess”菊 地 弘..... 25
- Tilesius und Thunberg (4. Teil)フリーダー・ゾンダーマン..... 39
ギュンダ・シュテルバ
- Coming of Age in America: A Rite of Passage Away
.....スコット・ワトソン..... 75

〔翻 訳〕

- ロバート・スコット，アーノルド・ショア共著 社会学はなぜ応用されないのか
— 公共政策における社会学利用の一研究（部分訳後半）久 慈 利 武..... 111

● 印の著作は東北学院大学学術研究会のホームページから読むことができます。

〈<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/index.html>〉

東北学院大学学術研究会のホームページには

東北学院大学 〈<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/index.shtml>〉 から、

図書館・教育研究施設か、研究・産官学連携を開き、

図書館・教育研究施設 →学術研究会

研究・産官学連携 →学術誌 →学術研究会（紀要，論集）へとお進み下さい。

執筆者紹介（掲載順）

神 林 博 史	（本学教養学部 准教授）
菊 地 弘	（本学教養学部 教 授）
フリーダー・ゾンダーマン	（本学教養学部 教 授）
ギュンダ・シュテルバ	（ライプチヒ大学名誉教授）
スコット・ワトソン	（本学教養学部 教 授）
久 慈 利 武	（本学教養学部 教 授）

「中」意識の飽和と潜在する変化

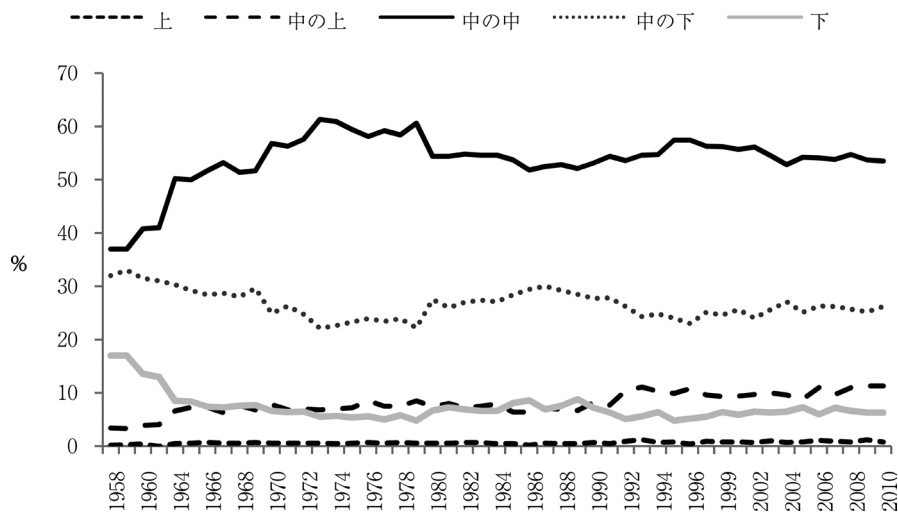
—— 戦後日本の階層帰属意識に関するノート (2) ——

神 林 博 史

1. 問題の所在

「国民生活に関する世論調査」(内閣府)における生活程度(階層帰属意識)の質問に「中」と回答する人(「中の上」,「中の中」,「中の下」の合計比率)は,1970年代前半に約9割に達した¹。そしてこのことが,70年代後半から本格的に広まった「一億総中流」言説を支える重要な根拠となった。以降,現在までの約40年間にわたり,生活程度は大きく変動することなく現在までほぼ同一の構成比率を維持している(図1)。このような「中」比率の膨張とその後の安定化を,原純輔は「中意識の飽和」と呼んでいる(原1988)。

この間,日本はオイルショック,バブル経済とその崩壊,「失われた10年」,2000年代の「格差社会」言説の流行に代表されるような不平等認識の高まりなど,様々な経済的・社会的変



内閣府「国民生活に関する世論調査」サイト掲載のデータより作成
調査が2回行われている年については,1回目の調査の値を用いた。

図1 「国民生活に関する世論調査」における生活程度の変化

¹ 質問文は「お宅の生活程度は,世間一般からみて,この中のどれにはいると思いますか」。選択肢は「上,中の上,中の中,中の下,下」。

動を経験した。にも関わらず、生活程度の分布に大きな変化が生じていないのは、ある意味で驚くべきことである。直感的には、経済状況の変化に対応して人々の意識も変化するように思えるからだ。

しかし、表面上は変化がなくとも見えない部分では変化が生じているというのは、意識の分布に限らず珍しいことではない。階層帰属意識にもそれがあてはまる。「社会階層と社会移動」全国調査（以下、「SSM 調査」と略）のデータを分析した吉川徹は、1975 年以降の階層帰属意識の分布にほとんど変化がないにも関わらず、職業・学歴・収入などの社会経済的変数との関連が緩やかに強まっていることを指摘し、これを階層帰属意識の「静かな変容」と呼んだ（吉川 1999）。これは近年の階層意識研究において、特に重要な知見の 1 つである。

吉川の知見は、1975 年から 1995 年までの 3 時点の SSM 調査データの分析に基づいている。こうした変化を、他のデータを用いて確認した研究は、筆者の知る限りではまだ存在しないようである。複数のデータを用いて知見の信頼性を確認することの重要性は、社会科学において近年ますます強調されるようになってきた。調査データには調査法や回収率、調査時の社会状況などによって様々なバイアスが生じうる。このため、あるデータから得られた知見が、真に社会的事実をとらえたものなのか、何らかのバイアスの結果生じたものなのかを、そのデータのみで判断することは困難である。実験が可能な研究分野の場合、知見の正しさは追試による結果の再現という形で確認できる。しかし、社会科学が対象とする領域では、実験が困難な場合が多い。そこで実験研究の追試にあたる作業として、複数のデータで同じ現象が観察されるかどうかを確認することが重要になる。焦点になっている知見が重要なものであればあるほど、その必要性も増す。

本稿の目的は、「国民生活に関する世論調査」のデータを用いて、生活程度（階層帰属意識）と社会経済的変数の関連を分析し、「静かな変容」が確認できるのかどうかを検討することである。また、階層帰属意識の変化を考える上で重要と思われる 2 つの論点——階層帰属意識のコホート分析と、階級帰属意識の時系列的な変化の分析——も併せて行う。

2. 中意識の静かな変容

すでに触れたように、吉川 (1999) は 1975 年から 1995 年までの SSM 調査データを分析し、階層帰属意識に対する階層変数との関係を分析している。具体的には、階層帰属意識を従属変数、年齢、教育年数、職業威信スコア、世帯収入、生活満足感を独立変数とするパス解析を時点ごとに行い、1975 年から 1995 年までの間に、社会経済的な変数（特に学歴と世帯収入）の階層帰属意識に対する影響力が強まっていることを指摘した。

この1975年から1995年の「静かな変容」は、「熱狂」（1975年）、「集約」（1985年）、「多元化」（1995年）の3つのフェーズに分かれる。高度経済成長による急激な生活水準の変化によって、社会経済的変数と階層帰属意識の関連が「浮遊」した「熱狂」の70年代。オイルショック以降の低成長経済の下、新たな階層帰属意識の基準が模索され、その中で最も「わかりやすい」変数である世帯収入が階層帰属意識を規定する主要因となる「集約」の80年代。そして、新たな階層基準の精緻化と共に教育や職業の影響力が強まってゆく「多元化」の90年代へ、という流れである（吉川1999）。

吉川は1975年から1995年のSSM調査データを用いたが、同じアプローチを1955年から2005年までのデータに適用し、より長期の変化を観測すると、興味深い趨勢が浮かび上がってくる。ここでは、階層帰属意識を従属変数とし、年齢、教育年数、職業威信スコア、世帯収入を独立変数とする重回帰分析を行う²。吉川はこれらの変数に加えて階層帰属意識と関連の深い主観的変数である生活満足感も用いているが、1955年と1965年のSSM調査データには生活満足感が含まれないため除外した。また、簡便のためパス解析ではなく重回帰分析を用いている。分析に用いた変数の記述統計量を表1に、重回帰分析の結果を表2にまと

表1 分析に用いた変数の記述統計量

	1955年		1965年		1975年	
	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
階層帰属意識	2.326	.862	2.596	.824	3.013	.780
年齢	40.886	12.715	40.235	11.780	40.084	12.079
教育年数	8.802	2.379	9.812	2.563	10.710	2.709
職業威信スコア	42.810	9.595	44.549	10.833	45.158	10.919
世帯収入(万円)	25.981	21.387	88.094	109.311	293.043	186.483
N	1,784		1,761		2,386	
	1985年		1995年		2005年	
	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
階層帰属意識	3.011	.855	3.032	.836	2.782	.857
年齢	42.799	11.593	46.017	12.298	47.890	11.824
教育年数	11.745	2.756	12.455	2.680	12.958	2.395
職業威信スコア	46.391	11.334	52.453	9.286	52.711	9.799
世帯収入(万円)	570.475	314.316	811.621	456.196	702.477	414.020
N	1,928		1,796		1,393	

² 階層帰属意識は「上=5, 中の上=4, 中の下=3, 下の上=2, 下の下=1」とコード。職業威信スコアは1955年データから1985年データまでがSSM1975年版を、1995年データと2005年データはSSM1995年版スコアを用いた。世帯収入は各時点での収入額を連続量として処理した。なお、階層帰属意識の質問文は「現在の日本の社会全体を、この五つの層にわけるとすれば、あなたご自身は、そのどれにはいると思いますか。選択肢は「上, 中の上, 中の下, 下の上, 下の下」。

表 2 階層帰属意識の重回帰分析

数値：標準化偏回帰係数 (β)

	1955 年	1965 年	1975 年	1985 年	1995 年	2005 年
年齢	.039	.000	.029	-.029	.037	.098***
教育年数	.162***	.143***	.070**	.044	.126***	.194***
職業威信スコア	.117***	.130***	.070**	.054*	.092***	.074***
世帯収入	.242***	.183***	.155***	.260***	.262***	.250***
決定係数 (調整済 R ²)	.153***	.104***	.046***	.087***	.131***	.154***
N	1,784	1,761	2,386	1,928	1,796	1,393

*** : $p < .001$, ** : $p < .01$, * : $p < .05$

20 歳から 69 歳の男性有職者のみ。

職業威信スコアは 85 年までが SSM 1975 年版スコア, 95 年以降は SSM 1995 年版スコア

データ : 75 年 A 票, 85 年は男性 A 票と男性 B 票の合併データ, 95 年は A 票と B 票の合併データ。

めた。なお、1975 年までの SSM 調査は男性のみを対象としていたため、時点間比較のために 85 年以降のデータも男性のみを分析した。(SSM 調査の詳細については付録参照。)

表 1 の階層帰属意識の平均値は、1955 年から 75 年にかけて上昇しており、中意識の飽和を示している。1985 年と 95 年の値はほぼ同じであるが、2005 年の値はそれまでに比べて低下している。これは 2005 年調査データの階層帰属意識の分布が、1995 年までと比べて下方にシフトしたことに起因している。この下方シフトは、主に調査法の変更に起因しており、いわゆる「下流化」を示すものではないと思われる³。

表 2 のうち、1955 年から 1985 年の部分は友枝 (1988) の結果と、1975 年以降の部分は吉川 (1999) の結果とほぼ同じである⁴。1975 年以前は年齢以外の変数がそれぞれ有意な効果を持っているが、1975 年と 85 年では教育と職業の影響力が相対的に弱まる。その後、1995 年と 2005 年では再び効果が強まるようになる。

個々の回帰係数だけでなく、決定係数にも同じことが言える。決定係数の値は 1955 年から 1975 年にかけて低下し、85 年以降再び上昇することがわかる。変数の説明力という点から見ても、階層帰属意識と社会経済的変数との関係は 1975 年以前から希薄だったのではなく、高度経済成長を通じて関連が弱まっていったのである。2005 年では 1995 年よりもさらに階層変数の説明力が増している。1995 年の「冷却」以降、人びとはより客観的な階層帰属判断をするようになったと言えそうである⁵。(こうした変化がなぜ生じたのかについては、

³ 2005 年 SSM 調査の階層帰属意識の特徴については、小林 (2008) を参照。

⁴ 表 2 の 1985 年の結果では職業威信スコアの効果が有意になっており、吉川 (1998) の「集約」とはやや異なる結果になっている。これは、吉川のモデルに含まれている生活満足感が表 2 のモデルには投入されていないためである。詳細は省くが、表 2 のモデルに生活満足感を投入すると、職業威信スコアの効果は消え、世帯収入と生活満足感の効果だけが残るという吉川と同一の結果が得られる。

⁵ ただし、2005 年 SSM 調査データにおける階層帰属意識は 1995 年調査までとは若干異なる方法で測定されているため、その影響で関連が強まった可能性も否定できない。

後で詳しく検討する。)

次節では、SSM 調査データに見られたこうした傾向が、他の調査データでも確認できるのかどうかの試みとして、「国民生活に関する世論調査」(内閣府)の再分析を行う。

3. 「国民生活に関する世論調査」に見る関連の変化

3.1 「国民生活に関する世論調査」データについて

内閣府が行っている「国民生活に関する世論調査」(以下、「国民生活調査」と略)は、人々の意識の変化を知る上で非常に貴重な調査である。第1回の調査は1948年に実施されており、1954年から「生活程度」についての質問が行われるようになった(ただし、現在使われている質問に近い形になったのは1958年調査以降)。以後、50年以上にわたってほぼ毎年調査が行われている。前稿(神林2010)で指摘したように、SSM調査における階層帰属意識と国民生活調査における生活程度のもともとの測定意図は異なっていたようだが、意識変数としての性質にそれほど大きな差はないので、ここでは両者は互換可能な変数(生活程度について言えることは階層帰属意識にも言える。その逆もあり)であると仮定しておく。(実際、多くの研究が暗黙にそのような読み替えを行っている。)

国民生活調査の個票データは、現在までのところごく一部を除いて公開されていないため、残念ながら個票データを用いた詳しい分析を行うことはできない⁶。しかし、毎回刊行されている調査報告書には、各質問項目と、年齢・性・職業・学歴・収入など基本的な人口学的・社会経済的変数とのクロス集計表が掲載されている⁷。これを利用して、生活程度と主要な社会経済的変数の関連の長期的な変化を分析することができる。(ただし、1970年代中頃までの報告書は集計の内容が一貫しておらず、情報が得られない年もしばしばある。)これらの集計表から計算できるのは生活程度と各変数の0次関連にすぎず、他の共変量をコントロールして関連を詳しく分析することはできない。しかし、大まかな変化の趨勢を知るためには、2変数関連でもそれほど大きな問題はないと思われる。ここでは、世帯収入、学歴、職業の3つの変数との関連を分析する。(国民生活調査の詳細については、付録参照。)

⁶ 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブにて、第6回調査(1963年)・第7回調査(1964年)・第8回調査(1965年)・第10回調査(1967年)の個票データが公開されている(2010年9月現在)。

⁷ 2000年以降の調査については、内閣府のウェブサイトから主な集計表が入手できるようになっている。<http://www8.cao.go.jp/survey/index-ko.html> (2010年9月現在)

3.2 生活程度と世帯収入の関連

国民生活調査における生活程度と世帯収入の関連は、1958年調査から確認できる。ただし、1950年代と60年代の調査では、調査項目や報告書における集計の方針が定まっていないため、以下のような問題がある。(1)生活程度もしくは世帯収入が測定されていない年がある。(2)世帯収入が測定されているにも関わらず、生活程度とのクロス集計表が掲載されていない年がある。(3)生活程度と世帯収入の関連が「職業×世帯収入×生活程度」3重クロス表の形で計算されており、職業カテゴリ毎に世帯収入の区分が異なるため標本全体の収入分布が再現できない形の表が掲載されている年がある。したがって、すべての調査時点の集計結果を得られるわけではない。とはいえ、1970年以降は全ての調査報告書に世帯収入別の生活程度の集計表が掲載されているので、十分な時間幅を持った分析が行える。ただし残念なことに、世帯収入の測定は2005年調査を最後に行われていない(2010年現在)。

国民生活調査の場合、世帯収入は単一選択式で測定される。選択肢の数は調査時期によって異なるが、概ね10前後である。国民生活調査の場合、集計表は表3のような形式で掲載されている。ここでは、1967年の世帯収入と生活程度の集計表を示す⁸。

集計表に掲載されているのは、各カテゴリの標本数と、カテゴリ別の構成比率である。ここから、各セルの度数を再計算できる。(ただし比率丸めの関係で、再計算したセル度数の合計と集計表に掲載された標本数が一致しない場合がある。)本稿の分析では、世帯収入

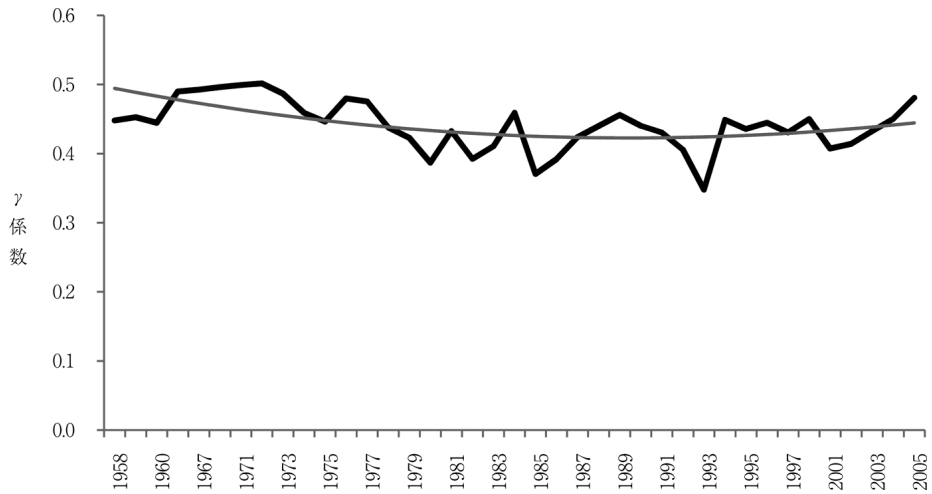
表3 国民生活に関する世論調査の集計表(1967年)
生活程度(階層帰属意識):%

世帯収入	標本数	上	中の上	中の中	中の下	下	不明
2万円未満	669	0.1	0.4	22.3	35.1	36.8	5.2
2～3万円未満	1,211	0.0	1.6	30.8	46.5	15.9	5.2
3～4万円未満	2,495	0.2	2.2	48.7	36.9	8.0	4.0
4～5万円未満	2,194	0.0	4.0	55.8	32.5	4.8	2.8
5～6万円未満	1,644	0.2	6.2	63.6	24.1	3.3	2.5
6～7万円未満	959	0.4	7.5	67.8	21.8	1.9	0.6
7～8万円未満	644	0.8	10.1	66.9	18.8	1.6	1.9
8～9万円未満	435	2.5	13.3	68.0	12.9	1.6	1.6
9～10万円未満	376	1.6	16.2	66.2	13.0	1.9	1.1
10～15万円未満	527	1.3	22.2	62.0	12.0	0.9	1.5
15万円以上	359	7.2	30.9	54.6	5.0	0.3	1.9
不明	1,632	0.2	5.1	52.1	27.1	7.2	8.2

注：第10回「国民生活に関する世論調査」(1967) 個票データから作成。

⁸ 1967年調査の報告書には世帯収入と生活程度の集計表は掲載されていないので、参考資料として個票データから作成した集計表を掲載した。

「中」意識の飽和と潜在する変化



「国民生活に関する世論調査」(内閣府) 報告書および個票データより作成
 図2 「国民生活に関する世論調査」における世帯収入と生活程度に関連の変化

を等サイズの4カテゴリーに統合し(言い換えると四分位数によるカテゴリー化を行い), その上で生活程度との関連を分析する⁹。世帯収入, 生活程度ともDKを除いた4行5列の表が分析の対象となる¹⁰。生活程度, 世帯収入とも順序変数とみなすことができるので, 関連の測度には γ 係数(グッドマン・クラスカルの順位関連係数 γ)を用いた。こうして得られた γ 係数をまとめたのが図2である。なお, 世帯収入は1969年までは月収, 1970年以降は年収で質問されている。このことが結果に影響している可能性もあるので, 注意が必要である。なお, 調査が年に2回行われた年(1974~76年)については, 1回目の調査の結果を用いた。(次節以降の分析も同様。)

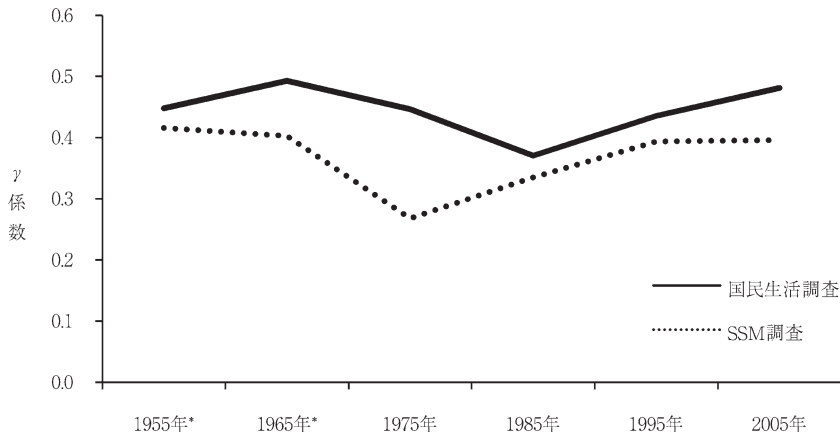
グラフには, γ 係数の変化を示す折れ線の他に, 大まかなトレンドを確認する意味で近似曲線(2次式)を追加した¹¹。基本的には, 表2に見られた決定係数の変化と同じようなパターンが存在する。すなわち, 1950年代, 1960年代は関連が強く, 1970年代から80年代にかけて低下し, 1990年代以降に再び関連が強まる, という傾向である。ただし, 短期間での変動も大きいので, 明確なトレンドが存在するようには必ずしも見えないかもしれない。

図3は, 各時点のSSM調査データにおける世帯収入と階層帰属意識の関連(γ 係数)と,

⁹ 元の収入カテゴリーの標本数の関係から, 完全には等サイズにならない場合も多い。収入カテゴリーを統合せず, そのまま用いる分析も行ったが, 基本的な傾向は4カテゴリーの場合と変わらない。

¹⁰ 1958年調査と1959年調査の集計表では「上」と「中の上」が統合されているので, この2時点のみ4×4表となる。また, 本文中で触れたように, 1967年調査の集計表は存在しないため, 個票データより計算したものをを用いた。

¹¹ Excelの近似式機能を利用。1次式と2次式を比較して, 決定係数の良い方を用いた(これ以降の図における近似式も同様)。図2の場合は, 一次式の決定係数が.172, 2次式が.316であった。



「国民生活に関する世論調査」(内閣府) 報告書および個票データより作成
 *国民生活調査の結果は1958年および1967年のもの

図3 国民生活調査とSSM調査の比較 (世帯収入との関連)

同年に行われた国民生活調査の結果とを比較したものである¹²。国民生活調査については、SSM調査と同じ年のデータがない場合、可能な限り近い調査年のデータを用いた¹³。また、SSM調査データについては、前節の分析と同様、(SSM調査内での) 時点間比較のために1985年以降のデータも男性のみを分析した。国民生活調査は第1回調査から男女とも調査対象となっており、なおかつ性別×世帯収入×生活程度の集計表は存在しない。このため国民生活調査の値は、すべて女性の回答も含む数値となっているので注意が必要である。

関連が最も弱まるのは、SSM調査の場合は75年、国民生活調査の場合は85年という違いはあるものの、その後は関連が強まるという傾向は共通していることがわかる。

3.3 生活程度と学歴の関連

国民生活調査では、1991年調査を最後に学歴の測定が打ち切られている。このため生活程度と学歴の関係については、90年代以降の変化を追うことができない。しかし、1950年代末から91年までの約30年間の関連の変化を把握できる。

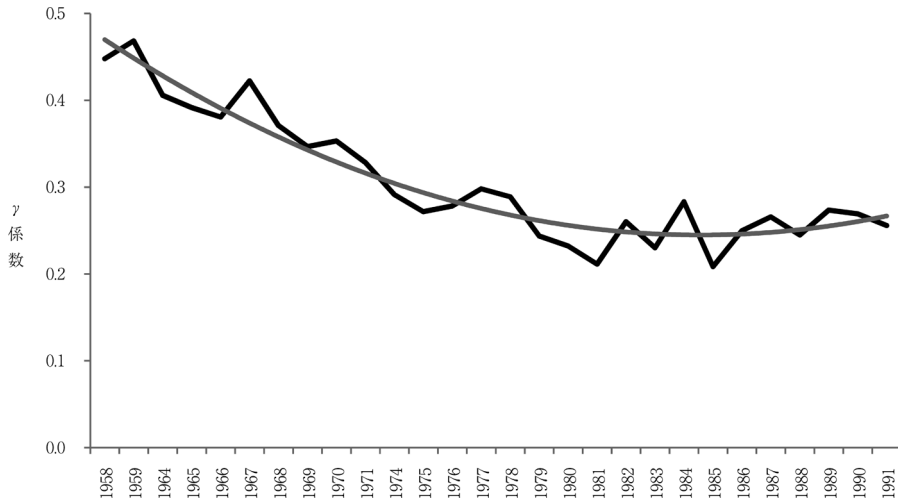
ここでは、国民生活調査における本人学歴を、(1)「未就学・小卒」および「旧高小・新中卒」を「中卒以下」、(2)「旧中・新高卒」を「高卒」、(3)「旧高専大・新大卒」を「大卒」とする3カテゴリーで集計する。学歴も順序変数とみなせるので、世帯収入と同様にγ係数

¹² SSM調査データについても国民生活調査と同様に、世帯収入を4カテゴリーに分割し、階層帰属意識とのγ係数を計算した。

¹³ 国民生活調査の1958年と1967年の結果を、SSM調査の1955年と1965年に対応するものとして用いた。

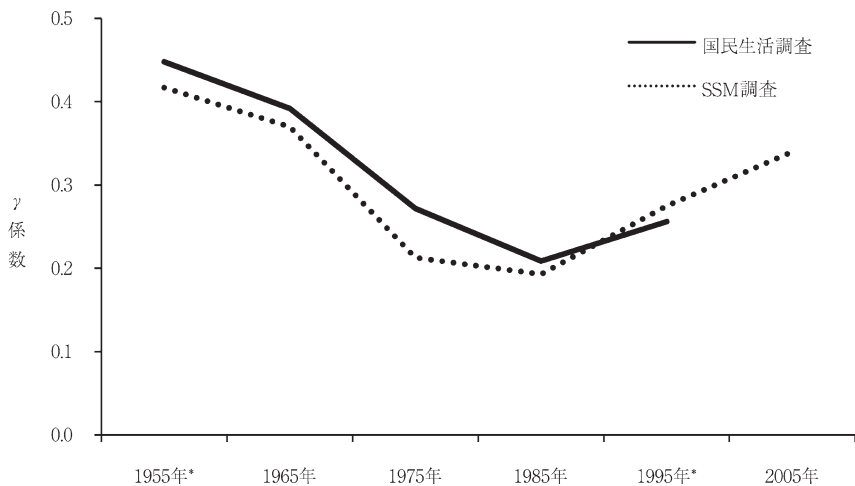
を用いる¹⁴。図4に結果をまとめた。

図4には、世帯収入の場合と同様、近似曲線（2次式）も併せて掲載した¹⁵。学歴の効果は、1980年代まで一貫して低下している。1985年頃を底に上昇に転じているように見えるが、



「国民生活に関する世論調査」（内閣府）報告書および個票データより作成

図4 「国民生活に関する世論調査」における学歴と生活程度の変化



「国民生活に関する世論調査」（内閣府）報告書および個票データより作成

*国民生活調査の結果は1958年および1991年のもの

図5 国民生活調査とSSM調査の比較（学歴との関連）

¹⁴ したがって、分析の対象は3×5表となる。ただし、1958年調査と1959年調査の集計表では「上」と「中の上」が統合されているので、この2時点のみ3×4表となる。なお、1964年と1965年の集計表は個票データより計算したものをを用いた。

¹⁵ 近似式の決定係数は、1次式が.721、2次式が.907。

残念ながらその先は把握できない。

図 5 は、世帯収入と同様に SSM 調査における学歴と階層帰属意識の γ 係数を比較したものである¹⁶。3.2 で説明したように、SSM 調査は男性のみの結果、国民生活調査は男女込みの結果である。両調査の結果は非常によく似ていることがわかる。

3.4 生活程度と職業の関連

最後に、職業について分析しよう。職業は、国民生活調査において（最新の 2010 年調査まで）継続的に調査されている唯一の社会経済的変数となっているが、ここでは 2005 年までのデータを扱う。

国民生活調査の場合、職業は 12 カテゴリーで測定されている。ここでは、(1) 被傭者の「管理職」および「専門技術職」を「上層ホワイトカラー」、(2) 被傭者の「事務職」を「下層ホワイトカラー」、(3) 被傭者の「労務職」を「ブルーカラー」、(4) 自営者の「商工サービス業」と「その他」、および家族従業者の「商工鉱サービス業・その他」を「自営」、(5) 自営者と家族従業者の「農林漁業」を、「農業」、(6) 「無職の主婦」と「失業者・その他」と「学生」を「無職」とし、無職を除いた 5 カテゴリーで生活程度との関連を見る。

ここで用いる職業の 5 カテゴリーには明確な順序関係を想定できないので、関連の測度はガンマ係数ではなくクラメールの V を用いる。職業については 1960 年からの変化を把握できる¹⁷。

図 6 は職業と生活程度の関連の変化をまとめたものである。2 次の近似曲線が比較的良好であってはまっております¹⁸、1980 年代にかけて関連が低下し、それ以降上昇する傾向が確認できる。

図 7 は SSM 調査との比較で、3.2 および 3.3 と同様、SSM 調査は男性のみの結果、国民生活調査は男女込みの結果である¹⁹。職業の場合も、70 年代もしくは 80 年代に底があり、90 年代以降関連が上昇することがわかる。

以上のように、国民生活調査データにおいても、世帯収入、学歴、職業の全ての変数で、1970 年代から 80 年代にかけて関連が低下し、その後再び上昇するという傾向が存在することが確認された。もちろん、学歴、職業、収入は互いに密接に関連するので、これら 3 つの変数と生活程度の関連が同じパターンになるのは当然である。その意味では、これらの結果は、同じものを異なる側面からとらえたものとも言えるだろう。

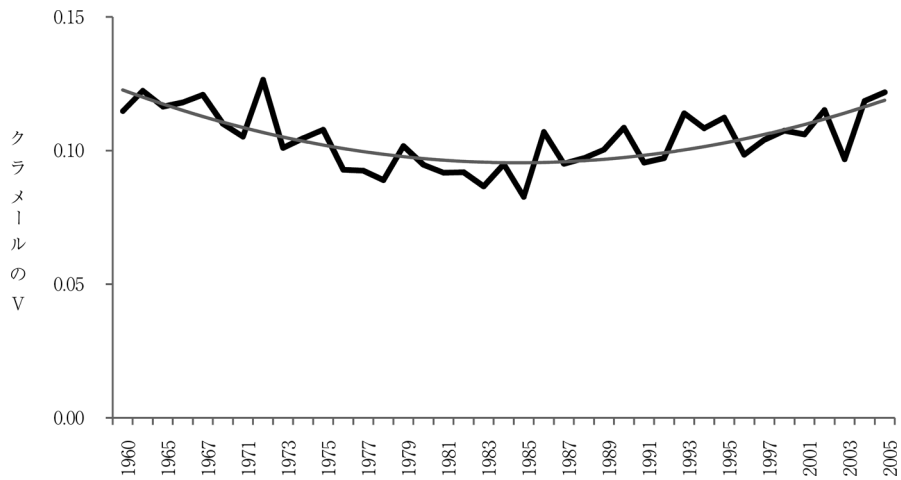
¹⁶ 国民生活調査の 1958 年の結果を、SSM 調査の 1955 年に対応するものとして用いた。

¹⁷ 1964 年、1965 年、1967 年は個票データより計算した集計表を用いた。

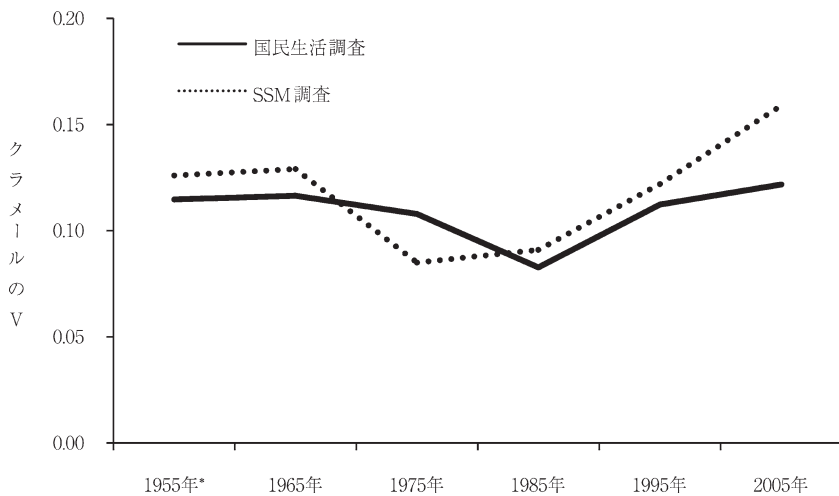
¹⁸ 1 次式の決定係数は、0.011、2 次式の決定係数は .546。

¹⁹ SSM 調査データも、国民生活調査と同じ 5 カテゴリーを用いて関連を計算した。なお、国民生活調査の 1960 年の結果を、SSM 調査の 1965 年に対応するものとして用いた。

「中」意識の飽和と潜在する変化



「国民生活に関する世論調査」(内閣府) 報告書および個票データより作成
 図6 「国民生活に関する世論調査」における職業と生活程度の変化



「国民生活に関する世論調査」(内閣府) 報告書および個票データより作成
 *国民生活調査の結果は1960年のもの
 図7 国民生活調査とSSM調査の比較(職業との関連)

4. 関連の変化はどのように生じるのか

4.1 意識の分布と関連の変化の関係

以上のように、国民生活調査における生活程度(階層帰属意識)と社会経済的変数の関連は、SSM調査データとほぼ同じパターンで変化していることが確認された。では、なぜこ

のような変化が生じたのだろうか。

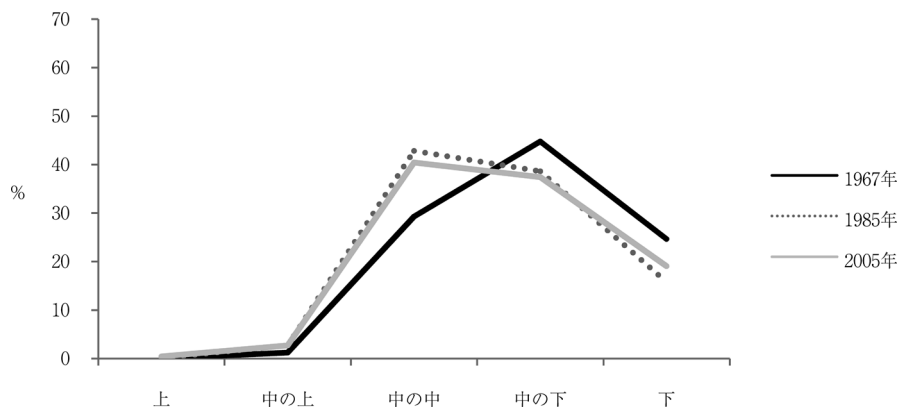
基本的には、回答者の社会経済的変数と階層帰属意識の対応関係が問題になる。世帯収入を例に考えてみよう。低収入層ほど帰属階層を低めに（たとえば「下」や「中の下」と）回答し、高収入層ほど高めに（「上」や「中の上」と）回答する傾向があるなら、世帯収入と階層帰属意識の関連は強くなる。逆に、客観的には低収入層に属する人が帰属階層を高めに回答し、高収入層に属する人が帰属階層を低く回答すれば、世帯収入と階層帰属意識の関連は弱まるだろう。

国民生活調査のデータから、このことを簡単に確認してみよう。前節の世帯収入と生活程度に関連の分析から明らかなように、1967年から85年の間に関連が低下し、85年から2005年までに再び強まっている。なおかつ、1970年代以降、生活程度の分布そのものはほとんど変化していない。ここでは、佐藤（2008）に準じて世帯収入層別の生活程度の分布を分析することで、こうした関連の変化がどのように生じているかを探ってみることにする。

世帯収入層は、前節の分析で使用した4カテゴリーを用いる。第1四分位が最も収入の低い層、第4四分位層が最も収入の高い層になる。図8-1から図8-4に結果を示す。

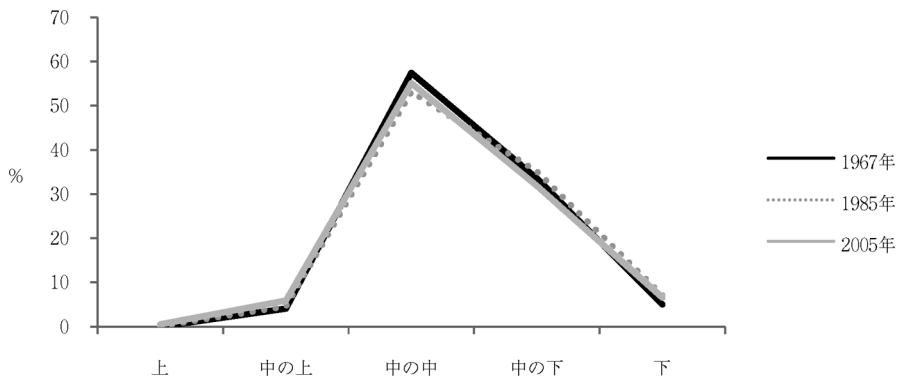
生活程度の分布が最も大きく変化しているのは、最も収入の低い第1四分位層、次いで最上層の第4四分位層が変化していることが見て取れる。中間の2つの層は、分布にほとんど変化がないが、あえて言えば、第3四分位層が第4四分位層に近い動きをしている。

第1四分位層について詳しく検討すると、1967年の分布がかなり下方に偏っているのに対し、1985年では全体的に上昇している。この低収入層の上昇が、中意識の飽和に寄与していたと考えられる。1985年と2005年の間の分布にはそれほど大きな差はないが、緩やかな下方シフトが見られる。具体的には、「中の中」と「中の下」の比率が低下し、「下」が3

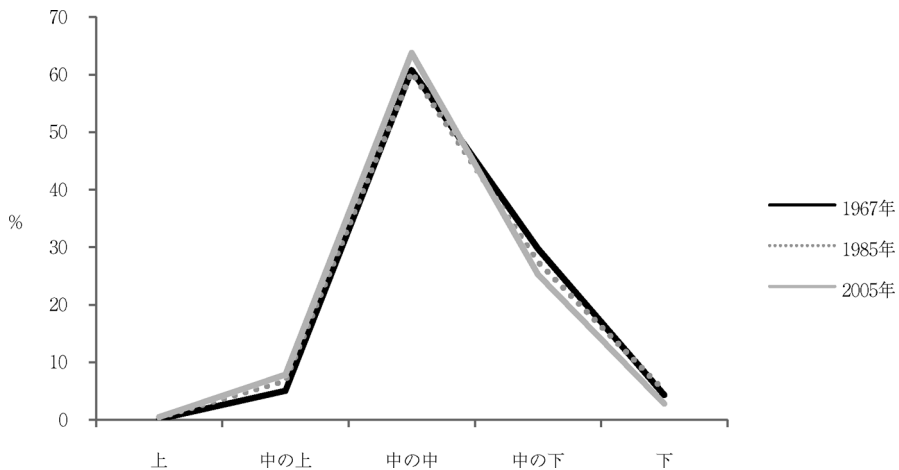


「国民生活に関する世論調査」(内閣府) 報告書より作成
 図8-1 第1四分位層(低収入層)の生活程度の分布の変化

「中」意識の飽和と潜在する変化



「国民生活に関する世論調査」(内閣府) 報告書より作成
 図 8-2 第 2 四分位層の生活程度の分布の変化

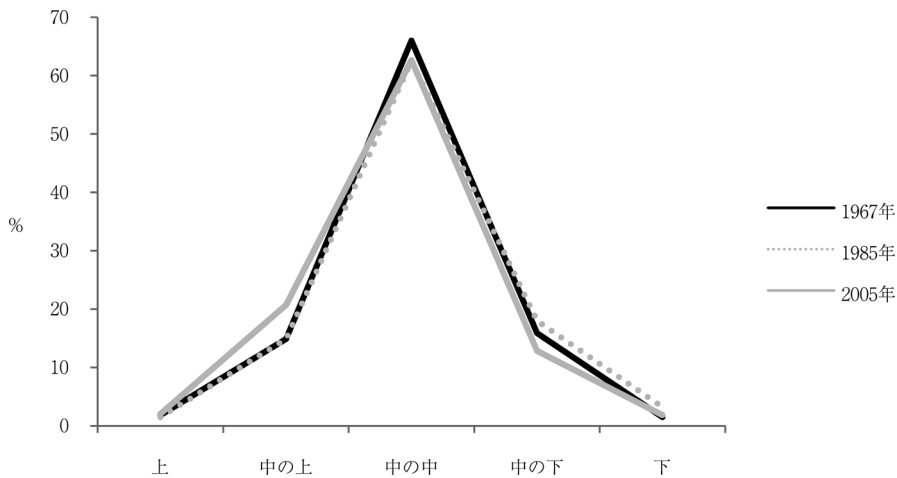


「国民生活に関する世論調査」(内閣府) 報告書より作成
 図 8-3 第 3 四分位層の生活程度の分布の変化

ポイント程度上昇している。

高収入層である第 4 四分位層の分布は 1967 年と 1985 年ではほとんど変化がない (図 8-4 でも線がほぼ完全に重なっている)。2005 年もそれほど大きく変化しているわけではないが、若干の上方シフトが見られる。具体的には、「中の下」の比率が低下し、その分「中の上」が約 5% ポイント程度増加している。

以上、簡単な分析ではあるが、生活程度 (階層帰属意識) の分布と関連の変化の関係がどのようなものであったかが把握できる。高度経済成長期以降、1980 年代までの収入と生活程度の関連の低下は、主に低収入層の意識の底上げ (上方シフト) によって生じていた。一



「国民生活に関する世論調査」(内閣府) 報告書より作成

図 8-4 第 4 四分位層 (高収入層) の生活程度の分布の変化

方、1980 年代以降の関連の上昇は、低収入層がかつてのような分布に単純に回帰したのではなく、低収入層の意識の下方シフトと高収入層の上方シフトが同時に生じることによってもたらされている。これらの変化はそれほど大きなものではないため目立ちにくい上に、低収入層の下方シフトと高収入層の上方シフトが同時に生じているため、変化が相殺されて全体としての生活程度の分布も大きく変化しない。このように、高度経済成長期に関連の低下が生じた変化のパターンと、1980 年代以降に上昇が生じたパターンは異なるものである。このような低収入層と高収入層の間の乖離は、SSM 調査でも確認されている (佐藤 2008, 佐藤 2009)。

なお、結果の提示は省略するが、同じようなことが学歴や職業についても言える。学歴では中卒層と大卒層の間、職業ではホワイトカラー層とブルーカラー層の間に、図 8-1 および図 8-4 に見られたような変化が観測できる。繰り返しになるが、収入と学歴・職業が互いに関連している以上、当然の結果ではあるのだが。

こうした変化は、高階層と低階層の意識が二極分化してゆく予兆と見ることも可能かもしれないが、今回の分析結果だけでそれを断定することは差し控えたい。また、ここでの分析はかなり粗いものであり、この問題については今後さらに詳細な分析を行う必要がある。

4.2 変化のメカニズム

階層帰属意識の分布と関連の変化についての理論的なメカニズムについても、先行研究に基づいて簡単に検討しておこう。高度経済成長期から 1970 年代・80 年代までの階層帰属意

識が上昇しつつ、関連が低下していく過程については、盛山和夫の「生活水準の『中イメージ』の断続的变化説」(盛山 1990) に則って理解できるだろう。すなわち、人々が階層帰属意識を判断する判断基準が大きく変化しないまま高度経済成長によって生活水準が急激に上昇したので、多くの人が(図 8-1 のように低収入層の人であっても)中意識を持てるようになった。そして、低収入層の意識の分布が上方シフトした分だけ、社会経済的変数と意識の関連が弱まったと考えられる。

1970 年代初めのオイルショック以降、日本経済は低成長期に入った。数土直紀によれば、経済成長や生活水準の変化が緩やかな安定状態が長く続けば、人々が持つ社会全体の経済水準・生活水準に関する情報が正確になってゆく。言い換えると、安定した社会状態の下では、社会の実態がよく見えるようになる。その結果として、階層帰属意識の判断基準、あるいは階層帰属意識と社会経済的地位・生活水準との対応関係は現実の社会経済的不平等を反映したものになり、意識と客観的な社会経済的変数との結びつきが強まっていくと考えられる(数土 2010)²⁰。

もちろん、これ以外の可能性も考えるし、盛山や数土の仮説にしても、十分に検証されたわけではないが、現時点では以上のように考えるのが妥当だと思われる。

5. 関連の変化と時代効果

以上のように、階層帰属意識と社会経済的変数の関連は時代によって変化していることが確認されたが、この問題を別の角度から検討しておこう。

ある意識変数が時系列的に変化する場合、その原因は、(1) 年齢効果(加齢効果)、(2) コーホート効果、(3) 時代効果、の 3 つに分解できる。階層帰属意識の場合、加齢効果が見られないことはすでに多くの研究によって確認されているので、階層帰属意識の分布や関連の変化は、コーホート効果か時代効果のいずれか、あるいは両方によって引き起こされていることになる。吉川(1998)は時代効果が重要であることを指摘しているが、この点を補足してみたい。

ここでは、階層帰属意識の分布および社会経済的変数との関連について、コーホート分析を行う。まず、SSM 調査における階層帰属意識の分布の変化から確認しよう。図 9 は 1955 年から 2005 年までの「中」意識比率(「中の上」と「中の下」の合計比率)の変化を出生コーホート別に示したものである。ここでの分析対象は男性で、一時点分の情報しかない 1886-

²⁰ 1980 年代半ばに小沢雅子が類似の指摘を行っている(小沢 1985)。

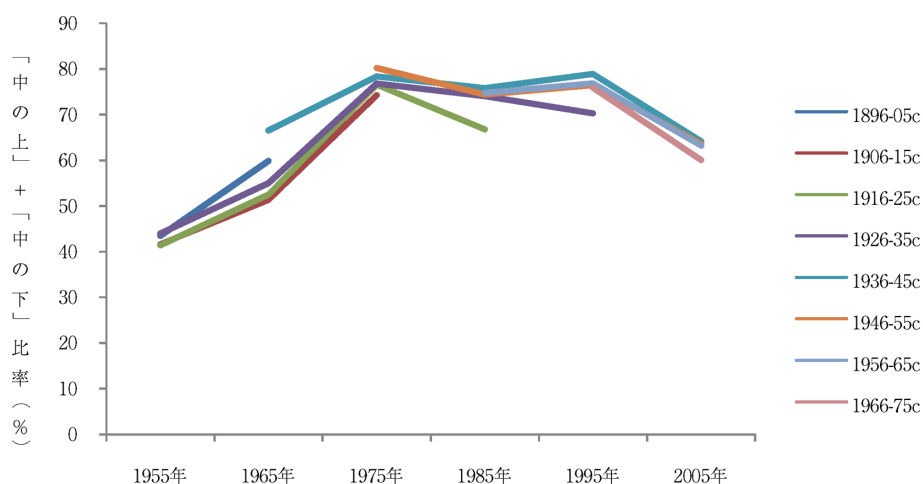


図9 階層帰属意識のコホート分析（「中」比率の変化：SSM調査・男性）

95 コーホート（1955年調査の60代）と1976-85 コーホート（2005年調査の20代）の表示は省略した。

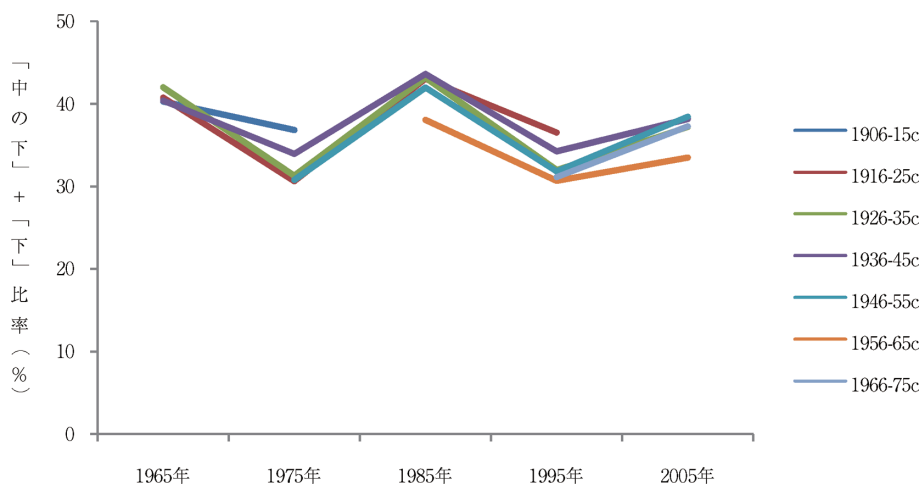
コーホートによる比率や変化パターンの違いは多少あるものの、ほとんど全てのコーホートが同一の方向に変化している。このことは、階層帰属意識の分布の変化が主に時代効果によって生じていること示唆している。

同じことを、国民生活調査データでも行ってみよう。ここでは『下流社会』（三浦 2005）で「下流」とされる層、すなわち生活程度を「中の下」および「下」と回答する層の変化を分析した。図10は、1965年から2005年までの男性の「中の下」と「下」の合計比率をコーホート別に示したものである²¹。

比率に関してはコーホートによって若干のばらつきがある年もあるが、変化のパターンは全コーホートではほぼ完全に一致しており、時代効果が強力であることを物語っている。三浦（2005）は近年の「下流化」の進行を強調しているが、長期の時間幅で見た場合、「下流」の比率は増減をくりかえしており、1995年から2005年の増加は、1975年から85年の増加に比べると小幅であることがわかる。なおかつ、これは全コーホート共通の傾向なので、（これも三浦が強調するように）若年層で「下流化」が特に進行したわけではない。

²¹ 各時点の調査報告書の年齢層別集計より作成。国民生活調査の場合、調査時点によって集計表に掲載される年齢層が異なるので、特定できる出生コーホートも異なる。例えば、1965年調査では年齢層が「20-29歳」、「30-39歳」、「40-49歳」、「50-59歳」、「60歳以上」で集計されているので、特定可能な出生コーホートは「1936-45」（20-29歳）から「1906-1915」（50-59歳）までの4つである。しかし、1975年と1985年は年齢層が「60-69歳」、1995年と2005年は「70-79歳」まで拡張されているので、その分コーホート数も増える。また、一時点分の情報しかない1976-85コーホート（2005年調査の20代）は省略した。

「中」意識の飽和と潜在する変化



『国民生活に関する世論調査』(内閣府) 調査報告書より作成

図 10 生活程度のコホート分析(「下流」比率の変化: 国民生活調査・男性)

次に、階層帰属意識と社会経済的変数との関連の変化について分析しよう。国民生活調査報告書の集計では関連をコホート別に分析することは不可能なので、ここではSSM調査データのみを用いる。階層帰属意識を従属変数とし、教育年数、職業威信スコア²²、世帯収入を独立変数とした重回帰分析を出生コホート別に行い、その決定係数(自由度調整済 R^2)をまとめたのが、図 11 である。(男性のみの分析結果。1886-95 コホートと 1976-85 コホートは省略した。)

分布の場合に比べると出生コホートによるばらつきが大きく見えるが、全体としては 1955 年から 1975 年にかけて決定係数が低下し、それ以降決定係数が上昇するという表 2 で確認されたパターンがほとんど全てのコホートで確認できる。

以上の結果から、階層帰属意識の分布および社会経済的変数との関連は、時代的な影響を強く受けていることが示唆される。4.2 で登場した「安定的な経済状況の下では、人々が持つ社会全体の経済水準・生活水準に関する情報が正確になってゆく」という数土(2010)の議論をもう一度検討してみよう。素朴に考えれば、長く生きている人ほど社会についての情報をより多く得られるので、情報の精緻化には加齢効果が働くことが予想できる。しかし、図 11 から判断する限り、そうした効果はほとんど存在しないようである。だとすると、情報の精緻化は、長く生きて社会経験を積むのとは別の、時代的な要因(たとえば各時代におけるマスメディアの報道内容)によって生じている可能性が高い。こうした時代効果の存

²² 職業威信スコアの扱いは、表 2 の分析と同じ。

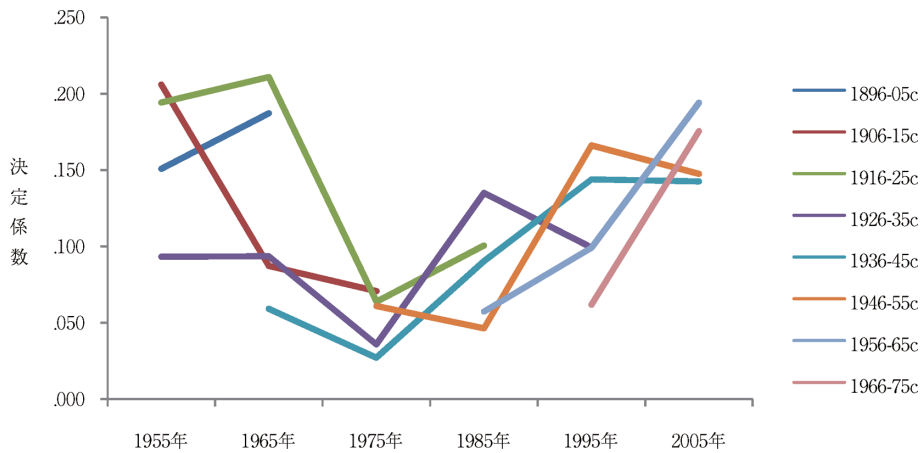


図 11 決定係数のコーホート分析 (SSM 調査・男性のみ)

在は、階層帰属意識の変化のメカニズムを考える上で見落としてはならない点である。階層帰属意識を形成するメカニズムには、時代によって変化するものと変化しないものの両方が共存していると考えられる。この二者の関係を解きほぐしてゆくことが、階層帰属意識の変化を理解する上で重要であろう。

6. もうひとつの主観的地位：階級帰属意識の変化

階層帰属意識が社会的な関心を集めるようになったのは 1970 年代後半からであるが、それ以前の 1950 年代・60 年代は「階級」（とりわけマルクス主義的な階級概念）が社会的に不平等を考える際の基本的な認識枠組であった。このため意識研究においても、階級意識が主要な主題となっていた。「階級意識」が意味するものは幅広いが、階級帰属意識——自分がどの階級に所属しているのかという自己認識——はその中核に位置すると考えられる。なぜなら、これはマルクス主義における即自的階級/対自的階級の議論に直接的に関わるものだからである。しかし、高度経済成長の進展と共に、階級への関心は急速に薄れていった。SSM 調査でも、1955 年以来行われていた階級帰属意識の測定は 1995 年で途絶えている。

前稿（神林 2010）で指摘したように、階級帰属意識と階層帰属意識は、日本の階層研究に同時に導入された、いわば双子のような存在である。階級への関心が低下したとしても、あるいはそれゆえにこそ、階級帰属意識がどのように変化してきたのかを知ることは、階層帰属意識の変化を理解する一助になると思われる。本節では、1955 年から 1995 年までの SSM 調査における階級帰属意識の時系列的な変化を確認しておこう。

階級帰属意識は、次のような質問で測定される。

仮に現在の日本の社会全体を、この表にある三つの階級にわけるとすれば、あなたはご自身は、このどれに属するとお考えですか。

〔労働者階級 中産階級 資本家階級〕

まず、階級帰属意識の分布を確認しておこう。1955年から1995年までの5時点分の階級帰属意識の分布を表4にまとめた。前節の分析と同様、1975年までのSSM調査が男性のみを対象としていたことから、比較のために1985年と95年も男性のみの分析を行った。

多少の変動はあるものの、それほど大きい分布の変化はない。労働者階級が6割から7割、中産階級が2割から3割、資本家階級がごくわずか、という構造である。階層帰属意識に見られた「中」の拡大は起こっていない。

次に、階級帰属意識と社会経済的変数の関連を分析しよう。階級帰属意識は、マルクス主義的階級論に素朴に依拠するならば、階級（職業）によって決定される意識である。しかし実際には、それ以外の様々な要因にも規定されることがわかっている（直井1979、三隅1990）、階層帰属意識に準じた分析枠組を用いる。従属変数である階級帰属意識は、表4で確認したように資本家階級の数が少ないので、中産階級と合併して2カテゴリーとし、ロジスティック回帰分析を行う（資本家階級と中産階級が1、動労者階級が0）。独立変数は、年齢、教育、世帯収入、職業で、それぞれ離散的に扱う²³。職業については、階級分類²⁴を用

表4 階級帰属意識の分布

数値：%	1955年	1965年	1975年	1985年	1995年
資本家階級	1.5	3.1	5.1	4.4	2.8
中産階級	23.2	29.3	22.9	27.3	27.9
労働者階級	73.5	62.3	69.6	63.9	64.6
DK	1.7	5.2	2.3	4.4	4.7
N	2,014	2,077	2,724	2,473	1,242

対象：20歳から69歳の男性のみ。

データ：75年はA票、85年は男性A票と男性B票の合併データ、95年はB票。

²³ 年齢は、20代を基準カテゴリーとする年齢層ダミー。教育は、中卒を基準とする3分類。世帯収入は低所得層を基準とする4分類。職業は、専門、大企業ホワイトカラー、中小企業ホワイトカラー、自営ホワイトカラー、大企業ブルーカラー、中小企業ブルーカラー、自営ブルーカラー、農業の8分類（基準は農業）。分析は1985年・95年についても男性のみを対象とし、無職者は分析から除外した。

²⁴ 現代日本における有力な階級論者である橋本健二の作成した階級分類（橋本1999）、そのベースであるE・O・ライトの階級分類（Wright 1978, Wright 1985）、あるいは海外の階層・階級研究で広く使わ

いるアプローチもありうるが、ここでは日本の階層研究において標準的に使用される SSM 総合 8 分類を用いる²⁵。表 5 にロジスティック回帰分析の結果を示す。

疑似決定係数を見ると、階層帰属意識と同じく 70 年代に低下し、その後関連が上昇するというパターンが見出せる。1995 年には 1955 年と同レベルにまで関連が強まっている。

しかし、回帰係数に注目すると、55 年と 95 年では重要な違いがあることがわかる。1955

表 5 階級帰属意識のロジスティック回帰分析
数値：ロジスティック回帰係数 (B)

	1955 年	1965 年	1975 年	1985 年	1995 年
年齢 (基準=20-29 歳)					
30 - 39 歳	.101	.125	.020	.099	-.232
40 - 49 歳	-.080	.208	.085	.453*	-.080
50 - 59 歳	.383*	.059	.109	.572*	.161
60 - 69 歳	.549*	.868***	.582*	.806*	.133
学歴 (基準=中卒)					
高卒	.517**	.347*	.104	.844***	.192
短大以上	.845***	.949***	.630***	1.456***	1.423***
世帯収入 (基準=第 1 四分位層)					
世帯収入 2/4	.416	.220	-.028	.376*	.407
世帯収入 3/4	1.245***	.379*	.394**	.395*	.837**
世帯収入 4/4	2.091***	.898***	.789***	.883***	1.298***
職業 (基準=農業)					
専門	-.750**	-.938***	-.141	-.168	-.278
大 W	-1.743***	-1.020***	-.114	-.310	.058
中小 W	-.934**	-.770**	-.393	-.244	-.060
自営 W	.479**	.456*	1.116***	.798**	1.189**
大 B	-3.279***	-1.606***	-1.361***	-.592*	-.619
中小 B	-1.787***	-1.782***	-.534**	-.631*	-.609
自営 B	-.746**	-.237	.115	-.051	-.179
定数	-1.894***	-.889***	-1.501***	-2.128***	-2.050***
N	1,742	1,693	2,359	1,897	832
χ^2 (d.f.=16)	310.410	298.839	309.043	273.784	188.180
-2LL	1,654.240	1,853.149	2,476.105	2,109.000	840.526
R ² ; Cox-Snell	.163	.162	.123	.134	.202
R ² ; Nagelkerke	.241	.225	.177	.188	.285

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$. 20 歳から 69 歳の男性有職者のみ。
データ：75 年は A 票, 85 年は男性 A 票と男性 B 票の合併データ, 95 年は B 票。

れている EGP 階級分類 (Erikson, Goldthorpe and Portocarero 1979) など。

²⁵ 階級帰属意識は従業上の地位にも影響されることが指摘されているため (直井 1979), 純粋に職業情報だけの分類である SSM 職業 8 分類ではなく, 従業上の地位も加味した分類である総合 8 分類を用いた。

表6 階級帰属意識と階層帰属意識の関連の変化

	1955年	1965年	1975年	1985年	1995年
γ 係数	0.592	0.607	0.497	0.594	0.663

対象：20歳から69歳の男性のみ。

データ：75年はA票，85年は男性A票と男性B票の合併データ，95年はB票。

年には全ての職業カテゴリーが統計的に有意な効果を持っているが、職業の効果は1975年に降消失し、1995年では自営ホワイトカラー以外の職業の効果が有意ではなくなっている。こうした職業の影響力の低下は三隅（1990）がすでに指摘しているが、にも関わらず、決定係数は1955年と同レベルにある。このことは、1970年代以降階級帰属意識が（設計者の意図である）階級的・職業的な利害構造を反映する意識から、学歴と世帯収入を主要因とする社会経済的な序列に関する意識へと変質したことを示唆している。すなわち、階級帰属意識における資本家・中間・労働者の区分が、マルクス主義的な生産関係による区別ではなく、単なる社会経済的な豊かさの序列構造を示すものと理解され、結果として階層帰属意識に近い漠然とした豊かさの意識に近いものになった、ということである。

このことを確かめるために、階級帰属意識と階層帰属意識の関連を分析してみよう。もし階級帰属意識が階層帰属意識に近いものに変質したのであれば、両者の関連は近年になるほど強くなるはずである。表6は階級帰属意識と階層帰属意識の関連（ γ 係数）をまとめたものである。階層帰属意識はそのまま5カテゴリーで扱ったが、資本家階級が少ないことを考慮して、資本家階級と中産階級を統合した2カテゴリーで分析した²⁶。

階級帰属意識と階層帰属意識の関連は、1975年にかけて低下し、その後上昇に転じている。おそらく、高度経済成長期における中意識の拡大と階級のリアリティの消失が関連の低下をもたらし、その後、階級帰属意識の内実が階層帰属意識に接近することによって、関連が強まったと考えられる。もちろん、これはあくまでも1つの解釈にすぎない。この解釈が妥当であるか否かは、さらに詳しい検討が必要である。

7. 結語

以上のように、SSM調査における階層帰属意識だけでなく、国民生活に関する世論調査でも「静かな変容」に適合する変化のパターンが確認できた。また、階層帰属意識のコホート分析からは、帰属意識の形成メカニズムには時代的な効果がかかなり強いらしいこと、階級

²⁶ 3カテゴリーの分析も行ったが、結果はほとんど変わらない。

帰属意識の時系列分析からは、階級帰属意識が階層帰属意識に引きずられる形で変質していく過程——「階級」をフレームとした社会認識から「階層」をフレームとした社会認識への変化——を垣間見ることができた。

本稿の知見の多くは格別新しいものではなく、すでに様々な研究で指摘されてきたことの再確認が主である。とは言え、こうした作業の積み重ねによって階層帰属意識の変化の過程と内実に、より近づくことができるだろう。

ところで、本稿および前稿（神林 2010）の議論は、社会調査データをもとに「階層帰属意識や生活程度は、なぜデータのように変化したのか」を問うものであった。しかし、階層帰属意識については、こうした計量的なデータ分析とは異なる問いのたて方も可能である。たとえば『『中流意識』という言葉はいつ頃から使われるようになったのか』、「中流をめぐる議論や言説は、社会的にどのような意味を持っていたのか」といった歴史社会学的・言説分析的な問いがそれにあたる。後者については、古くは今田（1989）、最近では森（2008）が興味深い議論を行っている。この方向での分析を併せて行うことで、日本社会における階層帰属意識の意味が、より明確に見えてくるかもしれない。

【付記】

(1) 本稿の分析を行うに当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「国民生活に関する世論調査（第 7 回・第 8 回・第 10 回）」（寄託者：三宅一郎・神戸大学名誉教授）の個票データの提供を受けた。

(2) SSM 調査データの利用にあたっては、2005 年 SSM 調査研究会の許可を得た。

付録：使用したデータの調査概要

調査概要は、(1) 調査時期、(2) 調査主体、(3) サンプルング法、(4) 対象者、(5) 有効回答者数（有効回収率）、(6) 備考、の順に記す。

1. 「社会階層と社会移動」調査（SSM 調査）調査概要

1.1 1955 年調査

(1) 1955 年、(2) 日本社会学会調査委員会、(3) 層化 2 段階抽出法、(4) 全国の 20 歳～69 歳の男性、(5) 3,677 (81.7%)、(6) 分析用データは回収サンプル 3,677 ケースを 2,000 程度に再サンプルしたものの。

1.2 1965年調査

(1) 1965年, (2) 東京大学社会学研究室他, (3) 層化2段階抽出法, (4) 全国の20歳～69歳の男性, (5) 2,158 (71.6%), (6) 分析には, 2005年SSM調査研究会より配布された収入修正データを使用した。

1.3 1975年調査

(1) 1975年10月～11月, (2) 1975年SSM全国調査委員会, (3) 多段層化抽出法, (4) 全国の20歳～69歳の男性, (5) 2,724 (68.1%), (6) A調査(本調査)データのみ使用。

1.4 1985年調査

(1) 1985年11月～1986年2月, (2) 1985年SSM全国調査委員会, (3) 多段層化抽出法, (4) 全国の20歳～69歳の男女, (5) A票=1,239 (61.0%), B票=1,234 (60.8%), (6) 男性票(A票, B票)のみ使用。

1.5 1995年調査

(1) 1995年10月～11月, (2) 1975年SSM全国調査委員会, (3) 多段層化抽出法, (4) 全国の20歳～69歳の男女, (5) A票=2,653 (65.8%), B票=2,704 (67.1%)。

1.6 2005年調査

(1) 2005年11月～2006年4月, (2) 2005年SSM全国調査委員会, (3) 多段層化抽出法, (4) 全国の20歳～69歳の男女, (5) 5,742 (44.1%)。

2. 「国民生活に関する世論調査」調査概要

ここでは, 本稿の分析で使用した個票データの詳細を示す。それ以外の時点の調査の詳細については, 内閣府の「国民生活に関する世論調査」サイトもしくは調査報告書を参照のこと。

2.1 1964年調査

(1) 1964年1月, (2) 内閣府, (3) 層化2段階抽出法, (4) 全国の20歳以上の男女, (5) 16,698 (83.4%), (6) 公開データにおける実際の標本数は16,691。

2.2 1965年調査

(1) 1965年1月, (2) 内閣府, (3) 層化2段階抽出法, (4) 全国の20歳以上の男女, (5) 16,145 (80.7%), (6) 公開データにおける実際の標本数は16,133。

2.3 1967年調査

- (1) 1967年2月, (2) 内閣府, (3) 層化2段階抽出法, (4) 全国の20歳以上の男女, (5) 16,358 (81.8%), (6) 公開データにおける実際の標本数は16,341。

文 献

- Erikson, Robert., John H. Goldthorpe., and Lucienne Portocarero. 1979. "Intergenerational Class Mobility in Three Western European Societies: England, France and Sweden." *British Journal of Sociology* 30: 415-441.
- 原 純輔 (1988) 「階層意識研究の課題と方法」『1985年社会階層と社会移動全国調査報告書 2 階層意識の動態』1985年社会階層と社会移動全国調査委員会: 1-18.
- 橋本健二 (1999) 『現代日本の階級構造—理論・方法・計量分析—』東信堂.
- 今田高俊 (1989) 『社会階層と政治 現代政治学叢書7』東京大学出版会.
- 神林博史 (2010) 「高度経済成長期の階層帰属意識—戦後日本における階層帰属意識に関するノート (1)」『東北学院大学教養学部紀要』156: 25-54.
- 吉川 徹 (1998) 「階層評価基準の静かな変容—階層帰属意識の規定要因の時系列比較—」間々田孝夫 (編) 『現代日本の階層意識 1995年SSM調査シリーズ6』1995年SSM調査研究会: 1-21.
- (1999) 「「中」意識の静かな変容」『社会学評論』50(2): 216-230.
- 小林大祐 (2008) 「階層帰属意識についての基礎分析—時点比較のための注意点—」三輪哲・小林大祐 (編) 2008 『2005年SSM日本調査の基礎分析—構造・趨勢・方法— 2005年SSM調査シリーズ1』2005年SSM調査研究会: 111-126.
- 内閣府 [旧・総理府] (1958以降の各年次) 『国民生活に関する世論調査』
- 三隅一人 (1990) 「階級帰属意識—その分析価値の消失—」原純輔 (編) 『現代日本の階層構造 2 階層意識の動態』東京大学出版会: 71-95.
- 三浦 展 (2005) 『下流社会: 新たな階層集団の出現』光文社新書.
- 森 直人 (2008) 「『総中流の思想』とは何だったのか—『中』意識の原点をさぐる」『思想地図 vol.2』日本放送出版協会: 233-270.
- 直井道子 (1979) 「階層意識と階級意識」富永健一 (編) 『日本の階層構造』東京大学出版会: 365-388.
- 小沢雅子 (1985) 『新「階層消費」の時代』日本経済新聞社.
- 佐藤俊樹 (2008) 「階層帰属意識の意味論—帰属分布と地位指標の弱い紐 weak tie—」轟亮 (編) 『階層意識の現在 2005年SSM調査シリーズ8』2005年SSM調査研究会: 103-130.
- (2009) 「階層帰属の意味論—自省的近代における『階層意識』」『社会学評論』59(4): 734-751.
- 盛山和夫 (1990) 「中意識の意味」『理論と方法』5(2): 51-71.
- 数土直紀 (2010) 『日本の階層意識』講談社.
- 友枝敏雄 (1988) 「社会的地位と階層帰属意識」原純輔 (編) 『階層意識の動態 1985年社会階層と社会移動全国調査報告書』1985年社会階層と社会移動全国調査委員会: 21-42.
- Wright, Elic Olin. 1978. *Class, Crisis and the State*. New Left Books. (=江川潤訳, 1986, 『階級・危機・国家』中央大学出版会.
- . 1985. *Classes*. New Left Books.

A Reading of *The Waste Land*

KIKUCHI Hiroshi

2. “A Game of Chess”

For the Greeks, the dog represents a thorough absence of concern for *nomos* — a complete imperviousness to social or relational values.¹ This idea also underlies “The Burial of the Dead”. Moreover, in Eliot’s *The Family Reunion*, the dog is developed into the phantom of the Eumenides who are the bearers of a curse (the Eumenides are another name for the dog-like Erinyes): “let your necrophily/Feed upon that carcass”.² Thus, in *The Waste Land*, the rite of the burial is a redemptive act to revere the dead human form against the dog, the world that desecrates everything. Žižek acknowledges that in *Antigone* and *Hamlet* there is a basic lesson drawn by Lacan: the plot of both plays involve improper funeral rites.³ And with the two plays, Žižek believes, we can measure the path traveled by “Western civilization” which finally leads to the two great traumatic events of the holocaust and the gulag. For Žižek, the funeral rite exemplifies symbolization at its purest (*ibid.*, 23). The victims in the two events are those who cannot find their proper place in history (of course, we need to note the difference between the “return of the living dead” and “the return of the dead”). Žižek says, “the shadows of their victims will continue to chase us as “living dead” until we give them a decent burial, until we integrate the trauma of their death into our historical memory”(23).

Just as the dead body is easily exposed to desecration, sex also can be easily jeopardized by desecration, upon which “A Game of Chess” turns.⁴ That the original title of “A Game of Chess” was “In the Cage”, a reference to the Cumaean Sibyl of the epigraph, already is a preliminary information. “The cage” not only suggests isolation, confinement, and entrapment, but it “is hell itself, the diabolical routines of marital powerplay”(Gordon, 179). Moreover, Southam also proffers us an evidence that the poem wears the shadows of the Grail Romances because in some of them is told a story that the hero comes to a chessboard castle where he meets a water-maiden (116).

Now, “A Game of Chess” begins with the dressing room description.

The Chair she sat in, like a burnished throne,

Glowed on the marble, where the glass
 Held up by standards wrought with fruited vines
 From which a golden Cupidon peeped out
 (Another hid eyes behind his wing)

In this section, disparate experiences, Booker points out, are amalgamated, and the past literary images also are conjured up, especially from Shakespeare's *Antony and Cleopatra* and J. Milton's *Paradise Lost* (94). Moreover, the allusion to Exodus enhances the effect of the scene: the part of Exodus that the Lord spoke into Moses for making the most holy place for Israel.

But the opening scene (ll. 77-110) can be perceived as something obscene and esoteric. In Gish's words, it is "heavy, opulent, a little nauseating" (Gish, 62), and in Southam's words, it is a pastiche of the style of "wit and magniloquence" (Southam, 116). To borrow a phrase from J. Weston, the scene itself is just like "a cauldron of plenty (of images) carried by a maiden" (*From Ritual to Romance*, 73).

Here Eliot also simultaneously evokes the sacred and profane (Southam, 116). What we find initially is "both luxury and decadence, wealth and bad taste" (Gish, 62). But "she" who is at the center of the scene has no substance. In other words, she is an empty existence in amplitude. It is unknown even whether she is a young girl, Lady, or whore. Here "the feminine object is emptied of all real substance".⁵ Brooker remarks, "Eliot's woman in the first half of 'A Game of Chess' is, like Conrad's Kurtz, the hollowness at the center of a field of hollow surfaces" (105).

Another notable feature in this scene, though is implied in the above discourses, is that the division between opposite things is blurred as is typically represented in the "drowned the sense in odours". Reeves says, "The more the visual detail accumulates, the less we can be sure of what we are seeing" (52). This effect, moreover, is enhanced by the confusions of linguistic and grammatical 'sense'. Reeves continues, "In fattening the prolonged candle-flames" and "Stirring the pattern on the coffered ceiling" show the plethora of verbs and adjectival participles...does not freshen or stir" (Reeves, 54). That is, time and space, and quality and quantity also, are "troubled and confused": "Unstoppered, lurked her strange synthetic perfumes, / *Unguent, powdered, or liquid*" [Italics are mine]. Even the distinction of the sea and wood as a larger frame of "a painting above the mantelpiece" in the scene is not clear: "a carved dolphin swam", and "the sylvan scene" which is the Miltonic allusion to Satan's reaching Eden with intent to corrupt Adam and Eve.

Here we can see the juxtaposed representation of motion and stability, present and past, in Brook-

er's words, of "tangible and intangible objects". Thus, all things in this scene are amorphous and fluid entities so that they are under suspicion, hence "the hierarchical relation of noun to adjectives is reversed" (Brooker, 103). Moreover, Eliot's philosophical idea of identity and its mutability, or subsequently of experience, supports his poetic diction: "the objects are constantly shifting"⁶ and "And the world...exists only as it is found in the experiences of finite centres, experiences so mad and strange that they will be boiled away before you boil them down to one homogeneous mass" (*ibid.*, 168). This view leads to Prospero's larger scale of worldview: "all which it (the great globe) inherit, shall dissolve" (*Tempest*, 4.1.114)

Because of its designations of ornate affluence, Brooker senses some resemblance between the dressing room description and a painting (its name not mentioned) of Jean-Honore Fragonard, whose name is always associated with the paintings of love and voluptuousness (Brooker, 101). But carefully observing the detail of it, the scene, I feel, is closer to Duchamp's art in terms of the juxtaposed representation of stability and instability (Well, Fragonard also adroitly catches stillness in movement in *The Swing*). In a sense, Duchamp's art is the conflict and collaboration of movement and stillness. Likewise, in the scene we can see the confrontation between stable forms and forces to dissolve them.

Thus, Eliot and Duchamp are common in adopting in their works a more radical strategy for undermining the stability and coherence of their own identity (Jacques Lacan follows them with the proposition that self-identity is impossible). By accident, Eliot and Duchamp are common in having their complicated relationship with women in their life. Chess, for Duchamp, was a way to live in a universe where symbolic equivalents replaced objects instead of referring to them, that is, as a kind of language.

In such a context, the story of Philomela is introduced in the form of a painting. Though the scale and diversity of Ovid's *Metamorphoses* make it hard for us to grapple with, the unifying thread of the poem, we can suppose, is an interest in identity: that a thing is it, not the others and that a person is him or her, not the others. Ovid works throughout to animate the question of who we think we are and how we think about who we think we are. Denis Feeney says, "In particular, the metamorphoses in the appalling stories of rape often capture the sensation of being forced to conceive of yourself in terms totally different from the ones you had taken for granted, ...".⁷ Eliot's reference to Philomela, depicting "the brutal acting out of lust and violation" (Gish, 63), shows his interest in identity and its forced change: "The change of Philomel, by the barbarous king/So rudely forced; yet there the nightingale/Filled all the desert with inviolable voice/And still she cried, and still the world pursues,

...” Rape, as we can see in Caliban’s view of sexuality, is so serious because it deprives the victims of freedom and enslaves them to the world of things.

Here we can see the disruption of Philomela’s self-identity, as its result, transformation, and her resistance to it in her calamity. But the savage world still pursues to contaminate her. It means that to the last Philomel cannot be free whereas Ariel was finally able to be released from his transformations controlled by Prospero. And the phrase, “And other withered stumps of time/Were told upon the walls”, a kind of the Dantean speaking picture (Reeves, 57), would be suggestive of Eliot’s struggle to tell the untellable, because they, like language, can be surmised ‘smearly paints’ which are strained with impossibility to cover the whole of reality.⁸

The scene goes on to describe another type of transformation that is not so dramatic as the story of Philomel: “her hair/Spread out in fiery points/Glowed into words, then would be savagely still”. The fixity of things is here lost. Just as the combination of oxygen and sulphur dioxide, through a filament of platinum, changes to sulfurous acid, one thing can be easily changed into others, which would result from fluid or unstable state of consciousness (*Essays*, 18). The outside of the woman mirrors the inside of her. In short, the phrase expresses the outrageous change of her feeling. In Brooker’s view, whenever the distinction (between things and words) is subverted, as in the image of the woman’s hair, the dualism of signs and things signified coalesces, for brief moments, into unity” (103). But the unity cannot be completed and soon dissolved. What is worse, the character’s personality also is broken into pieces. The syntax used here strains with importunity (Reeves, 57).

Here Eliot would have represented decadent sexuality which is epidemic in the modern world. And we here should remember Eliot’s own note: “all the women are one woman”. Therefore, all the women in “A Game of Chess” also are variations of one woman. The long description of the woman’s dressing room is ended by an allusion to a man’s appearance.

And before shifting our discussion to the next scene, I would like to browse through Thomas Middleton’s *Women Beware Women*, not only because it, as Eliot’s own note shows, is a literary source of “A Game of Chess”, but because I think that reading the work can alter our sense of “A Game of Chess”.⁹ *Women Beware Women*, we can surmise, determines the whole mood of “A Game of Chess”, because it is a keystone connecting all the effects of several allusions used in the poem. For example, “a Golden Cupidon” and “another who hid his eyes behind his wing” are not merely the classical boy gods of love but may be mischievous and blindfolded beings just like the Cupids in *Women Beware Women* who shoot and plagued Hippolito with the deadly shaft. And in the theme of rape, the story of Philomel is common with *Women Beware Women*, which also leads to the theme of

love and betrayal in *Antony and Cleopatra*.

Moreover, one of the side-issues of *Women Beware Women* has some concern with Exodus in terms of what the proper ritual should be: “holy ceremonies/Were made for, sacred uses, not for sinful” (152). And even a Brooker’s finding that the woman’s room becomes a parergon that displaces its central figure, the woman herself, can be seen in more primitive literary form of “the animated house parodies” in *Women Beware Women*.¹⁰

Now, according to Brooker, “A Game of Chess” develops Eliot’s exploration of different ways of ‘knowing’, in particular, of what could be called ‘female epistemology’ and of the necessity that it be complemented by ‘male epistemology’ and, further, of the necessity that both be transcended” (96). So under this scheme, let’s try to read the next scene.

‘My nerves are bad to-night. Yes, bad. Stay with me.

‘Speak to me. Why do you never speak. Speak.

‘What are you speaking of? What thinking? What?

‘I never know what you are thinking. Think.’

‘I think we are in rats’ alley

Where the dead men lost their bones.

‘What is that noise?’

The wind under the door.

‘What is that noise now? What is the wind doing?’

Nothing again nothing

‘Do

‘You know nothing? Do you see nothing? Do you remember

‘Nothing?’

I remember

Those are pearls that were his eyes.

‘Are you alive, or not? Is there nothing in your head?’

But

OOOO that Shakespetherian Rag ——

It's so elegant

So intelligent

'What shall I do now ? What shall I do ?

'I shall rush out as I am, and walk the street

'With my hair down, so. What shall we do to-morrow ?

'What shall we ever do ?'

The hot water at ten.

And if it rains, a closed car at four.

And we shall play a game of chess,

Pressing lidless eyes and waiting for a knock upon the door.

Gish explains this scene, "the voices of the couple interact but do not connect : she demands ; he remains withdrawn and separate. In one sense, this is a replaying of the Hyacinth garden scene without the veil of innocence and wistful desire. In both scenes woman makes a claim to affection, communication, or response, and in both the narrator fails" (64). Here one-sided questions are incessantly repeated by "the neurotic woman" (Gish, 64).

Before following the stream of the dialogue, I would like to touch the two utterances which would come from the woman's mute listener : "I think were in rats' alley/Where the dead men lost their bones" and "I remember/Those are pearls that were his eyes". The former lines are a literary storage Eliot has inherited from Joseph Conrad, and the latter ones are Aerial's song taken from *The Tempest*. Both carry the image of death. From Conrad, Eliot learned the piercing insight to go beyond the limits of ordinary cognition and to sense the death that lurks behind everything : "...the grass growing through his ribs was tall enough to hide his bones" (*Heart of Darkness*, 13) and "And for a moment it seemed to me as if I also were buried in a vast grave full of unspeakable secrets" (*ibid.*, 62).

Moreover, in the phrase "Those are pearls that were his eyes" taken from *The Tempest*, we can no longer hear the sound of the immortal that Aerial's song originally possessed, because we know that Sordido's parodies of feminine beauty in *Women Beware Women* show that the pearls are characterized as the "eye-disease of cataracts" (101). An echo of the "leprous inclination" in *Women Beware Women* also can be seen in the mention of Lil who has bad teeth, because in *Women Beware Women* the disease of scurvy leads to teeth loss (79). In this respect, the world depicted in "A Game of Chess" much deteriorated in contrast to that in *The Tempest*.

In order to grasp this scene well, I would like to attend to Lacan's idea of hysteria. Firstly, let's re-

member again the three fundamental dimensions of Lacan, the Real (the ‘hard, traumatic reality which resists symbolization), the Symbolic (the field of language, of symbolic structure and communication), and the Imaginary (the domain of images with which we identify, and which capture our attention). To make a further speculation on the interaction between the Real and the Symbolic, we have the Real as the foundation of the symbolization, in this point, the Real is what precedes the Symbolic. But at the same time the Real is what is left over by symbolization, appearing only as a failure or void in the Symbolic, in other words, the Real is in itself a hole, a gap, an opening in the middle of the symbolic order.¹¹ Therefore, the Real is not a transcendent positive entity but absolute immanent to the Symbolic. It resists symbolization and, at the same time, tries to neutralize it, to integrate it into the symbolic order. Because of its immanence to the symbolic, the Real cannot be positively signified (*Fantasies*, 217).

In this process, the subject is nothing but the failure point of the process of his(or its)symbolic representation (*Sublime*, 173), because if we could apprehend the Real directly, we, as subjects, would disappear. The subject is, in other words, a void. Our status as subjects, as subjective beings, issues directly from our failure to integrate fully in the Symbolic. The failure of the Symbolic is, therefore, strictly correlative with the creation of subjectivity. The subject is precisely that part of us which dissociates itself from the big Other (i.e.,the communal network of social institutions, customs, and laws as our “second nature”) in the form of the hysteric’s “*Che vuoi ?*”, which in Žižek means “What does the big Other want from me ?”

To sum up again, the Real *par excellence* is *jouissance*. In this point, enjoyment is the manifestation of the Real. But the subject can never ‘subjectivize’, assume, integrate the traumatic Thing *jouissance*, because it is always-already here and, precisely as such, always-already lost. Then, the subject is the ‘decenterment’ not only to the big Other but to *jouissance*, always-already displaced, out-of-joint with regard to it. This is so-called “decentered subject”. Moreover, Žižek remarks, “What characterizes the fundamental subjective position of a *hysteric*...is precisely the ceaseless questioning of his or her existence qua enjoyment” (*Fantasies*, 49).

As Žižek says, Lacan’s starting point is that symbolic representation always distorts the subject (*Sublime*, 175). Therefore, the subject is denoted by S, the crossed, blocked S, a void, an empty place in the signifier’s structure (*Sublime*, 72). The subject denoted by these notations is the pure void with no positive substantial content, with no wealth of experiences to fill its void. Further, the crossed or barred subject is the correlate of \bar{A} (the barred Other) which is deficient in its relation to the Real.

Hysteria is one of the two forms of neurosis, because hysterical and obsessional neurosis make a symmetrical opposition (*Sublime*, 191). Žižek develops Lacan's idea of hysteria. The subject is always fastened, pinned, to a signifier which represents him for the other, and through this pinning he is loaded with a symbolic mandate, he is given a place in the intersubjective network of symbolic relations (*Sublime*, 113). But the subject does not know why he is occupying this place in the symbolic network. In the network you demand something of me, but what do you really want, what are you aiming at through this demand? The hysteric is reluctant to assume desire as his or her own, and seeks instead to desire from the position of someone else. In other words, the hysteric is never clear what the Other wants and is therefore always plagued by a kind of self-doubt, manifest in a recurrent questioning. Thus, this split between demand and desire is what defines the position of the hysterical subject (*ibid.*, 111).

Žižek presents a feature that a hysterical neurotic cannot bear waiting. When the hysterical neurotic feels that he/she 'doesn't know what he/she really wants', he/she addresses the question concerning his/her desire to the other. In Žižek, hysteria is equated with 'failed interpellation'. The hysteric is uncertain in the face of interpellation: "I may recognize the mandate, but is it really meant for me? What we can see in this scene of "A Game of Chess" is this kind of pathology. Here is a different silence from that in the episode of the hyacinth girl. The woman repeats her neurotic utterances and asks the silent listener to speak with her, to tell her his thoughts. She demands and he remains withdrawn and separate (Gish, 64). This one-sided dialogue results in the woman's recognition that there is nothing at the heart of his subject.

Judging from the above, Brooker's conjecture that the woman in this scene may be a ghost is not curious at all. And if we push the conjecture a little further, her visitor also can be a ghost because the effect of the scene is recursive. In a sense, they are forced to share nothing with each other: "her echoing of the man's vacant thoughts (Reeves, 59). They together have no memories, ideas, feelings as the contents that could fill up the void of subject. Therefore, the effect of the whole scene can be, even if not a ghost itself, ghostly. If *Hamlet*, as Brooker points out, is a major subtext especially in this section, the scene surely reminds us of Hamlet who, startled by the spirit of his father, asks his mother if she sees it. Likewise, startled by wind, the woman asks her visitor what it is. As Brooker says, the wind may mean spirit or the absence of spirit, or may be only wind.

But it, to me, seems a specter who threatens the frontier(or the door) of the realm of our being, who lives in precisely the place "between two deaths", the forbidden domain of the Thing (hereafter I identify this notion with that of the Real). The Thing is the point just outside the scope of symboliza-

tion, where *Ate* lives. *Ate* denotes a horrifying limit which cannot ever be reached.¹² That is, specters appear in the horrific place where we cannot make 'real death' coincide with 'symbolic death'. Žižek says, "This place 'between the two deaths', a place of sublime beauty as well as terrifying monsters, is the site of *das Ding*, of the real-traumatic kernel in the midst of symbolic order (*Sublime*, 135). When we are excluded from the Symbolic, we can never endure the Real without fantasy, which is a construction allowing the subject to come to terms with its traumatic kernel (*ibid.*, 133). Fantasy both shields us from the Real and transmits it. Then we are forced to suffer a living death and to be exterminated from our subject positions because we no longer exist for the Other. In contrast with this, the subject acts ethically when she passes through the realm of desire which is symbolic and into that of the drive, especially the death drive which is anchored in the Real.

In Antigone's case, her exclusion from the symbolic community of the city, precedes her actual death and imbues her character with sublime beauty (*ibid.*, 135). And in Hamlet's case, his father is dead in the Real. However, he persists as a terrifying and monstrous apparition because he was murdered and thereby cheated of the chance to settle his Symbolic debts. Once that debt has been repaid, following Hamlet's killing of his murderer (Claudius), he is completely dead.

To return to "A Game of Chess", in "Shakespearean Rag", the word "Shakespearean" is the synecopation of Shakespeare, and 'rag' originally began as dance music in the red-light districts of American cities such as St. Louis and New Orleans, which is associated with lewdness, just as 'jig', popular music in Shakespeare's time, was. And it is informative for us to know that Eliot was thinking of 'The post-war ragtime world, the jazz world of 1920, restless, aimless, hectic, fearful, futile, neurotic (Southam, 119). And Southam points out that 'O,O,O,O' is Hamlet's last utterance. The lines, "What shall I do now? What shall I do?/I shall rush out as I am, and walk the street/With my hair down, so. What shall we do/tomorrow?/What shall we ever do?" show that the characters in the scene are inactive. The phrase, "I shall rush out as I am, and walk the street/With my hair down, so", at a glance, seems to embrace a motive for action, but it is only the hysterical 'acting out'.

According to Žižek, in the hysterical acting out, the subject stages, in a kind of theatrical performance, the compromise solution of the trauma she is unable to cope with (*On Belief*, 84). Then, 'acting out' is a kind of pseudo-act. In this case, a divided subject cannot be the subject of an act. In other words, in an act, as discussed below, there is no divided or barred subject. In any case, they are involved in a kind of Hamletian impotence in action. Next, the topic touches "the boredom of an empty day" (Southam, 119): "The hot water at ten./And if rains, a closed car at four". And then "chess game" inset comes in. Gish remarks, "The last line, alluding to the game of chess in *Women*

Beware Women, links chess and seduction, reasserting the persistent background of sexual betrayal” (64).

The work of Middleton weaves a story of corrupted lives in a material and sensual time, when is “relevant to the generations between and after the two World Wars” (Richard Dutton, vii). Throughout the work, a perception of women as sexual possessions and playthings recurs. Therein women are described as negotiable commodities in the sexual market-place. In a sense, women are “locked up” or “caged in” by men. Men abuse women, but women are not only passive but active in liaison, conspiracy, and murder. In such a society, women are not only pawns but live for the advancement of the men who can manipulate them, so that they exist as objects for the gratification of men. This is clearly represented in the chess game that Livia and Bianca’s mother-in-law play while Bianca is betrayed. Eliot assesses that Bianca is a woman of the type who is purely moved by vanity (*Essays*, 166). On the other hand, Livia is a multiple bawd and murderer. Although she has free-thinking on the situation of women in general, she eventually is subject to the social system of patriarchy.

In *Women Beware Women*, chess is a game about power, therefore about life. The game finally leads to Hippolito’s bitter awareness: “Lust and forgetfulness has been amongst us,/And we are brought to nothing”. Thus, “A Game of Chess” is also dyed by Eliot’s interest in “a profound and permanent moral value and horror” which Middleton’s works have (*Essays*, p. 170). Like Middleton, Eliot here tries to be a realistic observer of a dysfunctional society. And the woman’s horror, being haunted by wind (or specters), can be duplicated by the allusion to the wind by which Paolo and Francesca are incessantly being driven around because of the sin of lust (“Inferno”, Canto V).¹³ In any case, the drama of their mutual tension and isolation in this scene is played out without change or resolution (Gish, 64). The gap between the man and woman is not yet filled in.

The pub scene begins with the talk of Lil’s friend which is a truncated form of Lily, the flower of Easter (Brooker, 112): “When Lil’s husband got demobbed, I said —”. Gish’s explanation provides us with a relevant clue to understand the scene: “The background of rape, deception, and violence is moved to the fore as the sordid conditions of Lil and Albert’s relation” (64). In Brooker’s terms, the scene is a ‘diptych’ with a Shakespearean frame. But Eliot’s literary manner of ‘diptych’ cannot be restricted to *The Game of Chess* but spreads over the whole of *The Waste Land*; at least it is used in important parts. When I said that behind the image of dog the story of Antigone is hidden, what I meant is this notion of ‘diptych’.

Like a waste land in myth, Lil is a woman in bad health perhaps because of an abortion. Her reward is to be blamed for no longer being sexually desirable. Albert (it is already known that this

name is common for many boys born in Queen Victoria's reign) has come back brutalized by the war and feeling a right to some release and pleasure (Gish, 65). The Lil's friend warns that Albert, if meeting Lil again, may be disgusted with Lil's appearance and threaten her for someone who is still able to give him a good time. Moreover, her talk reveals the miserable reality of the modern desperate couple. Lil herself is dominated by her fear that Albert will leave her. And during the talk, the barman's calls for closing time are repeatedly interjected, by which we know this is just chat in a pub. Gish says that through her talk slices of modern life are characterized by tension and futility but unconnected to any deeper meaning (67). And in this setting what is more important is the role the friend plays there. She plays the role of a kind of bawd, just like the Mother in *Women Beware Women* unconsciously plays a bawd by providing her house for men and women.

The friend's impudent talk "What you get married for if you don't want children?" shows that the marriage between Lil and Albert cannot be considered for love but only for leaving their heirs, or for sustaining their biological genealogy, a vulgarized version of Erasmus Darwin's thought that had been a mainstay of British philosophy since the Georgian era. Then Lil is bound to feel her existence and health is contingent on male potency and continence. Lil is being destroyed by both fertility and an effort to avoid it (Brooker, 114). But in due time, Albert will vanish. And it is already specified by many critics that the last lines of the scene, repetition of "Goonight", are a reflection of the pathetic farewell words of Ophelia. As she was accused of being a whore by Hamlet, she is already dead in the symbolic order.

As Brooker points out, if Albert is the source of Lil's suffering and if she has become sick and perhaps barren by being treated as an adjunct of Albert's lust, Lil would best fit one of Lacan's formulae of sexuation, seemingly anti-feminist thesis: "Woman is a symptom of Man". To be sure, Lil is not merely a slovenly woman, but she is, we can say, just an effect of Albert's 'fault'. When Lil doesn't know how to answer for Albert's demand, she, like Kundry in Wagner's *Parsifal* as 'the symptom of man', is caught in a cataleptic torpor, moreover, is "caught in the hysterical game of demanding that he refuse her demand" (*Tarrying*, 186-7). The phrase "if you (Lil) don't give it him (Albert), there's others will" implies that Lil tempts Albert to do so. The thesis of Lacan seems little different from Otto Weininger's theory that "when man fails to fulfill his spiritual potential (his true desire), this failure manifests itself in the creation of woman (as a symptom)". Therefore, Eliot's depiction of Lil is close to both Weininger's and Lacan's view of woman. But, strictly speaking, quite the opposite is the case of Lacan.

According to Lacan, 'woman' and 'man' are not biologically givens but two modes of the failure of

Symbolization. The failure of Symbolization signifies that language cannot define a determinate category of ‘woman’. For Žižek also, the terms ‘man’ and ‘woman’ are not biological distinction or gender roles. Following Lacan, Žižek discusses ‘woman’ as ‘non-all’, unlike ‘man’, falls short of being a universal concept. Therefore, all attempts to generalize woman into existence seem doomed to fail. In other words, she cannot be constituted as an object of knowledge. In a sense, woman’s non-existence actually represents the radical negativity which constitutes all subjects. The inability of the symbolic to account for woman confirms that she is the subject *par excellence*. In other words, this capacity on the part of the feminine to be the symptom of man is precisely what makes her the true subject. Unfortunately, Lil cannot reach this stage, unlike Celia in *The Cocktail Party*.

After all, our sexuality is the product of the entanglement of the living body in the Symbolic Order. Therefore, there is not a perfect fit between the two because if there were, the Symbolic Order could not actually exist. Thus, ‘masculinity’ and ‘femininity’ are presented as two conflicting and internally contradictory attempts that are neither the same as each other, nor yet complementary, but heterogeneous and incompatible. This absence of co-ordination between ‘masculine’ and ‘feminine’ positions is what gives rise to ‘the real of sexual difference’. It is only through this primordial condition of difference that we arrive at some universal idea of the human being.

Brooker also finds this feature in *The Waste Land*. Invoking the difference between mythical knowledge and epistemological one, Brooker observes, ‘In myth, female closeness (i.e., perception) and male remoteness (i.e., reason) form the complementary conditions for both health and knowledge. In *The Waste Land*, such complementarity does not exist, ...’ (116). And he goes on to say, ‘In ‘A Game of Chess’, the focus is upon the disconnection of men from women and upon all that such a rupture implies’ (116). Therefore, we need to fully aware of the lapse of this view from the harmonious view of male-female relationship. For Eliot also, the route to arrive at the universal begins only with the fundamental schism between sexes.

As Gish observes, Lil and other women in “A Game of Chess”, are “the lady of situations” as all the women characters in *Women Beware Women* are so. In contrast, Antigone, in order to preserve one thing, her fidelity to the Thing, is ready to give up on everything else (marriage, children...). Žižek says, “So Antigone is sublime in her sad enumeration of what she is sacrificing” (*Fragile*, 154). In this act, Antigone is not ‘divided’ or ‘barred’ subject but whole or ‘all’. Then she becomes the substance itself underlying all the symbolic identities, that is, not a wife, daughter, sister or mother but *a woman*.

According to Žižek’s *Gaze and Voice as Love Objects*, the sudden emergence of the figure of the

hysterical woman (in the works of Richard Wagner, Franz Kafka, Edvard Munch, and others) announced a crisis of sexual relationship in whose shadow we continue to live.¹⁴ Thus, “A Game of Chess” also is in the shadow. All the works are common in expressing the horror of recognition — the recognition that at the heart of the subject there is nothing.

Žižek asserts, “The Real as the terrifying primordial abyss that swallows everything, dissolving all identities, well known in literature in its multiple guises, from Poe’s maelstrom and Kurtz’s “horror” at the end of Conrad’s *Heart of Darkness* to Pip from Melville’s *Moby-Dick* who, cast to the bottom of the ocean, experiences the demon God” (*The Puppet and the Dwarf*, 66). L. Gordon probed a mutual susceptibility to horror in the Eliots. She says, “For Eliot, horror mounted swiftly to a vision of hell”.¹⁵ And this proclivity of Eliot to horror is evinced in his criticism as follows: “No doubt *The Jew of Malta* or *Titus Andronicus* would have made the living Seneca shudder with genuine aesthetic horror; but his influence helped to recommend work with which he had little in common” (*Essays*, 79) and “he (John Ford) is certainly double-stressing the horror, which from that moment he will never allow you to forget; but if he did not stress the horror he would be the more culpable” (*ibid.*, 197). For Žižek, the end of classical subjectivity is the very point of the emergence of the modern hysterical subject, and the end of the opera coincides with the emergence of psychoanalysis (*Tarrying*, 165).

Though Eliot’s enthusiasm for Wagner would not always be constant, Wagnerian dramas are deeply rooted in *The Waste Land*. Roger Scruton explains Wagner’s great experiment: “To reverse Jessie Weston’s famous thesis, Wagner devised a new task for art: to retrace the steps from romance back to ritual, to move backward from the open, self-explaining narrative to the rite in which the human truth can be shown but not told” (*op.cit.*, 195). And he adds, “*The Waste Land* opens doors into strange interior scenes, in each of which some ritual is being repeated without explanation” (*ibid.*, 195). Eliot’s sympathy, I think, is mainly with Wagnerian heroes who, through ritualization, express “the horror at being condemned to a life of eternal suffering”. Žižek considers that, from *The Flying Dutchman* to *Parsifal*, the fundamental matrix of Wagner’s universe is man’s redemption through woman’s self-sacrifice (*Tarrying With The Negative*, 182). What we can see behind the formula “Woman is a symptom of Man” would be this landscape.

As usual, I would like to thank Professor Scott Watson for reading, checking, and commenting the manuscript.

Notes

1. Martha Nussbaum, *The Fragility of Goodness : Luck and Ethics in Greek Tragedy and Philosophy*, Updated Edition (Cambridge University Press, 1986), p. 414.
2. T.S. Eliot, *The Complete Poems and Plays* (Faber & Faber, 1969), p. 311.
3. Slavoj Žižek, *Looking Awry : An Introduction to Jacques Lacan through Popular Culture* (MIT Press, 1992), p.23.
4. Roger Scruton, *Death-Devoted Heart : Sex and the Sacred in Wagner's Tristan and Isolde* (Oxford University Press, 2004). I adopted the word 'desecration' from Scruton.
5. *The Žižek Reader*, ed. By Elizabeth Wright and Edmond Wright (Blackwell Publishers, 1999), p. 151.
6. T.S. Eliot, *Knowledge and Experience in the Philosophy of F.H. Bradley* (Faber and Faber : London, 1964), p. 155.
7. Ovid, *Metamorphoses*, tr. By David Raeburn with an Introduction by Denis Feeney (Penguin Books, 2004).
8. See Sarah Kay, *Žižek : A Critical Introduction* (Polity Press, 2003). I borrowed the idea of 'smeary paints' from Sarah Kay. And I am indebted for some discussions to Tony Myers, *Slavoj Žižek* (Routledge, 2003).
9. Thomas Middleton, *Women Beware Women and Other Plays*, ed. With an Introduction and Notes by Richard Dutton (Oxford World Classics, 1999).
10. *Women Beware Women*, ed. By J.R. Mulryne, Revels Student Edition (Manchesters U.P., 2007), 16.
11. Slavoj Žižek, *The Sublime Object of Ideology* (Verso : London New York, 1989). Hereafter cited as *Sublime*.
12. Slavoj Žižek, *Tarrying With The Negative : Kant, Hegel, and the Critique of Ideology* (Duke University Press, Durham, 1993), p.115. Hereafter cited as *Tarrying*.
13. Dante Alighieri, *The Divine Comedy*, Modern Library College Editions (Random House, 1932).
14. Slavoj Žižek, *Gaze and Voice as Love Objects* (Duke University Press, 1996), p. 2.
15. Lyndall Gordon, *T.S. Eliot : An Imperfect Life* (W.W. Norton & Company : New York London, 1998), p. 180.

Tilesius und Japan (4. Teil)¹

Sein Kontakt zu Thunberg und das Verzeichnis der Tilesius-Illustrationen in der Leipziger Universitätskustodie

Frieder Sondermann und Günther Sterba

Vorbemerkung : Tilesius als naturkundlicher Reiseillustrator

Spätestens seit der Publikation des *Atlases zur Reise um die Welt* (St. Petersburg, russ. 1813 und dt. 1814) ist allgemein bekannt, dass der auf der „Nadeshda“ mitreisende Naturforscher Wilhelm Gottlieb Tilesius (1769-1857) ein guter Zeichner war, weil er nicht nur für diese offizielle Publikation durch den Kapitän Adam Johann von Krusenstern sondern auch für den Reisebericht (1812) seines von ihm wenig geschätzten Kollegen Georg Heinrich von Langsdorff farbige Vorlagen für die Kupferstiche anfertigte. Tilesius beklagte sich oft über die langsame und mangelhafte Umsetzung seiner Zeichnungen durch die russischen Kupferstecher, wie z.B. sein Brief vom 21. November 1810 aus St. Petersburg an den mitgereisten Astronom Johann Caspar Horner belegt² :

¹ Vgl. die vorausgegangenen Artikel in dieser Zeitschrift

Tilesius und Japan (Teil 1) : Tagebuchauszüge über Ankunft und Aufenthalt in Nagasaki 1804/5. In : Tohoku Gakuin Daigaku Kyoyogakubu ronshu (Faculty of Liberal Arts Review, Tohoku Gakuin University) No. 154 (2009, Dec.) S.105-147 [東北学院大学, 教養学部論集, 第154号, 2009年12月, 105-147頁]

Tilesius und Japan (Teil 2) : Tagebuchauszüge über die Rückreise von Nagasaki nach Kamtschatka 1805. In : Tohoku Gakuin Daigaku Kyoyogakubu ronshu No. 155 (2010, March) S. 21-53 [東北学院大学, 教養学部論集, 第155号, 2010年3月, 21-53頁]

Frieder Sondermann und Günther Sterba : Tilesius und Japan (3. Teil) : Allgemeine Bemerkungen zu Japan und Bibliographie seiner Schriften. In : Tohoku Gakuin Daigaku Kyoyogakubu ronshu No. 156 (2010, June) S. 55-94 [東北学院大学, 教養学部論集, 第156号, 2010年7月, 55-94頁]

Die hier folgenden Ausführungen finden sich in verkürzter, illustrierter Form im japanischen Aufsatz テレジウスと日本 — 19世紀における博物面の東西交流 — [Tilesius to Nippon - 19 seki ni okeru hakubutsumen no tōseikōryū [Tilesius und Japan — Ost-westliche naturkundliche Bildkontakte im 19. Jahrhundert, übersetzt und bearbeitet von Tomoyuki Ogawa]. In : オムニウイデンス — 東北大学総合学術博物館 ニュースレター [Tōhoku daigaku sōgō gakujutsu hakubutsukan newsletter] Omnividens (Newsletter des Naturkundemuseums der Tohoku Universität) 2010.1 No. 34, S. 2-5 .

² Das Original des Briefes befindet sich in der Zentralbibliothek Zürich, Horner Nachlass, Ms M.5.118. Bei dem im Brief genannten Geizhals handelt es sich um den Gründer der Petersburger Kupferstecherakademie Ignaz Sebastian Klaubner (1758-1817). Aus der Familie Tschesky war vor allem Ivan Vasilyevich (1777-1848) für den *Atlas* aktiv.

Noch immer, lieber *Horner!* vegetire ich hier und versauere hier im Lande der Bären und Wölfe, kann und soll nicht fort — wenigstens nicht eher bis *Krusensterns Opera* gedruckt sind. Noch manches feine Bildchen ist hinzugekommen und fast ekeln mir die ersten vor den letzten, leider aber haben nicht alle die *Tscheskijs* gestochen und meine Naturhistorie ist mir vollends durch den Geizhals (*Klauber*) verhunzt — [...] Ich bin neugierig zu erfahren, wie Sie mit dem Atlaße zufrieden sind? — schlecht und gut alles bunt durcheinander, wie die *Klauberschen Eleven* — meine Zeichenfehler sind treu copirt, aber nicht die Aehnlichkeit / in meinen Nationalköpfen, *Sakesaburro*, *Sosoimon*, *Skiseuma Sakuhitiro*, *Kettenue Tapege*, *Mufau* etc. Schreiben Sie mir doch gelegentlich Ihre Meynung darüber, Ihre beyden Zeichnungen *Nossa Senhora de Desterro* und *Sta. Cruz auf Teneriffa* haben auch keine sonderliche Stiche geliefert, sowie mir auch *Tarras Laki St Helena* und das abscheuliche große Blatt mit dem Fischfalken in *Nangasaki* durchaus nicht gefällt. Mir gefällt eigentlich keines so, wie *Megakasaki* [!] mit dem *Chin. Magazin* und dem Fürstenbote von *Tschesky*. Hätte ich aber gewußt, daß ich den vielen Kram, den ich damals gezeichnet habe, auch alle noch müßte aufs mühsamste ausführen (weil diese Elenden nach keinen Skizzen stechen können) und daß mich dieses Ausführen und *Corrigiren* etc. noch 5 Jahr aufhalten würde hätte ich sogar voraus gewußt, daß manches so schlecht ausfallen würde und daß ich überdies noch alles was ich gezeichnet habe, beschreiben und erklären müßte (ein höchst ekelhaftes Geschäft — das Widerkäuen —); so würde ich kaum so viel — aber manches beßer und wichtigere geliefert haben.

Dennoch blieb seine Leistung in den Augen der Reisegefährten unangefochten.

Dass er sich mit den besten Künstlern dieses Genres maß, belegt sein Selbstbewußtsein. Auf James Cook's zweiter Weltumseglung war William Hodges als Maler 1772–1775 an Bord gewesen. Tilesius notierte bei einem Vergleich von Kamtschadalenportraits³: „1) weil Hodges ein beßerer Portraitmaler war, als ich“.

Die so tragisch gescheiterte französische Expedition in den Pazifik unter La Pérouse hatte dennoch nachträglich 1797/1798 zu einer illustrierten Publikation geführt. Teilgenommen hatten neben den drei Naturforschern auch drei Künstler: Gaspard Duché de Vancy und die beiden Herrn Prévost (Onkel sowie Neffe). Bei der anschließenden Suchexpedition nach dem verschollenen La Pérouse unter d'Entrecasteaux wurde eine bildliche Dokumentation vor Ort durch den Biologen Jacques Labillardière vorgenommen und in der *Relation du Voyage à la Recherche de la Pérouse* (1799/1800) veröffentlicht.

Weil sowohl auf der englischen wie auch den beiden französischen Expeditionen die gleichen Gegenden im Nord- und Südpazifik angelaufen wurden, musste es bei den Illustrationen zwangsläufig zu Vergleichen in der Motivwahl und Ausführung kommen. Sie waren daher Gradmesser für die Qualität und Quantität des Krusensternischen *Atlases* 1813/1814.

³ Hier zitiert nach dem Original in: Mühlhausen, Stadtarchiv, Bibliothek Tilesius, Nr. 82/405.

Viele Vorlagen zu den Buchillustrationen von Tilesius sind heute noch vorhanden und lassen sich bewundern, denn sie liegen vorwiegend in russischen und deutschen Archiven. Manche kann man inzwischen im freien Handel erwerben.⁴ Tilesius hat von etlichen Motiven selber Kopien angefertigt und an Freunde und Kollegen verschenkt, oder Andrucke koloriert und versandt. Der künstlerische Reiz übertrifft in manchen Fällen sogar den dokumentarisch-wissenschaftlichen Wert.

Es ist belegbar, dass Tilesius sich bei seinen Personendarstellungen durch Vorlagen anderer Künstler inspirieren ließ.⁵ Solche Anleihen künstlerischer Art sind nicht als geistiger Diebstahl angesehen worden, selbst wenn das Muster nicht genannt wurde, denn es war gängige Praxis.

Auch findet sich der Name Tilesius auf Darstellungen von Szenerien, bei denen er nachweislich nicht Augenzeuge war. So hat er etwa für Langsdorff Skizzen aus Alaska und Kalifornien für den Druck verschönert, obwohl er selber nie Fuß auf nordamerikanischen Boden setzte.⁶

Ein etwas ungewöhnlicher Grenzfall ist es allerdings, wenn unter einer seiner nicht publizierten Illustrationen die Notiz : „Dr. Tilesius ... ad naturam pinxit“ steht, obwohl es sich offensichtlich um die Kopie einer fremden, ungenannten Vorlage handelt. Darüber soll im folgenden berichtet werden.

A. Tilesius' Meerestierstudien in Japan

Während des halbjährigen Aufenthaltes in Nagasaki 1804-1805 hatte Tilesius viel Zeit, um sich vertiefenden ichthyologischen Studien zu widmen, weil der russischen Delegation der freie Landgang von japanischer Seite verwehrt war. Er hatte sich seit seiner Forschungsreise nach Portugal 1795-1796 auf das Studium der Meerespflanzen und -tiere eingelassen und 1801 in Leipzig seine Dissertation⁷ *De respiratione Sepiae officinalis L.* über Tintenfische publiziert. Vorausgegangen war ein Artikel „Zergliederung des Tintenzurmes (Sepia officinalis Linn.)“.⁸ Im offiziellen *Atlas*-Bildband der

⁴ Selbst für handkolorierte Andrucke von Tilesius' Illustrationen werden inzwischen mehrere tausend Euro gefordert.

⁵ Vgl. Elena Govor : *Twelve Days At Nuku Hiva - Russian Encounters And Mutiny In The South Pacific*. Honolulu : University of Hawai'i Press 2010, S. 104-107 über die Vorlagen von Jean Piron. Interessant ist auch die Vorstudie zu den dortigen Eingeborenen mit „klassischen“ Posen, angefertigt vom Astronomen Johann Caspar Horner, im Völkerkundlichen Museum Zürich (VMZ, Horner Collection, Nr. 820-2_06v).

⁶ Insofern müsste die Information zu den Langsdorff-Bildern aus Nordamerika in der Robert B. Honeyman Collection der Bancroft Library in der UC Berkeley etwas präzisiert werden.

⁷ Vgl. den genauen Titel Nr. 12 in der von Sterba verfassten Tilesius-Bibliographie, die jetzt auch im Internet abrufbar ist, abgedruckt in : Tohoku Gakuin Universität, *Kyoyo gakubu Ronshu* No. 156, (Juli 2010) , S. 76-90. Zu ergänzen ist bei der lfd. Nr. 73, dass der Artikel in der *Zeitschrift für die organische Physik* 1833, III. Bd., 2.H., S. 251-257 mit 1 Illustr. wieder abgedruckt wurde.

⁸ In : *Beiträge für die Zergliederungskunst* (Hrsg. Isenflamm, H.F. und Rosenmüller, J.C.), Bd.I, Heft 2, S.72-136, Tab.III. Karl Tauchnitz, Leipzig,1800. Mit dem Text in dem anonym erschienenen Buch *Fische und Krebse*

Weltumseglung präsentierte Tilesius 1813 auch Skizzen von Tintenfischen.⁹ Und noch am 1. Mai 1836 äußert er in einem Brief an den Frankfurter Naturforscher Eduard Rüppell¹⁰:

... ich habe mehrere neue Fische bisher unter der Feder gehabt, unter welchen der merkwürdigste die *Rhina Aristotelis*, die seit dem kein Naturforscher wieder erwähnt zu haben scheint und deßen Existenz *Rondelet* und *Bloch* gerade zu wegleugnen und den *Aristoteles*, weil sie nichts als den Europäischen großen dickhäutigen Meerengel kennen[,] eines Irrtums beschuldigen, als sey es eine Unmöglichkeit daß eine *Squatina* ein farben wechselndes Thier seyn könne wie es die *Sepien Loligines Sepiolen* und MeerPolypen sind.

Man darf also davon ausgehen, dass Tilesius diese Tiere in- und auswendig kannte.

Das im Laufe des 18. Jahrhunderts angesammelte Basiswissen über die Tiergattung der Kopffüßler (Cephalopeden) findet sich natürlich in den damaligen Lexika¹¹, z.B. im von Johann Heinrich Zedler herausgegebenen *Universal-Lexikon* in den Artikeln zum Blackfisch, und gegen Ende des 18. Jahrhunderts dann in der *Oeconomisch-Technologischen Encyclopädie* von Johann Georg Krünitz - abgesehen von Spezialwerken wie der Abhandlung von Johann Gottlob Schneider¹².

Von diesen gelehrten zoologischen Untersuchungen war in Japan damals kaum etwas bekannt. Die japanischen Offiziellen versorgten sowohl die auf dem Schiff verbliebene Mannschaft wie auch die an Land in einem durch einen Bambuszaum abgeriegelten Gästehaus untergebrachte Gesandtschaftsgruppe mit Verpflegung. Dazu gehörten eben auch schmackhafte Fische. Der wegen seines Zerwürfnisses mit dem Gesandten Nikolai Petrovich Rezanov auf der abgetakelten und reparaturbedürftigen „Nadeshda“ verbleibende Tilesius konnte in aller Muße Dutzende von Fischen wissenschaftlich dokumentieren, bevor sie verspeist oder weggeworfen wurden. Sein Tagebuch enthält seitenlange Beschreibungen ihm gelieferter Spezies japanischer Fische und anderer Meeresbewohner. In Kru-

des adriatischen Meerbusens. Triest 1796 (S. 45-48: „Der Tintenfisch. La Seppia“) hatte Tilesius nichts zu tun, jedenfalls hat er sich nie dazu bekannt.

⁹ Auf der Tafel LXXXVIII stellen die Figuren 32 bis 34 Tintenfische (*Sepia chrysophthalmos*) dar, die von Ferussac Tilesius zu Ehren „*Loligopsis tilesii*“ genannt wurden. Heute ist diese Benennung nicht mehr gültig.

¹⁰ Das Original dieses Briefes gehört der Universitätsbibliothek Johann Christian Senckenberg Frankfurt am Main (Signatur: 4° Hs 6) und befindet sich als Dauerleihgabe im Archiv der Senckenberg Gesellschaft für Naturforschung Frankfurt am Main.

¹¹ Vgl. bei „Zedler“ im Band 4 (Halle und Leipzig 1733, S. 17 und 18) die Artikel zum „Blackfisch, Blackküttel, Meer-Küttel, Meer-Spinne, Dinten-Fisch“. Vgl. zu Krünitz' Informationen den Band 5 (1775, 21784) unter dem Stichwort „Black=Fisch“ und Band 46, erschienen 1789, sehr ausführlich zu den Kraken, im 1844 erschienenen Band 185 dann ganz knapp und sachlich zum Tintenfisch.

¹² Vgl. in J.G. Schneiders *Sammlung vermischter Abhandlungen zur Aufklärung der Zoologie und der Handlungsgeschichte* (Berlin 1784), vor allem S. 8-102, S.103-134 mit einer Charakteristik des ganzen Geschlechts und der einzelnen Arten von Blakfischen, und am Ende S. 317-322 die weiteren Zusätze zur Naturgeschichte der Blakfische. Schneider geht auch auf den „*Teuthus Aristoteles*“ ein.

sensterns *Atlas* brachte er davon kaum mehr als 30 Tierzeichnungen unter¹³. Was keine Aufnahme in den *Atlas* fand, wurde in anderen separaten Publikationen vorgestellt¹⁴, oder war für geplante Werke vorgesehen. Tilesius war stolz darauf, unter den beschränkten Bedingungen eine solche Leistung vollbracht zu haben, indem er aus der Not eine Tugend gemacht hatte. Doch sein Plan, eine „Ichthyologia Japonica“ zu erstellen, ging nicht in Erfüllung.¹⁵ Daher ist es nicht verwunderlich, dass sich unpublizierte Skizzen und Entwürfe für dies Editionsprojekt in den von Tilesius hinterlassenen Materialien befinden. Der größte Teil des zeichnerischen Nachlasses ist auf unerfindliche Weise in den festen Besitz der Kustodie der Universität Leipzig geraten, obwohl er gemäß dem Testament von Tilesius' Sohn Adolph Bestandteil des der Stadt Mühlhausen überlassenen Erbes sein müsste.¹⁶ Wie dem auch sei, unter den Leipziger Illustrationen findet sich ein Blatt¹⁷ mit Darstellungen von Oktopus (Krake) und Tintenfisch (s. Abb. 1). Auffällig ist auf den ersten Blick, dass die Tierzeichnungen mit japanischen Texten versehen sind. Tilesius hat nie die japanische Sprache und Schrift gemeistert, dürfte also kaum Urheber dieser Beschriftung sein. Schon aus diesem Grund muss die Unterschrift unten links „D. Tilesius ad vivum pinxit Nangasaki in portu Japonico. 1805.“ mit einem Fragezeichen versehen und *cum grano salis* verstanden werden. Wer hat also diese Illustration mit japanischem Text zu Papier gebracht?

B. Die Tintenfisch- und Krakenabbildung

Weckt schon der japanische Text Zweifel an der alleinigen Urheberschaft von Tilesius, so tut dies die stilisierte Art der Tierdarstellung in gleichem Maße. Im privaten Tagebuch (Arbeitsjournal) notierte Tilesius penibel die Lieferung aller Pflanzen und Tiere. Am Montag, den 4. März 1805 heißt es da¹⁸:

Heute erhielt ich durch meinen Freund den Dollmetscher mehrere Dintenfische *Sepia officinalis* L. *Sepia loligo*, *media*, *hexapus*, (welche die Japoner *Sakfat Jka* nennen) und *sepiola*, ferner ei-

¹³ Z.B. in Tab. LXXXVIII, Fig. 32-34 des Krusenstern-*Atlases* haben die nicht genauer erklärten „Seegewürme“ eine gewisse Ähnlichkeit mit Tintenfischen.

¹⁴ Vgl. in der Tilesius-Bibliographie (s. Anm. 7) vor allem die Nrr. 43 bis 46 und 50.

¹⁵ Dazu soll in einem künftigen Artikel mehr gesagt werden.

¹⁶ Siehe dazu die Ausführungen von Günther Sterba im Anhang 2 dieses Artikels.

¹⁷ Das Original in Leipzig (Kustodie der Universität) hat die Nr. 114 (s. das Verzeichnis von Günther Sterba am Ende dieses Artikels im Anhang 2). Es ist mit Feder und Pinsel angefertigt, teilweise aquarelliert, sein Format beträgt 32,3×39,7 cm. Diese Angaben verdanke ich Günther Sterba.

¹⁸ Hier pag. 99 des Tagebuchs aus dem Stadtarchiv Mühlhausen (Tilesius Bibliothek Nr. 82/291). Zu diesem Arbeitsjournal vgl. auch die ausführlichen Transkriptionen bei Sondermann *Tilesius und Japan (Teil 1 und 2)* (s. Anmerkung 1). Das Wort „Devikane“ (Abweichler?) ist mir unverständlich.

nen großen Meeraal *Muraena Conger* jap. *Hamóh* {Tab 3.6.}¹⁹ mit einer Reihe großer Zähne im Oberkiefer und 2 Reihen im Unterkiefer nebst Löchern in welche die Zähne einpaßen, wie bey den *Caiman*, den *Tetradon undulatus* (Tab 34.) jap. *Sasibuk* den *Astacus miliaris* (von Nukahiwah,) jap *Devikane* und *Ostracion tuberculatus vel aculatus*.

Und unter dem 15. März 1805 notierte er sich folgenden Vorgang²⁰ :

Freitags den 15. Mart. erhielt ich einen Meerengel *Squalus squatina* {Tab. XXXIX.} der sehr schön gefleckt und von den Europäischen verschieden war. Ferner erhielt ich einen rothgefleckten Barsch {Tab. 40.}, einige Tintenfische, die ich zergliederte und den Tintensaft zur Malerey aufhob, und eine Menge kleiner Krebse und Fische, worunter allerley Schollen und der *Balistes chinensis* war, die ich trocknete weil es sehr warm war (17° R. Therm.

Doch ganz offensichtlich handelt es sich bei der Krakenzeichnung nicht um Malstudien am lebenden Objekt, sondern um fernöstlich standardisierte Posen. Weil Tilesius seine Quelle auf dem Blatt nicht genannt hat, gestaltet sich die Suche danach etwas mühsam.

Glücklicherweise hat Tilesius selber Hinweise dazu geliefert, und zwar 1809 in einem Artikel über japanische Fische²¹ und dann 1810 konkreter in einem Brief an den bis heute viel berühmteren Kollegen Carl Peter Thunberg (1743–1828), der von August 1775 bis November 1776 als Arzt im Dienst der holländischen V.O.C. (Verenigde Oost-Indische Compagnie) in Nagasaki tätig war. Die dortigen Erlebnisse hat der Schwede in einer vielbeachteten und in verschiedene Sprachen übersetzten Reisebeschreibung festgehalten.²² Eine besondere, frühreife Frucht dieses Aufenthaltes war die *Flora Japonica* (1784). Gerade wegen dieses botanischen Werkes wurde er zum Stammvater der japa-

¹⁹ Zur „Muraena Conger“ vgl. die Zeichnung Nr. 108 (s. das Verzeichnis im Anhang 2) mit dem Hinweis, dass D. Horner sie zwischen dem 4. und 6. März 1805 begonnen und Tilesius am 7. Mart. vollendet habe – oben rechts im Bild erkennt man das japanische Schriftzeichen (Kanji), das aus Kämpfers Japan-Werk (Buch I, Kapitel 10, s. Anm. 35) übernommen ist. Die geschweifte Klammer in der Textwiedergabe verweist auf eine nachträgliche Einfügung durch Tilesius in das Tagebuch.

²⁰ Zitiert nach der gleichen Quelle (s. Anmerkung 18) pag. 100.

²¹ Es handelt sich um den Aufsatz „Description de quelques poissons ...“ in den *Mémoires de la Société Impériale des Naturalistes de Moscou*, 2. Bd., 1809, S. 212–249, hier speziell S. 236f., wo Tilesius folgenden Vorschlag macht: „si on veut propager cet ouvrage en Europe, ou si on désire enrichir notre littérature ichtyologique d’une copie fidèle : je suis disposé à entreprendre ce travail, dès que j’aurai publié la collection de dessins des poissons de ma Fauna japonoise, en y joignant des remarques ; de // cette manière, je me flatte de donner certains éclaircissements, non seulement sur les poissons que j’ai décrits, mais encore sur les espèces douteuses par ci par là, décrites par Kämpfer. En attendant j’espère aussi recevoir celles de Thunberg & les confronter.“ Die deutsche handschriftliche Vorlage dieses Artikels befindet sich im Stadtarchiv Mühlhausen, Tilesius Bibliothek 82/290, hier : pag. 10r–11v. Den Hinweis verdanke ich Prof. Sterba.

²² Die schwedische Originalausgabe erschien 1788–1794, bald gefolgt von einer deutschen und französischen Übersetzung. Zu verweisen ist auf die jüngst erschienene Neuedition der englischen Ausgabe durch Timon Screech, die den Titel *Japan Extolled and Decried* trägt (London und New York 2005).

nischen Taxonomie erklärt, auch weil er dann in zahlreichen Einzelstudien weitere Pflanzen- und Tierbestimmungen geliefert hat.²³ Tilesius hat von Thunbergs Buch und Artikeln ausgiebig Gebrauch gemacht und diese Tatsache sogleich im ersten Brief an diesen erwähnt (s. Anhang 1), als er im Januar 1810 die Korrespondenz mit dem nötigen Respekt vor Thunbergs wissenschaftlicher Leistung, aber auch im Bewußtsein seines eigenen Könnens, eröffnete. Hier soll nur der im Zusammenhang mit der oben genannten Zeichnung wichtige dritte Brief (St. Petersburg, 1. Oktober 1810) angeführt werden, weil sich darin der Hinweis auf die Quelle findet²⁴:

[...] 50 bis 60 *Fischspecies* habe ich im Haven von *Nangasaki* nach dem Leben gemalt, aber das schöne Japanische Fischbuch in 2 folio Hefte mit saubern *colorirten* Holzschnitten besitzen ich nicht. Wenn Ewr. Hochwohlgeb. es besizzen; so werden Sie es aus dem hier beygefügteten Titel kennen. H. *Stützer* Chirurg der Ost.Ind.Comp. und Gesandtschafts *Medicus* der Holl. Factorey auf *Desima* hat es der Kayserl. *Academie* der Wißenschaften in *Petersburg* geschenkt.

う 海
み 幸
さ 天
ち
地

Es verdiente wohl als eine literarische typographische Seltenheit in Europa nachgestochen zu werden und sollte es wieder mir zu Händen kommen; so besorge ich dieses Unternehmen gewiß selbst. Ich werde mir es zur angenehmsten Pflicht machen, alles, was ich über Japan *publicire* zuerst Ewr. Hochwohlgeb. zu *communiciren*. Das mehreste werde ich im 4. Bande des *Krusensternschen* Werkes abdrucken laßen. [...]

Zu diesem Zeitpunkt glaubte Tilesius wohl noch daran, sein Versprechen auch wirklich halten zu können.

C. Die japanische Vorlage, die japanischen Gedichte und ihre Kopierung

Das hier erwähnte zweibändige Buch *Umi no sachi ten chi* stammt von Katsuma Ryôsui²⁵ (勝間 竜水, 1697–1773). Die erste Auflage davon wurde 1762 durch Iseya Jiemon aus Edo und Yamazaki Kinbee gedruckt und von Sekijukan Syukoku herausgegeben. Wahrscheinlich gab es weitere Auflagen von diesem Doppelband über „Meeresschätze“, der sowohl in einer ein- wie auch zweibändigen Edition vorliegt.²⁶ Drei Jahre später publizierte Katsuma das Pendant „Yama no sachi“ über Pflanzen der Bergwelt.

²³ Vgl. die Thunberg-Bibliographie von L.C. Rookmaaker & Ingvar Svanberg, in: *Svenska Linnésällskapets Årsskrift*. Jg. 1992–1993, Uppsala 1994, S. 7–69, u.a. zu den japanischen Pflanzen die Nrr. 22, 80, 104, 202, 207, 225, 244, 260, 265, 277, 283, 311, 361, 388, wovon die Nrr. 202 (1794), 265 (1800), 277 (1801), 283 (1802), 311 (1805) schon durch den Titel „Icones plantarum Japonicarum“ als fünf Ergänzungen zur *Flora Japonica* ausgewiesen sind.

²⁴ Das Original befindet sich in der Thunberg-Sammlung der Universität Uppsala, Sign. G 300 ad.

²⁵ Der japanische Usus, den Familiennamen voranzustellen, ist hier beibehalten worden.

²⁶ Die in der UB der Waseda Universität vorhandene Version ist digitalisiert und über Internet einsehbar.

Man sollte nicht vergessen, dass das damalige naturkundliche Wissenschaftsinteresse der Japaner von einem anderen Verständnis ausging als das der Europäer. Das intendierte Publikum waren ja nicht europäische Fischforscher. Exaktheit der bildlichen Wiedergabe, verbunden mit einer taxonomischen Beschreibung, konnte somit nicht das Hauptanliegen darstellen, sondern wichtig war künstlerische Ausdrucksstärke verbunden mit einer literarisch-ästhetischen Wirkung. Wenn M. Boeseman also nüchtern die mangelnde Verwertbarkeit der älteren japanischen Fischillustrationen feststellt²⁷, gilt dies Urteil nur für deren taxonomische Inhalte bei abendländischen Naturforschern. Tilesius selbst hatte – wie der Brief an Thunberg beweist – durchaus ein Gespür für den künstlerischen Reiz der Darstellung. Der in dem gleichen Schreiben genannte – wohl nicht ganz uneigenützige – schwedische Spender Johan Arnold Stützer (1763–1821) war nachweislich von Dezember 1787 bis November 1789 als Chirurg der V.O.C. in Dejima tätig, vielleicht danach noch eine Zeitlang in japanische Handelsgeschäfte verwickelt.²⁸ Ob er das Buch 1788 oder 1789 in Edo erwarb, wann er es dann von Ceylon aus der Zarin Katharina II. zukommen ließ, die es 1795 der russischen Akademie der Wissenschaften schenkte, und ob es dort noch heute vorhanden ist, konnte bisher nicht ermittelt werden.²⁹ Tilesius erwähnt nichts weiter von anderen Japonica.

Angesichts der Tatsache, dass bereits Thunberg in seinem Reisebericht u.a. den Erwerb eines zweibändigen wunderbar illustrierten Fischwerkes bekannt gemacht hat³⁰, kann man in Tilesius' brieflicher Identifizierung eine kleine Stichelei gegen den übermächtigen Vorgänger sehen. Leider ist die Antwort Thunbergs auf diesen Brief nicht erhalten.

²⁷ Bei Dr. M[arinus]. Boeseman „Revision Of The Fishes Collected By Burger And Von Siebold In Japan“, in: *Zoologische Mededeelingen XXVIII* (1947) S. 1–247, heißt es auf S. 5 „charming from an artistic point of view, but scientifically they are without value“.

²⁸ Die wenigen biographischen Informationen zu Stützer stammen von Mason C. Hoadley und Ingvar Svanberg und zwar in deren Artikel „Hunting Rhinoceros in Java — Johan Arnold Stützer and his Journal 1786–1787“, in: *Svenska Linnésällskapets Årsskrift*, Jg. 1990–1991 (Uppsala 1991) S. 91–143. Ich danke Prof. Svanberg dafür, dass er mir diesen Artikel als Kopie zugeschickt hat.

²⁹ Natürlich ist nicht „Dr. Butzer“ sondern — lt. Originalbericht in den *Nova Acta Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae, tomus XIII* (Petersburg 1802, S. 24) — der schwedische Arzt Dr. Stu[e]tzer auf Ceylon gemeint, wenn Bernhard Dorn in *Dem Asiatischen Museum der kaiserlichen Akademie der Wissenschaften zu St. Petersburg* (St. Petersburg 1846 S. 10f. und so auch noch Norbert R. Adami *Eine schwierige Nachbarschaft — Die Geschichte der russisch-japanischen Beziehungen*. München 1990, S. 11f.) von einer „Sammlung japanischer Merkwürdigkeiten“ als Schenkung 1795 durch Katharina II. an das „Cabinet de curiosité“ [Kunstkammer] der Akademie der Wissenschaften berichtet. Es handelte sich um Lackwaren, Münzen, Spiegel, japanische Bilder und Landkarten, Stadtpläne und Tempelbeschreibungen, japanische Übersetzungen von europäischen Medizinwerken des Joh. Kulmus und Lor. Heister, das Buch über Kinderkrankheiten von Nils Rosén von Rosenstein etc. und kunstvolle Insektenmodelle.

³⁰ Thunberg schreibt (s. Anmerkung 22, S. 157): „I also bought a large printed book in large quarto and in two parts with coloured figures of Japanese fishes.“ Timon Screech hat in seiner Kommentierung keinen Zusammenhang zu dem von Tilesius beschriebenen Werk hergestellt. In seiner diesbezüglichen Anmerkung 40, S. 291 heißt es nur: „Unidentifiable“. Sicher gab es im 18. Jh. auch andere illustrierte Werke (Bildrollen) zu Meeres-tieren wie Tintenfischen und Quallen.

Wie im oben wiedergegebenen Briefauszug an Thunberg gemeldet, hatte Tilesius den Wert des ihm z.Z. nicht vorliegenden japanischen Buches für seine Fischstudien erkannt und mit einer Nachzeichnung begonnen.

Folgende Fragen ergeben sich unmittelbar aus diesem Befund :

1. Wenn Tilesius die Kopie der japanischen Illustrationen selber angefertigt hat, wer ist dann verantwortlich für die auf den ersten Blick so authentisch wirkende Kalligraphie der Texte?
2. Was besagen diese Texte überhaupt – und was wußte Tilesius über ihren Inhalt?
3. Hat er auch andere Teile von Katsumas Werk kopiert und als eigene Zeichnungen ausgegeben?

Die erste Frage lässt sich mit einer nicht unwahrscheinlichen Vermutung beantworten : Nach 1806, als Tilesius in St. Petersburg wohnte, lebte dort auch der aus Berlin stammende Sprachforscher Heinrich Julius von Klaproth (1783–1835). Klaproth war einer der ersten Deutschen, der sich schon als Jugendlicher intensiv und zum Teil autodidaktisch mit dem Erlernen der chinesischen und danach auch der japanischen Sprache befasst hatte. Mit ihm konnte Tilesius zwischen Jahresanfang und September 1807, dann wieder von Ende 1808 bis Anfang 1811 in persönlichem Kontakt gewesen sein. Klaproth könnte diese Textabschrift angefertigt und in die ihm von Tilesius vorgelegten Nachzeichnungen eingefügt haben, wobei das Layout gegenüber der Vorlage allerdings geändert werden mußte. Belegen lässt sich diese Vermutung mittels eines durch Tilesius kommentierten, undatierten Autographs von Klaproth, worin letzterer chinesische Quellen zur in Japan vorkommenden Awabi-Schnecke aufzählt und in originaler chinesischer und mandschurischer Schrift vorführt. Tilesius erklärt dazu³¹ :

³¹ Vgl. zum Abdruck des Tilesius-Textes den Kommentar von Hartmut Walravens in seinem Werk *Julius Klaproth (1783-1835) — Briefwechsel mit Gelehrten, größtenteils aus dem Akademiearchiv in St. Petersburg* (Wiesbaden : Harrassowitz 2002, S. 90). Dazu machte Günther Sterba 2007 folgende briefliche Anmerkung : „Awabi — ‘das Seeohr’ ist kein Fisch. Vielmehr handelt es sich um eine Meeresschnecke der Familie Haliotidae (Seeohren, engl. : Abalones or Ormers). Im Krusenstern-Atlas ist die Giant Abalone auf Tafel LXV abgebildet. Die deutsche Beschriftung lautet „Das Japanische Meerohr“. In der Kustodie liegen zwei handkolorierte Andrucke der Tafel (Nr. 37 und 38 meiner Liste). In diese hat Tilesius zusätzliche Teilzeichnungen eingefügt ; Nr. 37 mit einer zusätzlichen Teilzeichnung, Nr. 38 mit 7 zusätzlichen Teilzeichnungen. Auf beiden Andrucke befinden sich außerdem zahlreiche handschriftliche Bemerkungen zur Anatomie des Tieres. Auf 38 auch die Bezeichnung der Art in japanisch. Allerdings kann ich zu der japanischen Angabe in der Fußnote 3 des Autographs kaum Ähnlichkeit erkennen. Mit der Bemerkung ‘geflochtenem Sommerhut’ kann nur die Schale der Schnecke gemeint sein.“ Im sog. Moskauer Skizzenbuch von Tilesius findet sich neben etlichen japanischen Silbenzeichen mit deutscher Erklärung die folgende Notiz zu dieser Schnecke (Moskau, Nationalbibliothek, Handschriftenabteilung, Fond 178, M 10693a) : „Misu Ika Sepia loligus | Ika [Sepia] officinalis | Awabi Haliotus Japonica | welche ich nach allen inneren | Theilen anatomisch gezeichnet | habe. | Kosch Awabi getrokneter Limax | aus dem Haliotis, als Speise.“ Vgl. aus dem gleichen Skizzenbuch auch die Abbildung einer anderen Seite mit japanischen Schreibversuchen von Tilesius am Ende dieses Artikels (Abb. 5).

Der Schreiber dieses war mein Petersb. Vormaliger Herr College Julius Klapproth, des großen Chemikers in Berlin Sohn, welcher die Chinesische Sprache zu seinem Studio gemacht hatte und aus Mishelligkeiten mit dem Secretaire unserer Academie N. Fuss der ihn seines Vaters wegen protegierte und den er mit Undank gelohnt hat nach Paris gehen mußte und dort verstorben seyn soll. [...]

Wie bereits bemerkt, hatte Tilesius in Nagasaki die japanischen Namen von Fischen durch die Dolmetscher erhalten, was ein Eintrag in seinem Tagebuch beweist³² :

Freytags den 22. Febr. 1805. warm und sonnigt 12° Wärme aber windig. Heute wurden einige kleinere Fische für mich gebracht, welchen die Japanischen Nahmen beygeschrieben waren, es waren doch ein paar unter denselben, die weder *Thunberg* noch *Kaempfer* erwähnt haben :

Ob die Lieferanten damals Kanji, Kana-Silbenzeichen oder nur Romaji-Buchstaben bei der Beschriftung verwendeten, ist nicht mit Sicherheit feststellbar. Zu vermuten ist jedoch aufgrund der erhaltenen Illustrationen, dass Kana und phonetische Fixierung im lateinischen Alphabet der Standard waren. Dass Tilesius einfache japanische Schriftzeichen selber abschreiben konnte, beweist der Brief an Thunberg wie auch sein „Moskauer Skizzenbuch“ (s. die Abbildungen im Anhang). Nicht nur diese japanischen Schriftzeichen finden sich neben der bereits genannten Awabi-Zeichnung, sondern auch der Vermerk : „ad Tab.VI verm. Japoniae im aufgeschnittenen Japanischen Fischbuche“ — also wohl ein weiterer Hinweis auf das japanische Werk von Katsuma als Vorlage für Zeichnungen.³³

In Hinsicht auf die zweite Frage ist nicht sicher, ob der mutmaßliche Kalligraph Klapproth zu diesem Zeitpunkt bereits über ausreichende Japanischkenntnisse verfügte, um die Haiku-Gedichte angemessen zu verstehen. Zwar hatte er 1805 in Irkutsk einen Japaner kennengelernt und mit dessen Hilfe sogar ein japanisches Wörterbuch ins Russische und Deutsche übersetzt³⁴, seine Übersetzungshinweise für Langsdorffs Buch im Jahr 1812 beschränkten sich jedoch auf einzelne japanische Worterklärungen. Die Übersetzung des japanischen Geschichtsbuches *Sankoku tsûran zusetsu* von Hayashi Shihei gab Klapproth erst 1832 in Paris heraus. Für das Verständnis der Haikus über Ika und Tako waren vor allem folkloristische Kenntnisse erforderlich, die Klapproth in Bezug auf Japan um 1812

³² Stadtarchiv Mühlhausen, Tilesius Bibliothek, Nr. 82/291, pag. 96.

³³ Auch diesen Hinweis verdanke ich Günther Sterba (Brief vom Juni 2010).

³⁴ Vgl. dazu die Ausführungen von Peter Kornicki *Castaways and orientalis : the Russian route to Japan in the early nineteenth century*. (Università Ca'Foscari Venezia 1999, p. 23-27) und von Norbert R. Adami (s. Anmerkung 29, S. 124-127).

wahrscheinlich (noch) nicht hatte.

Zu Layout, Transkription und Kurzinterpretation der Texte

Die Informationen zur japanisch-chinesischen Nomenklatur von Ika und Tako entnahm vielleicht ursprünglich auch Katsuma aus einer älteren japanischen Enzyklopädie, die wiederum auf chinesischen Vorlagen fußte, u.a. aus medizinischen Fachbüchern des 16. Jahrhunderts.³⁵

Gegenüber der Vorlage (29.8 × 21 cm) handelt es sich bei Tilesius' Kopie (32.3 × 39.7cm) nur um eine geringe Formatänderung. Die ursprünglich getrennten Abbildungen sind nunmehr in einen direkten Zusammenhang auf einer Doppelseite gegenübergestellt worden, was auch durch die hinzugefügte Meeresbodendarstellung unterstrichen wird. Auf beiden Blättern hat eine europäische Schreiberhand die lateinischen Tiernamen nach Linnées Systematik ergänzt.

Am unteren Blattrand steht in Tilesius' Schriftzügen die bereits erwähnte Zeile :

„D. Tilesius ad vivum pinxit Nangasaki in portu Japonico. 1805.“

TAKO (Krake — Abb. 2)

Die beiden bei Katsuma auf zwei Blattseiten nebeneinander angeordneten Tako-Abbildungen sind nun bei Tilesius auf einem Blatt übereinander platziert worden. Im Original nicht vorhanden ist die quadratische Einfügung der vergrößerten Hautpigmentation des Tako. Hiermit leistete Tilesius sich eine wissenschaftliche Verfremdung der Vorlage, was auch durch die nachträglich verstärkte Kolorierung und die nicht zum japanischen Flair passenden lateinischen Namensergänzungen unterstrichen wird. Die Kanji-Nomenklatur des rechten Blattes wurde zwar beibehalten und von der linken Blatthälfte eine weitere Kanji-Bezeichnung etwas zusammenhanglos rechts neben den Namen des ersten Dichters eingefügt. Aber die original über dem größeren Tier geschriebenen drei Haiku-Texte werden (wie die originale Gruppierung von 4 weiteren Fischen links neben dem kleinen Tako sowie

³⁵ Auf diese Vorlagen wies mich mein Kollege Tsukamoto Shinya hin. Natürlich gab es vor 1800 in Japan auch andere illustrierte Beschreibungen von Tintenfischen. Schon Engelbert Kämpfer verwendete solche Vorlagen bei seinen Abbildungen, vgl. dazu die von Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel hrsg. Kämpfer-Ausgabe *Heutiges Japan* (München 2001) Bd. 1/1, S. 576 [Abb.30] und S. 578 [Abb. 30c] sowie im Band 1/2, S. 725 der Kommentar : „Die beiden Nummern verweisen auf das vierzehnte Buch des Bildlexikons 'Kinmōzui', wo wir an dreiundvierzigster Stelle unter dem Stichwort tako einen Oktopus und unter dem nächsten Stichwort ika eine Sepia finden.“ Zu diesem illustrierten Werk gibt es nähere Informationen in Band 1/2, S. 153-156.

Das japanischen Original von Katsuma liegt digitalisiert in verschiedenen Editionen vor :

- <http://www2.library.tohoku.ac.jp/kano/05-001036/05-001036.html> [UB Tohoku Universität, Kano Sammlung]

- http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/he05/he05_06397/he05_06397.pdf

die sich auf sie beziehenden Textzeilen) einfach unterschlagen. Nur die den Tako betreffenden zwei Gedichte der linken Blattseite sind in die Kopie übertragen und bei Tilesius oberhalb der Kraken-Abbildung auf der rechten Blatthälfte eingefügt. Auf die rechts außen gegebene Bezeichnung des Tieres (Tako) folgen darunter in Kanji die traditionellen Bezeichnungen, sowie unter dem Wort „Iitako“ ein weiterer Artname. Daran schließen sich in mehreren Spalten (von rechts nach links zu lesen) nur die zwei letzten von den in der Vorlage vorhandenen fünf Haikus an. Das setzt voraus, dass der Kopist der Texte deren Inhalt verstand und die Text-Bild-Komposition entsprechend redigieren konnte. Indem Tilesius den poetischen Gehalt komprimierte und den visuell-wissenschaftlichen Aussagewert vereinheitlichend erweiterte, entstand eine zwittrige Textsorte.

IKA (Tintenfisch — Abb. 3)

Die japanische Vorlage befand sich auf einer einzigen Blattseite und musste also nicht gekürzt werden. Doch auch hier erfolgten Änderungen in der Bildkomposition: Die beiden knapp überlappend angeordneten Tiere sind aus der ursprünglich schräg-parallelen in eine getrennt horizontal-parallele Lage gebracht und in ihrer Position vertauscht worden. Somit musste Tilesius die im Original z.T. verdeckten Tentakel beim nun nach unten versetzten Tier frei ergänzen. Er tat dies in exakter und detailreicherer Form, z.B. durch die sorgfältige Auszeichnung der Saugnäpfe. Durch die neue Anordnung auf dieser einen Blatthälfte ist die ursprünglich über der Illustration befindliche Haiku-Kalligraphie (die ansonsten wort- und schriftgleich ist) in zwei Teile getrennt worden, wodurch der Anfang des dritten Gedichtes die Tierzeichnung z.T. verdeckt. Die rechterhand befindliche Reihung der Kanji für den Namen Ika bleibt fast gleich. Bei einem der Namen ist wie in der Vorlage die korrekte Lesart in Furikana ergänzt worden. In der Mitte oben beginnt das erste Gedicht, dessen Schlusszeile [Flüchtigkeitsfehler in der Vorlage?] ebenso wie der Dichtername hier allzu weit nach rechts versetzt erscheinen. Die Textspalten sind dann nach links weiterlaufend zu lesen.

Das Buch „Umi no sachi“ behandelt solche Fische und Schalentiere, die man allgemein als Nahrungsmittel oder Meeresfrüchte benutzen kann, optisch ansprechend durch den farbigen Holzdruck. Die Haikus sind manchmal als wortspielartige 掛詞 (kake-kotoba; Paronomasia, spielerische Wortverdreher) verfasst und richten sich grundsätzlich nach den alten Sitten und literarischen Gebräuchen. Zum Beispiel gibt es in China das 歳時記 (saiji-ki) als ein Kompendium von jahreszeitlichen Schlüsselwörtern, was seinen Niederschlag etwa in der japanischen Enzyklopädie 和漢三才図 (wakan-sansai-zue) findet, die 1717 in 81 Bänden erschien. In deren Bänden 50 und 51

findet man mancherlei Informationen zum Tako und „Ika“.³⁶

Obwohl es eigentlich ganz verschiedene Interpretationen von Haikus geben kann, soll hier eine vorläufige Transkription und vorsichtige Inhaltsangabe versucht werden. Ôhara Rie, Ishikawa Hidemi sowie Ogawa Tomoyuki von der Tohoku-Universität transkribieren folgendermaßen³⁷:

(A 1) 飯蛸や なれにも藤の 足手影 「旭道」

Iidako ya narenimo fuji no ashite kage. 「Kyokudo」

(2) 飯たこの 小智恵おかしや 栄螺がら 「遠鄙」

Iidako no kojie okashi ya Sazaegara. 「En-pi」

(B 1) 白鷺の 生るる種や 烏賊の骨 「波上堂 静波」

しらさぎの うまるるたねや いかのほね 「はじょうどう せいはい」

Shirasagi no umaruru tane ya ika no hone. 「Hajôdo Seiha」

(2) 烏賊は花は 青和会³⁸の 盛り時 「八十男」

いかははなは あおにぎかい (?) の さかりどき 「やそお」

Ika wa hana wa aonigikai [?] no sakari doki. 「Yaso-o」

(3) いか化して 鷺となる季も 春なれや 「知来」

いかけて さぎとなるきも はるなれや 「ちらい」

Ika keshite sagi to naru ki mo haru nareya. 「Chi-rai」

Zu den Autoren, die hier mit ihren Künstlernamen (「...」) genannt sind, wurden bisher keine weiteren Angaben gefunden.

³⁶ Abel-Rémusat stellte dem europäischen Publikum zum erstenmal ausführlich in einer „Notice sur l’Encyclopédie Japonoise, et sur quelques ouvrages du meme genre“ auch dieses Werk vor, in: *Notices et extraits des manuscrits de la Bibliothèque du Roi et autres bibliothèques* (Paris: Imprimerie Royale 1827) S. 123–310. Zu den Fischen gab er kurz kommentierte Gliederungshinweise vom Buch XLVIII bis LI (ebda. S. 213–220). Isaac Titsingh hatte ein solches Lexikon aus Japan nach Paris mitgebracht.

³⁷ Viele Kollegen haben sich um diese Transkription bemüht. Danken möchte ich daher auch Prof. Sato Makio, Prof. Numata Toshinori, Prof. Suzuki Michio und Prof. Saeki Kei für ihre freundliche Mithilfe.

³⁸ Die Waseda Universität hat ein anderes Exemplar von „Umi no sachi“ digitalisiert, bei dem es einen kleinen Unterschied im Textwortlaut (S. 27 vom Waseda-Exemplar) gibt: Das 2te „Haiku“ im Artikel „Ika“ der Tohoku-Ausgabe hat das Kanji „空“ in der Mitte, das in der Waseda-Edition (und in der Tilesius-Kopie) fehlt.

Inhaltsangabe (soweit erklärbar) :

Zu den Kraken

(A 1) „Du, Krake, hast ja Gliedmaße wie die Wisteria.“

„なれ = 汝“ hier verstanden als altes Japanisch für „du“.

(2) „Wie lächerlich : das Kräkelchen versteckt sich naseweis in der Seeschnecke!“

Eine traditionelle Fangart für Kraken war es, leere Kreiselschnecken im Wasser auszusetzen, in denen sich die Kraken dann gern versteckten und somit leichter gefangen werden konnten.

Zu den Tintenfischen

(B 1) „Weiße Reiher entstehen aus dem Tintenfischknochen.“

Ein traditionelles Souvenir in Japan war eine aus dem weißen Tintenfischknochen (Schulp) hergestellte Figur, etwa in Form einer Puppe oder eines Vogels.

(2) Das Gedicht ist ohne gesicherte Lesung so nicht verstehbar. Wahrscheinlich hat es auch etwas mit dem Frühling zu tun.

(3) „Es wird Frühling, wenn sich der Ika in einen Reiher verwandelt.“

Eigentlich ist Ika ein Jahreszeitenwort für Sommer. Aber weil es Ika-Arten mit Namen wie “桜鳥賊” oder “花鳥賊” gibt, die auf Frühlingsblüten verweisen, kann man auch an die gleichermaßen weißfarbigen Ika und Reiher denken.

Dass Tintenfisch und Krake auch in der Literatur Europas eine lange Tradition als Motiv haben, ist bekannt.³⁹

Bedenkenserwerter in diesem Kontext ist die letzte Frage, ob Tilesius sich auch bei anderen Fischillustrationen mit fremden Federn geschmückt hat. Dafür muss das vorwiegend in Leipzig gelagerte Material noch einmal sorgfältig durchgesehen werden, wenn es allgemeiner zugänglich gemacht wird.⁴⁰

Tilesius unterstellt sowohl Engelbert Kämpfer als auch Carl Peter Thunberg in seinem Tagebuch die

³⁹ Vgl. dazu die Homepage von Robert Nordsieck, besonders zu den Kopffüßlern (Cephalopoden) <http://www.weichtiere.at/Kopffuesser/legenden.html> die Hinweise auf Homer, Jules Verne und den italienischen Nobelpreisträger Eugenio Montale. Dass auch der berühmteste Haikudichter Matsuo Basho sich dazu geäußert hat, braucht hier nicht dokumentiert zu werden.

⁴⁰ Sterba verweist in diesem Zusammenhang auf die Illustration Nr. 32 (s. sein Verzeichnis im Anhang 2), wo sich der Vermerk „Fischbuch tab. 7“ befindet.

nicht eingestandene Kopierung von japanischen Bildern⁴¹ :

Ihre [d.i. = Japaner] Zeichnungen sind accurat, wie die {von} Kaempfer gelieferten und es scheint mir nur zu gewiß, daß alle Kupfer dieses Werks nach Jap. Nationalzeichnungen gestochen worden sind.

Und in einem undatierten Nachtrag notierte er sich folgende „Literarische Bemerkungen“⁴² :

Es ist auffallend in Thunbergs Reisen Pl. 5 Kupferstangen und Japonische Talglichter vom *Rhus succedanea* abgebildet zu sehen, nicht minder die Meßerchen Peruquen, und dergl. Dinge, an welchen man bemerkt, daß sie erst in Europa abgezeichnet wurden, so wie *Thunbergs* Pflanzen. Noch zweckmäßiger scheinen mir wenigstens die Kupfer im dritten Theil wo er die Strohschuhe oder Pantoffeln die Rasiermeßer das Schreibzeug und Zahl oder Rechenbret, Wage Maaß und Gewicht Pinsel Ohr Löffelchen Zahninstrumenthen Medizinkästchen Tobakspfeiffen Besteck und dergl. vorstellt. Die Japoneserin auf der zweiten Kupferplatte welche nebst ihrer Laute nicht größer ist als die beyden Tuschtäfelchen neben ihr drückt eben die Nationaltracht und den Habitus des Japonischen Frauenzimmers nicht sonderlich aus.

Also könnte der Hinweis auf Katsumas Buch im Brief an Thunberg als ein halböffentlicher Offenbarungseid für seine eigenen Anleihen daraus angesehen werden. Beim Vergleich mit der Tintenfisch- und Takoabbildung in Kämpfers Buch⁴³ kann man kaum von einer sorgfältigen naturkundlichen Studie sprechen. Tilesius hat daher nicht auf sie zurückgegriffen und sie auch nicht erwähnt.

Die verschiedenen mit japanischen Schriftzeichen versehenen Illustrationen waren in dieser Form nicht als naturkundliche Abbildungen verwendbar, außer wo es sich um die Übernahme der original japanischen Nomenklatur handelte. Daher wurden sie auch nicht in Krusensterns *Atlas* übernommen. Langsdorff scheute sich nicht, die japanische Abbildung eines Arztes zu übernehmen, wies aber darauf hin, dass die Vorlage japanischen Ursprungs sei.

D. Zusammenfassung

Wenn Tilesius vereinzelt auf japanische naturkundliche Materialien zurückgreift, so folgt er also einem Usus, der schon durch Kämpfer und Thunberg zur Tradition geworden war. Damit ist zudem belegbar, dass die Richtung der Beeinflussung zwischen Ost und West nicht immer einseitig war. Offensichtlich erfolgte sie auch wechselseitig, wobei der Begriff „rangaku“ (Holland- oder Europa-

⁴¹ Zitiert nach dem Original im Mühlhäuser Tagebuch am 5. Nov. 1804 (pag. 72)

⁴² Zitiert nach dem Original im Mühlhäuser Tagebuch (pag. 260).

⁴³ Vgl. die Angaben in der Anmerkung 35.

kunde) vielleicht etwas einseitig vorrangig eine wissenschaftliche Einbahnstraße von West nach Ost suggeriert. Tilesius jedenfalls hat auch in seinen späteren Publikationen über die Ichthyologie Japans nicht mehr auf das seiner Meinung nach bewundernswerte Buch von Katsuma hingewiesen. Seine eigenen Japanischkenntnis reichten nicht für eine sachkundige Erklärung der Vorlage aus, und der Kontakt zu Klaproth war nach 1812 abgebrochen.

Ein weiteres amüsanter Beispiel für die stillschweigende Aneignung japanischer Vorlagen sei hier nur als Episode angefügt. Auf der Rückreise von Nagasaki nach Kamtschatka im Frühjahr 1805 landete die „Nadeshda“ kurz an der Nordspitze von Hokkaido. Der Kontakt mit den Ainus führte zu einem Tauschhandel mit Lebensmitteln und Gebrauchsgegenständen des täglichen Bedarfs. Die als Kolonialherren der Ainus auftretenden Japaner boten den heimkehrenden Russen auch andere Ware zum Tausch an: Shunga, erotische Bilderbücher. Welche Art von „russischen Frauen“ der keusche Tilesius für die Japaner in Nagasaki gemalt hat, entzieht sich unserer Kenntnis. Doch was in der Nähe von Cap Soya geschah, hat Tilesius am Ende seines Tagebuches erneut festgehalten⁴⁴:

Sonntags den 28 April 1805. Auf der Reise von Japan nach *Segalien* und den *Curilen*. Man beschäftigt sich, die in Japan aufgeraftten Schätze und Herlichkeiten, sie mögen nun in {atmosphärischen} Dames fächern, Tobakspfeiffen, Lakwerk oder eigenem Machwerk bestehen, zu ordnen. Hier sitzt einer und schreibt {sehr wortreich} die Geschichte der in Japan im Gefängniß verlebten Tage, dort schreibt einer das Verzeichniß seiner Schätze oder der Handelsartikel, die er dort — gesehen. Dort zeichnet einer bunte Japanische Hurenbilder oder ein Japanisches Buch voller Holzschnitte sklavisch nach und will es in eine National Bibliothek als Japanisches Original verkaufen, dort copirt ein anderer die Zeichnung eines dritten und schreibt darunter: *ad naturam pinxit*.

Im Lichte seiner eigenen Praxis bezüglich der japanischen Illustrationen von Katsuma klingt diese Tagebuchpassage fast prophetisch. Das Kopieren von japanischen Vorlagen zwecks Verkauf oder Verbreitung in Europa scheint sich variantenreich bis heute zu wiederholen. Über die Verbreitung und den Einfluss dieser Vorform des „Japonismus“ lassen sich sicher tiefeschürfende Studien anstellen. Was würde Tilesius wohl zu der in Japan durch Hokusai legendär gewordenen erotischen Verbindung von Fischerfrau und Oktopus gesagt haben?

⁴⁴ Diese Episode hat Tilesius fast gleichlautend gleich drei Mal in seinen Aufzeichnungen festgehalten: im eigenen Tagebuch (pag. 119), ebda. im hier zitierten Arbeitsjournal noch einmal (pag. 256) unter der Überschrift „Nachträge und vermischte Bemerkungen“ und dann in der Abschrift für einen Kollegen (Staatsbibliothek zu Berlin PK, Hss.-Abt. Nr.8, pag. 2v).

E.

Anhang 1 :

3 Briefe von Tilesius an Thunberg (UB Uppsala, Thunberg-Archiv, Sign. : G300ad)

Hochzuverehrender Herr Professor

und Ritter!

Gewißermaßen durch ein ähnliches Schicksal zu Ihnen hingezogen, betrachtete ich Ewr. Hochwohlgeb. schon lange als den einzigen noch lebenden Gelehrten, der meine im Winter 1805 in *Nangasaki* gezeichneten und beschriebenen Fische, Tange und Zoophyten einst als alte Bekannte wieder erkennen und mit einer vorzüglichen Theilnahme aufnehmen würde und {nur} der träge Geist, welcher hier die *Publication* meiner Arbeiten so verzögert, hat mich bisher recht unglücklich gemacht, weil er mich verhinderte, Ihnen die Erstlinge meines Fleißes in Japan nicht schnell genug vorlegen zu können, wozu mich doch / ein unwiderstehlicher Trieb der Dankbarkeit, gegen Ihre vortreffliche *Flora Japonica* und Ihre Reisebemerkungen, die mir als nützliche Wegweiser in *Nangasaki* dienten, aufforderten.

Ob ich gleich nun auch jetzt noch nicht im Stande bin, Ewr. Hochwohlgeb. etwas bedeutendes vorzulegen ; weil mich die Hochachtung gegen unsern würdigen *C.v.Krusenstern* bestimmt, nicht früher mit meiner Reisebeschreibung hervortreten, bis die seinige erschienen ist ; so kann ich doch nicht die gute Gelegenheit, wo mir H. *Retzius* aus *Lund*⁴⁵ offerirt, vorbey gehen lassen. Diese Kleinigkeit nun habe ich gewählt aus den vorzüglichsten Tafeln unseres Reise Atlases, welche bishero fertig geworden sind und deren Stich seit 3 Jahren sehr langsam vorgerückt ist. Das große Blatt stellt die Ansicht von *Desima* und einen Theil der Stadt *Nangasaki* vor. Der alte *SakeSaburo*⁴⁶ hat mir die Fenster Ihrer Wohnung gezeigt. Das zweite Blatt ist ein Japanischer Fisch, welchen ich *Cichla Banjos* // genannt habe. Ich habe mit Vergnügen gesehen daß Ewr. Hochwohlgeb. auch an den *Moscowischen Memoires* arbeiten⁴⁷, mithin auch den 2ten Band derselben bereits erhalten haben, dort habe ich bereits einige bekannt gemacht. Sobald der neue Band unserer Petersburg. *Memoires* abgesandt wird, werde ich die Ehre haben Ihnen noch mehr Japanische Fische, die jetzt gestochen werden, beyzulegen.

⁴⁵ Der nicht näher bestimmbar Retzius vermittelte den Transport verschiedener Briefe von Tilesius nach Schweden. Vgl. den Brief von Tilesius an dessen Onkel Andreas Johannes (auch : Anders Jahan) Retzius (St. Petersburg [...] Januar 1810) : „Das gütige Anerbieten Ihres würdigen Neffen, des H.K. Retzius meines hiesigen Freundes bestimmt mich, einen meiner LieblingsWünsche zu befriedigen und mich mit einigen der ersten Gelehrten Schwedens in eine ehrenvolle Verbindung zu seetzen oder das Glück eines literarischen Verkehrs mit Ihnen zu suchen.“

⁴⁶ Sakesaburo ist der von Tilesius auch portraitierte Dolmetscher Nakayama Sakusaburo [中山作三郎]. Er war 1804 Obertolk, nachdem er 1790 zum Edo-Untertolk, dann 1798 zum Edo-Obertolk ernannt worden war. Bis 1836 ist er als Obertolk aufgeführt.

⁴⁷ Die Thunberg-Bibliographie (s. Anm. 22) verzeichnet den ersten Beitrag im Jahr 1806 als Nr. 318. „Lucani monographia, elaborata,“ *Zapiski obshchestva ispytatetelej prirody, osnovannago pri imperatorskom' Moskovskom' universitet, in den Mémoires de la Société Impériale des Naturalistes de l'Université Moscou*, 1, pp. 183-212, pl. XII. Im Jahr 1812 wurde dann „*Poae capenses, descriptae*“ in den *Mémoires de la Société Impériale des Naturalistes de Moscou*, 3, pp. 43-48, Tab. IV-VII veröffentlicht, 1817 weitere fünf Beiträge in dieser Zeitschrift. Zwischen 1795 und 1806 waren mehrere Beiträge von Thunberg in den *Nova Acta Academiae Scientiarum Imperialis Petropolitanae* erschienen.

Dem seeligen *Martin Vahl* in *Copenhagen*⁴⁸ kaufte ich die damals (1803) vorhandenen *Fasc. Icon. Florae Japonicae fol. maj.* von Ewr. Hochwohlgeb. ab. Wenn Ewr. Hochwohlgeb. davon noch Fortsetzungen⁴⁹ liefern sollten, so bitte ich gehorsamst auch für mich um ein Exempl. Ich bin durch meine Handzeichnungen vielleicht im Stande Ewr. Hochwohlgeb. dazu einige Beiträge zu liefern, im Fall Sie die coloriten nach frischen Pflanzen entworfenen Abbildungen vorziehen sollten.⁵⁰ Ich bedauerte damals, daß mir gerade der Buchhändler *Brummer in Copenhagen*⁵¹ ein *defectes Exemplar Ihrer Flora Japonica* in 8vo gegeben hatte - /

Jetzt habe ich auch hier verschiedene wichtige Gegenstände zu bearbeiten vorgefunden mit denen sich hier sonst niemand abgegeben hatte ; z.B. den Mammuth von dem wir nunmehr ein aufgestelltes Skelet [!] haben, welches sich auffallend vom asiatischen ElephantenSkelet unterscheidet. Ich habe vom seeligen *Quenzel* in *Stockholm*⁵² eine kleine schwedische Schrift 8vo mit 2 Kupferp. erhalten wo der Elephant col ... und im Skelet - nebst dem Kopfe des *Ohio* thieres (*grand Mastodonte Cuvier*) und einen Zahne vorgestellt ist - Sollte es nicht ein Irrthum des seeligen Mannes gewesen seyn, daß er die Stoßzähne einwärts gekrümmt am *Ohio* thier vorgestellt hat? Es würde mich freuen, wenn Ewr. Hochwohlgeb. mir Ihre Gedanken darüber mittheilen wollten.

Ewr. Hochwohlgeb. große Verdienste um die *Botanik* und *Zoologie* von *Japan* werden mich entschuldigen, daß ich mich zu Ihnen dränge als zu dem einzigen Manne, der künftig mein Lehrer Rathgeber und Richter über meine Nachrichten von Japan seyn wird. Mit wahrer Hochachtung verharre Ewr. Hochwohlgeb.

St. Petersburg

d. 27 Januar 1810. ergebenster *Dr. Tilesius Academicus* der Petersburg. *Academie*

⁴⁸ Martin Henriksen Vahl (1749 - 1804) studierte bei Linné, gab Teile der *Flora Danica* fasc. XVI-XXI (1787-1799) und andere botanische Schriften heraus. Er war von 1801 bis zu seinem Tod 1804 Professor der Botanik an der Universität in Kopenhagen.

⁴⁹ Seit 1798 bis 1805 waren fünf Teile der *Icones plantarum Japonicarum, quas in insulis Japonicis annis 1775 et 1776 collegit et descripsit* erschienen. Vgl. dazu in der Thunberg-Bibliographie (s. Anm. 22) Nr. 311 die Hinweise zur 5. Lieferung.

⁵⁰ Man kann in diesem Angebot auch eine Kritik an den bislang gelieferten Abbildungen erkennen.

⁵¹ Es handelt sich um den Buchhändler Johann Christian Friederich Brummer (1768 - 1836).

⁵² Conrad Quenzel (1767 - 1806) war Direktor des Naturkundlichen Kabinetts in Stockholm („nach 1798 Intendant des Naturkabinetts an der Wissenschaftsakademie in Stockholm. Später wurde er Lehrer für Chemie und Naturgeschichte an der Militärschule auf Schloss Karlberg, wo er 1805 den Professorentitel erhielt.“). Er war Mitherausgeber von „Svensk Botanik“.

Bei der von Tilesius genannten Schrift handelt es sich wohl um „Utkast till Elefantens natural historia : Med tvenne i Koppar graverade tabeller, ritade och tillika med texten. Utgifne af I.W. Palmstruch“ [1770-1811]. Stockholm : Delen, 1804. 31 S., [2] gef. Bl. : 2 Ill. (Kupferst.).

Der französische Naturforscher Georges Cuvier hatte erstmals 1796 ein „Mémoire sur les épèces d'elephants tant vivantes que fossils, lu à la séance publique de l'Institut National le 15 germinal, an IV.“ im *Magasin encyclopédique*, 2e année, 3 : 440-445 veröffentlicht. Im Jahr 1806 erschien dann sein Artikel „Sur le grande Mastodonte, animal très-voisin de l'éléphant, mais à mâchelières hérissées de gros tubercles, dont on trouve les os en divers endroits des deux continens, et surtout près des bords de l'Ohio, dans l'Amérique Septentrionale improprement nommé Mammouth par les Anglais et par les habitans des États-Unis“ in den *Annales du Muséum d'Histoire Naturelle* 8 : 270-312, pls 49-56.

Tilesius hatte ein aus Sibirien nach St. Petersburg transportiertes Mammut rekonstruiert, von dem er schon Haarproben an verschiedene Forscher verschenkt hatte. Zu seiner falschen Platzierung der Stoßzähne vgl. den Artikel von John McKay (http://mammothtales.blogspot.com/2010_02_01_archive.html).

St. Petersburg ce 5 Septembre

1810.

Monsieur!

Avec autant de plaisir que de reconnoissance j'ai eu l'honneur de recevoir Votre agreable lettre du 3 Aout 1810 et je me hâte de me quitter d'un devoir et de satisfaire a un de Vos Desirs et de Vous envoyer le premier Volume de notre Voyage autour du Globe. Vous verrez en lisant cette Volume, que nous n'avons pas eu la même liberte et locomotivité que les Hollandois cependant notre sejour dans le port de Nangaskaki, mais quand à moi même je m'avois procure toujours la permission de faire quelques petites excursions au moyen des cadaux, que je faisais a mes amis Skiseuma, Sakesaburro, Sakousitiro, Namura Jennoski et autres interprètes.⁵³ J'ai eu la precaution de me procurer auparavant en Europe quelques doucaines des montres de Geneve, qui font les passez par tout et qui m'ont fournis l'occasion de profiter de la nature defendue et de la liberte pour copier une quantité des objéts de l'histoire naturelle et des paysages. Mais outre ce là nous etions toujours observees et entourees par les chaloupes de la Police et de Garde marine de sorte, que dans le Commencement je n'avois pas autres objets a d'écrire et a deviner, que des Zoophytes, Varec's; Mollusques et des poissons, mais les quelles j'ai tous observees vivants. Le seconde Volume de notre Voyage contenant le fin de l'histoire et de la partie nautique sera imprimé vers le fin de l'année courant, le troisième et quatrième contiendront l'explication des planches et des Cartes geographiques, dont la plus grande partie est de ma façon, car je n'ais pas seulement fait le naturalise, mais en meme temps le peintre de l'expédition, j'ai dessinée j'usque a soixantes planches.⁵⁴ L'atlas même n'est pas encore publie, puisqu' les Graveurs n'ont pas encore achevé que la moitié des planches en espace de presque cinq annes – ce le cele Russe pour les arts et les sciences – La Vue de Desima et de la ville de Nangasaki et le poisson Cichla Banjos, que Vous avez recue, et encore les autres planches de Papenberg Kibatsch Matmai etc sont les plus bien executées. /

Les deux planches coloriées, que j'ai eu l'honneur de Vous présenter, représentent une *Actinia nova gigantea Camtschatica* dont j'ai publié la description dans le Iier Volume des Mémoires de l'academie imperiale des sciences a St. Petersburg.⁵⁵ Je supposais que Vous aviez déjà recue cette Volume par Mr. Fuss notre secretaire et comme les planches de cette memoire ne sont pas bien executées par le Chalcographe, je voudrais bien ajouter un plus juste tableau. Je ne pense

⁵³ In den Texten von Krusenstern, Langsdorff, Löwenstern und Tilesius tauchen die jeweils anders geschriebenen (Vor-)Namen folgender japanischer Dolmetscher auf:

Oberdolmetscher (大通詞):

Ishibashi Sukezaemon [石橋助左衛門]; Namura Takichiro [名村多吉郎]; Nakayama Sakusaburo [中山作三郎] (s. Anmerkung 46).

Unterdolmetscher (小通詞):

Motoki Shozaemon [本木庄左衛門]; Imamura Saiemon [今村才右衛門]; Baba Tamehachiro [馬場為八郎].

Dolmetscherassistenten (末席):

Iwase Yajuro [岩瀬弥十郎], der in TIL Nr. 97 „Proviant Dolmetscher Azurro“ genannt wird (lt. Information von G. Sterba vom 29.7. 2010); Suenaga Jinzaemon [末永甚左衛門]

Vgl. neben den Abbildungen im Krusenstern-Atlas dazu auch die Abbildungen bei Philipp Franz von Siebold *Nippon – Archiv zur Beschreibung von Japan. Vollständiger Neudruck der Urausgabe ... in zwei Text- und zwei Tafelbänden mit einem Ergänzungsband.* Hrsg.v. Japanisch-Holländischen Institut Tokyo (Tokyo: Kodansha 1975) im Tafelband II Tab. VIII – XIV (= T. 42 – 50) mit den Namenszügen und Stempeln.

⁵⁴ Zu den von Tilesius zum Druck bestimmten Erklärungen der Kupfer vgl. Sondermann „Tilesius und Japan (Teil 1)“ (s. Anmerkung 1), S. 109–112.

⁵⁵ Abgedruckt in den *Mémoires de l'Académie Impériale des Sciences Pétersbourg* T.1 (1809), S. 388–422, mit Tab. XIV,1 und Tab. XV 1,4,5. Vgl. auch die Tilesius-Bibliographie (s. Anm. 7) Nr. 42.

pas, de rester dans cette pays ci par ce que la puissance des mechants et des ignorants et des paroisseux est trop grande et capable d'empêcher les progres des arts, sciences et le cele de l'honnet homme. Il faut faire partie avec la Canaille, ou partir⁵⁶ – Selon les grandes paroles, que on faisait *de* et *en* Russie des fruits et publications, des depenses, qu'on pansoit de faire pour la gloire de cette Voyage la autour du globe, j'ai ramassé une grande quantité des materiaux scientifiques et des corps naturels qui sont acceptes avec une indifference, qui m'à étonné et qui ne reponde pas a cet *parturiunt montes* : l'on est trop avare d'imprimer mes observations – je viens de remarquer, que je suis née trop tard la periode des sciences est peut être passé – et le ciel se commence a obscurer en Sud et Nord, l'esprit de guerre arrache tout pour ses forces. Je n'avois pas manque de porter avec moi tous Vos ouvrages en egard de Japon et celles de Kaempfer sur le Japon c'avoir la *Flora Japonica* la traduction allemande de Votre Voyage et la françoise par L-Mark plus complete, mais les acta Suecica et les memoires de Harlem je n'ai consulté qu'après le voyage tant, que je les aie trouvé dans la Bibliotheque de l'Academie – C'est bien difficile de se procurer tout ce qu'il est avance des memoires sur les objets de Japan et je serois bien ravis, quand Vous vouliez bien avoir la bienveillance de me communiquer Vos dissertations academiques sur les poissons Vers Insectes et plantes Japonaises en cas, qu'ils sont ecrites en latin, six ou huit descriptions des poissons, communiquees dans les *Nya Handlingar* etc. j'ai lue et cité tant que j'eu pu comprandre de la langue Suedoise dont je suis tout a fait ignorant. J'etois si heureux de trouver à Copenhague un amis en feu M. Vahl, qui m'à soullage l'achat de livres necessaries pour le voyage, que les Russes avoient manque en m'assurant {par lettre} que la bibliotheque de Voyage etoit complete {cet a dire} (des Romans Comédies etc.). De ce même Vahl j'ai achte les quatres premieres Decades de Votre //

excellent Ouvrage : *Icones plantarum Japonicarum* in fol. et je Vous suis infiniment obligé quand Vous auriez la bonté de me compléter cette ouvrage pretieuse par la cinquieme Decade, que je n'ai pas pu trouver dans aucune librairie de St. Petersbourg.⁵⁷ Je regrette beaucoup que la Regence Suedoise ne vient de profiter de Vos fruits Japonaises et ne pense pas de favoriser la continuation de ces cahier excellentes, don't les derniers mêmes par les gravures en aqua tinta sont distinguees si hereusement. Vous verrez, en lisant cette Volume de Voyage de Krusenstern, que nous n'etions pas si heureux que les Hollandois en egard de Commerce. C'est ne que quelques peux de la Watte de Soye – de Soya et de Saki, que les Japonois pour ainsi dire, par Commiseration, nous ont donné pour le Retour a Camtschatca – pour vivre. C'est ne que rien, que nous avons rapporté de Japons, point de Vernisserie, point des Instruments, point de Quivre, de Soy, de Sabre, de Livres, des Cartes, rien du tout.

C'est moi seul, qui a profité de Japon, mais les objets de ma conquette ne sont que des Varecs, Zoophytes, Mollusques Poissons et une grande quantité des esquizes et dessins, que j'ai dessiné sur le champ-moi même, les plus interessantes et nouvelles seront les physiognomies nationales, les habillements, les paysages et les ornements publiques de Japon, les Vaissaux ou barques diferentes – mais helàs a Petersbourg l'on n'as pàs des graveurs en aquatinta, en ponce, point des imprimeurs en couleur et – qu'il est encore plus desaggreable pour moi, point d'envie de les publier. Une grande partie des gravures de l'Atlas a perdue la ressemblance des dessins, ah c'est bien damage que les dessins ne sont pas faites pour l'Angleterre, la France ou l'Allemagne, Mais je suis venue de Vous fatiguer par mes Raisonemens. Je Vous demande pardon et j'espere de

⁵⁶ Im Juni 1814 verließ Tilesius mit seinem Sohn Adolph Russland für immer. Adolph kehrte später nach St. Petersburg zurück und wurde dort letztlich Direktor der Postzensur.

⁵⁷ Diese fünfte Dekade war bereits 1805 erschienen (s. Anmerkung 23).

Vous pouvoir communiquer bientôt des choses plus interessantes. Portez Vous bien et tachez de conserver Votre sante pretieuse pour les progres des sciences. Avec autant de Respect que de Reconnoissance pour les lumiers, que j'ai tiré de Vos ouvrages je me recommande a Votre bonne grace et je me flatte d'avoir la permission de me nommer avec une hote Veneration Monsieur!

Votre
tres sincere et avoue s[erviteur]. D. Tilesius

St Petersburg d 1. Octobr 1810.

Hochwohlgebohrner!

Hochgelahrter, hochehrfahmer

Herr Profeßor und Ritter!

Hochgeneigter Gönner!

Aus Mangel an einer bequemen Gelegenheit habe ich meinen vorigen Brief vom 5. Septembr. d. J. und den für Ewr. Hochwohlgeb. bestimmten ersten Band von *Krusensterns* Reise um die Welt noch so lange liegen laßen müßen, bis der Herr Graf *Steding*⁵⁸, Schwedischer *Ambassadeur* an unserm Hofe die Güte gehabt hat, mir eine bequeme Gelegenheit zur Absendung zu offeriren.

Ich benutze jedoch auch zugleich diese Gelegenheit Ewr. Hochwohlgeb. meinen herzlichen Dank zu sagen für die gütige Mittheilung Ihrer academischen Dissertationen und der *Flora Capensis*. 1 Vol. welche mir vorzüglich schätzbar ist. /

Endlich wage es auch, Ewr. Hochwohlgeb. um Ihren gütigen Rath und Belehrung zu bitten über eine beygelegte Abbildung und Beschreibung einiger Japanischen *Aroiden* über deren Bestimmung ich noch zweifelhaft bin, ob ich gleich mit H.R. *Wildenow*⁵⁹ bereits darüber *correspondirt* habe. Ich habe von allen *Copien* gemacht und bitte also Ewr. Hochwohlgeb. alles, was ich Ihnen künftig zu übersenden die Ehre haben werde, zu behalten und mir nicht als Ihre belehrende *Critik* davon zurückzusenden. Was die Fische betrifft, die Ewr Hochwohlgeb. in den *Stockholmer Acten* beschrieben haben *Tom XIII. et XI. 1790 et 1792 Callyonimus, Siluras Perca Ostracion et Sciaena*⁶⁰; so habe ich diese, so viel es mir die gänzliche Unwißenheit in der

⁵⁸ Der Graf Curt Bogislaus Stedingk (1746–1837) diente im amerikanischen Freiheitskrieg auf französischer Seite, kämpfte 1790–91 für Schweden gegen Russland, und war seit 1792 außerordentlicher Botschafter in St. Petersburg.

⁵⁹ Karl Ludwig Willdenow (1765–1812) war seit 1801 Direktor des Berliner Botanischen Gartens. Die Korrespondenz mit Tilesius ist nicht erhalten.

⁶⁰ Bei diesen Artikeln von Thunberg handelt es sich It. Thunberg-Bibliographie (s. Anm. 23) um : Nr. 150 „Beskrifning på tvänne Fiskar ifrån Japan,“ Kg. Vetenskaps Academiens Nya Handlingar, Stockholm, 11 (1790), pp. 106–110, pl. III.

Auf Deutsch erschienen als :

Nr. 175 „Zwey ausländischen Fische, beschrieben,“ [!] Der Königl. Schwedischen Akademie der Wissenschaften, Neue Abhandlungen, aus der Naturlehre, Haushaltungskunst und Mechanik, Leipzig, 11 (1792), pp. 175–177, pl. VI.

Nr. 172 „Tvänne Japanske fiskar,“ Kg. Vetenskaps Academiens Nya Handlingar, Stockholm, 13 (1792), pp. 29–32, pl. I.

Schwedischen Sprache erlaubte, gelesen, (diese Fische habe ich auch alle selbst in *Nagasaki* erhalten) aber bey den *Houttuynschen* Beschreibungen in den *Harlemer Acten* habe ich keine *Icones* gefunden. Die *Raja Thuin* und *Lophius Faujas* bey *Lacepede* sind auch aus dem Haven von *Nangasaki*, das wuste aber *Lacepede* //

nicht, sie müßen auch überdies noch einmal beschrieben und abgebildet werden denn es waren alte *Exemplare*, die vielleicht noch von *Kaempfer* ins Erbstatthaltersche *Naturalien Cabinet* nach *dem Haag* geschickt worden waren⁶¹ H. Prof. *Thouin* und *Faujas Saintfond* tranportirten diese *Naturalien Sammlung* aus *dem Haag* nach *Paris*, darum ließ ihnen *Lacepede* diese Ehre wiederfahren. 50 bis 60 *Fischspecies* habe ich im Haven von *Nangasaki* nach dem Leben gemalt, aber das schöne Japanische Fischbuch in 2 folio Hefte mit saubern *colorirten* Holzschnitten besitze ich nicht. Wenn Ewr. Hochwohlgeb. es besitzen; so werden Sie es aus dem hier beygefügten Titel kennen. H. *Stützer* Chirurg der Ost.Ind.Comp. und Gesandtschafts *Medicus* der Holl. *Factorey* auf *Desima* hat es der Kaysrl. *Academie* der Wißenschaften in う海 *Petersburg* geschenkt.

Es verdiente wohl als eine literarische typographische Seltenheit in Europa nachgestochen zu werden und sollte es wieder mir zu Händen kommen; so besorge ich dieses Unternehmen gewiß selbst. Ich werde mir es zur angenehmsten Pflicht machen, alles, was ich über Japan *publicire* zuerst Ewr. Hochwohlgeb. zu *communiciren*. Das mehreste werde ich im 4. Bande des *Krusensternschen* Werkes abdrucken laßen. / 地

Sollten Ewr. Hochwohlgeb. alsdann auffallende Fehler oder *Defecte* bemerken; so bitte ich gehorsamst mich zu *corrigiren* und zu belehren, ich bin selbst überzeugt, daß meine Versuche außer meinen Lieblingswißenschaften, den Fischen Mollusken und Zoophyten, mangelhaft ausfallen müßen. Mit den Säugethieren Vögeln Amphibien und Insecten habe ich mich wenig beschäftigt und bin in ihrer Kenntniß und Bearbeitung sehr zurück. In der *Botanik* bin ich ganz fremd, weil ich mich blos mit den *Fucis Conferven*, *Ulven* usw. beschäftigt habe, in der *Mineralogie* ebenfals, weil ich nur auf Versteinerungen und vulkanische Producte Rücksicht genommen. Ewr. Hochwohlgeb. werden mich sehr glücklich machen, wenn Sie mich ferner Ihres höchst angenehmen und belehrenden Briefwechsels würdigen und mir als einen der Sprachen Unkündigen ihre gütige Nachsicht nicht versagen wollen.

Mit wahrer Hochachtung verharre
Ewr. Hochwohlgeb.
gehorsamster Verehrer D. *Tilesius*⁶²

Nr. 173 „Åtskillige förut okände fiskar af Abbor-slägtet,” ebd., pp. 141-143, pl. V .

Ich danke Prof. Ingvar Svanberg für die Bereitstellung dieser Informationen.

⁶¹ Vgl. die fast gleichlautende Anmerkung von Blumenbach zu der ihm von Langsdorff gelieferten Fischliste in Voigt's *Magazin für den neuesten Zustand der Naturkunde* 1806 XI. Bandes 4. St. (April 1806), S. 308.

⁶² Es folgen weitere 3 Seiten Beilage No. I, No. II. und No. III (auf Lateinisch) zu drei „*Aroidea Japonica*“, sowie drei weitere lateinisch geschriebene Briefe von *Tilesius* an *Thunberg*, datiert : „*Calendis Aprilis*“ 1811, „*Calendis Augusti*“ 1812 und schließlich „*X. ante Calendi Junii*“ 1813. *Thunberg* hat sich auf einem Extrablatt notiert, was er *Tilesius* an Sonderdrucken und Büchern gesandt hat. Der Krieg gegen *Napoleon* behinderte die Korrespondenz sehr. Von Deutschland aus scheint *Tilesius* nicht mehr versucht zu haben, wieder Kontakt zu *Thunberg* aufzunehmen.

Anhang 2 : Verzeichnis der Tilesius-Illustrationen in der Kustodie der Universität Leipzig

Unterlagen zu Wilhelm Gottlieb Tilesius von Tilenau (1769–1857)

Zusammengestellt von

Günther H.W. Sterba

unter Mitwirkung von

Erika Ebert

Tilesius-Aquarelle, z.Zt. verwahrt an der Universität Leipzig.

Allgemeine Bemerkungen zur Herkunft und Gedanken zu Eigentumsfragen.

Hinweise über den Inhalt und Aufbau der Liste.

Gruppe 1 : Blätter, die im Krusenstern-Atlas als Tafeln oder Figuren von Tafeln publiziert sind.

Gruppe 2 : Blätter, die im Krusenstern-Atlas nicht publiziert sind.

Allgemeine Bemerkungen zur Herkunft und Gedanken zu Eigentumsfragen

Im Zoologischen Institut der Universität Leipzig wurden seit etwa 1850 rund 190 vorwiegend farbige Aquarelle (Landschaften, ethnogr., zoolog., botan. Darstellungen) aufbewahrt, die zum Nachlass des Wilhelm Gottlieb Tilesius von Tilenau (1769-1857, geb. u. gest. in Mühlhausen/Thüringen) gehören. Tilesius nahm als Naturforscher an der 1. russischen Weltumsegelung unter v. Krusenstern teil. 176 Blätter des Konvolutes wurden von Tilesius während der Reise skizziert, z.T. schon während der Reise als farbige Aquarelle ausgearbeitet, z.T. erst nach der Reise komplettiert und dabei vermutlich öfters geschönt. Verschiedene Originale des Konvolutes dienten als Vorlagen für die Kupfertafeln des Krusenstern-Atlas, der die 3-bändige Reisebeschreibung ergänzt. Bei den restlichen Blättern handelt es sich um Aquarelle, die z.T. vermutlich aus dem Nachlass von Pallas stammen.

Wie die Tilesius-Originale in das Zoologische Institut der Universität gekommen sind, lässt sich bislang nicht genau klären. Otto Hübner schreibt dazu : „Des Hofraths gedruckte Werke und seinen handschriftlichen Nachlaß händigte der Sohn dem Professor Ed. Poeppig (Dir.d.Zool.Einrichtungen 1833-1868) in Leipzig aus, der des Verstorbenen Biographie schreiben wollte. Poeppig starb 1870, ohne eine Biographie verfasst zu haben, und das gesamte Material kam mit der Bibliothek des Professors in fremde Hände.“ (Mühlhäuser Geschichtsblätter 6, S. 77, 1905/06). Leider vermerkte Hübner nicht die Quelle für diese Feststellungen, jedoch sprechen folgende Umstände für deren Richtigkeit : Als ich (G.St.) 1959 die Leitung des Institutes für Zoologie in Leipzig übernahm, machte mich mein Vorgänger A. Wetzel (Institutsdir. 1952-1959) besonders auf die Mappe mit den Tilesius-Originalen aufmerksam und betonte unter Berufung auf P. Buchner (Institutsdir. 1934-1945), dass diese seit Poeppig von Ordinarius zu Ordinarius weitergegeben und gleichsam treuhänderisch verwaltet werden. Bei meinem Besuch der Fam. Buchner in Ischia (1959) hat mir Herr Buchner diesen Sachverhalt ausdrücklich bestätigt. Bei einer ersten Sichtung und listenmäßigen Erfassung wurde ein kleiner Zettel mit der stark ausgebleichten Notiz „Eigenthum Tilesius“ gefunden.

Im Rahmen der Hochschulreform 1968 wurde mit der Umstrukturierung der Biol. Institutionen angeordnet, dass die Tilesius-Originale dem neugegründeten Bereich Taxonomie und Ökologie zu überantworten sind. In den Folgejahren tauchten zunehmend Tilesius-Aquarelle als Wandbilder, bei der Rahmung z.T. beschnitten, in verschiedenen Räumen der Sektion Biowissenschaften auf. Einige Originale landeten im Bestand des Naturkundemuseums der Stadt Leipzig. Erst nach meiner Emeritierung (1987) ging, durch eine Verfügung des damaligen Sektionsdirektors G. Wagner, die treuhänderische Verantwortung erneut auf mich über. Bei den folgenden Versuchen, das Konvolut wieder zu komplettieren, waren 2 Blätter nicht mehr auffindbar, auch fehlte die erwähnte Notiz. 1992 wurde das Konvolut der Kustodie überstellt.

Diese Vorgeschichte drängt aber auch zu der Frage, wem die Tilesius-Originale letztlich gehören. Eine Schenkung an die Universität läßt sich nicht nachweisen und ist auch unwahrscheinlich, da Tilesius zur Universität Leipzig ein durchaus reserviertes Verhältnis hatte. Immerhin war seine Bewerbung um die Professur für Naturgeschichte (1802) negativ beschieden worden, auch seine Hoffnung, nach der Rückkehr aus St. Petersburg (1814) eine Professur zu erhalten, hatte sich nicht erfüllt. Alleinerbe von Wilhelm Gottlieb Tilesius v. Tilenau war sein Sohn Adolf. In dessen in St.Petersburg notariell ausgefertigtem Testament überträgt er unter Punkt 11 seiner Schwester Natalie Petr. Golowlew (Tochter der verstorbenen Mutter des Erblassers, Clementine Iwanowna - in erster Ehe Tilesius von Tilenau, in zweiter Ehe Golowlew) „seinen ganzen sonst beweglichen und unbeweg-

lichen Nachlaß, worin immer er bestehen und wo er sich befinden mag, Alles ohne Ausnahme ...“ (Mühlhäuser Stadtarchiv 11/93). Adolf's Schwester verzichtete jedoch zu Gunsten der Witwe Fehre in Mühlhausen, die W.G. Tilesius bis zu seinem Tode gepflegt hatte. Über Frau Fehre kam letztlich der schriftliche Nachlaß und der in Mühlhausen befindliche Teil der Tilesius-Bibliothek in die Zuständigkeit der Stadt Mühlhausen. Die dazugehörenden in Leipzig lagernden Teile des beweglichen Nachlasses wurden dabei übersehen, bzw. waren schon damals in Vergessenheit geraten.

Vor diesem Hintergrund läßt sich die Auffassung vertreten, daß die bei der Universität Leipzig archivierte Tilesius-Originale eigentlich zum Bestand des Mühlhäuser Stadtarchivs gehören. Eine Konzentration des Nachlasses in Mühlhausen wäre nicht nur aus sachlichen Gründen zu begrüßen, sie läge auch im Interesse von Tilesius, der zeitlebens seiner Heimatstadt besonders verbunden war.

Hinweise über den Inhalt und Aufbau der Liste.

Die Liste umfaßt nur Originale und Andrucke, die sich der Weltumsegelung zuordnen lassen, insgesamt 176 Blätter, nummeriert 1 bis 176.

Die Blätter sind in zwei Gruppen unterteilt.

1. Gruppe, Nr. 1 bis 53. Blätter, die im Krusenstern-Atlas als Tafeln oder Teile von Tafeln publiziert sind. Nicht immer stimmt die Vorlage mit dem Atlas-Kupfer völlig überein. Verschiedene Vorlagen dienten nur zur Gestaltung von Tafelhintergründen, z.B. sind Vögel manchmal in eine Landschaft gestellt, die als Einzelblatt vorliegt. Die 53 Blätter repräsentieren etwa 32% aller von Tilesius für den Krusenstern-Atlas ausgewählten Vorlagen.

Lfd. Nr.	Tafel-Nrn. im Atlas	Bemerkungen
1	VI fig. a, b, c	fig. a handkolorierter Andruck, fig. b und fig. c ergänzt. Gehörnte Kröte
2	VI fig. e	Original. Nasenbär
3	VII	Original. Nukahiwier der sich tatuieren läßt
4	VIII	Original. Mann von Nukuhiwa

5	IX	Original. Frau von Nukuhiwa
6	XVIII fig. oben	Original. Brasilian. Kiebitz
7	XIX fig. links	Original. Nukuh. Schädel v. links
8	XIX fig. Mitte	Original. Nukuh. Schädel v. vorn
9	XIX fig. rechts	Original. Nukuh. Schädel v. unten
10	XXVIII	Original. Cap. Clerks Grabmal
11	XXIX	Original, wie XXVIII, erneuert 1805
12	XXXI	Original. Camtschadale
13	XXXII fig. 1	Original. Cambala, Fisch
14	XLV	Original. Nur das japan. Wachboot
15	LI	Original. Nur der Hintergrund von LI
16	LIV	Original. Nur das Hauptboot, Mitte
17	LIV	Original. Nur das Boot, links
18	LVII	Original. Nur die Möven v. LVII
19	LVII	Original, Hintergrund v. LVII. Tiles. : „Amphitheatralische Lage der Stadt Nangasaki in Japan“
20	LVIII	Original. Megasaki von der Seeseite
21	LIX fig. 1	Original. Platycephalus, Fisch
22	LIX fig. 2	Original. Wie LIX fig. 1, andere Art
23	LX fig. 1, 2, 3, 4, 8, 9	Original. 4 versch. Fische
24	LX fig. 5, 6, 7	Original. Perlenaal, Fisch
25	LX fig. 10, 11	Original. Jap. Röhrenmaul, Fisch
26	LX fig. 12, 13, 14	Original. 3 versch. Fische
27	LXI fig. 3	Original. Roter Seeteufel, Fisch, dors.
28	LXI fig. 4	Original. Wie LXI fig. 3, von ventral
29	LXII fig. 1	Original. Jap. Spiegelfisch
30	LXII fig. 2, 3, 4, 5, 6, 7	Original. Schwarzer Papageifisch
31	LXIII fig. 1	Original. Jap. Lippfisch
32	LXIII fig. 1	Handkolorierter Andruck von LXIII fig. 1, ergänzt durch Querschnitt-Skizze
33	LXIII fig. 2	Original. Jap. Blutauge, Fisch
34	LXIV fig. 1	Original. Der Banjo, Fisch

35	LXIV fig. 2, 3, 4	Original. Jap. Blödauge, Fisch
36	LXV fig. 1, 2, 3, 4, 5, 6	Original. Jap. Meerohr, Schnecke
37	LXV	Handkolorierter Andruck von LXV, durch 1 Skizze ergänzt
38	LXV	Handkolorierter Andruck von LXV, durch 7 Skizzen ergänzt
39	LXVI Nr. 1	Original. Jap. Sumpfpflanze
40	LXVI Nr. 2	Original. Jap. Sumpfpflanze
41	LXVI Nr. 3	Original. Jap. Sumpfpflanze
42	LXXVI	Original. Iesso, Romanzoff Bay
43	LXXX	Original. Aniwa Bay, S-Sachalin [deutlich russische Gesichter!]
44	LXXXI	Original. Nadeshda Bay, Sachalin
45	LXXXVII fig. 4	Original. Iesso Schleimgroppe
46	LXXXVIII 39 figs.	Original. Japan. Seegewürme und Mollusken. Tintenfische figs. 32, 33, 34
47	XC	Original. Macao, Camões Grotte
48	XCI	Original. Canton, Flußlandschaft. Boot des Hoppu von Canton
49	XCII	Original. China, Bocca Tigris, Insel im Canton River
50	XCIV	Original. Macao, Orang-Utan
51	XCVI fig. 1	Original. Chines. Schädel v. links
52	XCVI fig. 2	Original. Chines. Schädel v. vorn
53	XCVIII	Original. St. Helena, James Town Von der Seeseite. Vergl. Nr. 174, 175

2. Gruppe, Nr. 54 bis 176. Blätter, die im Krusenstern-Atlas nicht publiziert sind. Einige davon wurden an anderer Stelle veröffentlicht. Die Nummerierung der Blätter folgt dem Reiseverlauf; Ausnahmen kommen vor. Für die Bezeichnungen der Blätter dieser Gruppe werden die von Tilesius verwendeten Bezeichnungen meist unverändert übernommen. Bei Blättern ohne Bezeichnung konnten in einigen Fällen die Titel aus dem Reisetagebuch oder anderen Quellen rekapituliert werden. Viele Blätter sind mit ausführlichen Texten beschriftet, die Tilesius erst wesentlich später einfügte, bzw. auf die Rückseite schrieb.

Lfd. Nr.	Bezeichnung	Reiseabschnitt, Bemerkungen
54	Amodytes Tobianus Norv.	Ostsee, Fisch
55	Trigla rubens	Falmouth, Fisch
56	Clupea Cornubiensis	Falmouth, Fisch
57	Fort St. Andrez	Teneriffa
58	Der neue Vulcan	Teneriffa, von Citoyen Gros
59	Stadt Nossa Senhora Dotesterro	Brasilien, Santa Catharina
60	Ohne Bezeichnung	Brasilien, 2 Kokospalmen
61	Kokosnuß und Ast von Ricinus	Brasilien, teilw. Lissabon 1795
62	Silurus Pagre	Brasilien, Fisch
63	Coryphaena Hippurus	Brasilien, Fisch
64	Scomber pelamis, Bonito	Brasilien, Fisch
65	Echeneis Remora	Brasilien, Fisch
66	Brasilianischer Mohrensklave	Original und Kopie, Umrisse von Hand u. Fuß
67	Der pfeifende Macaco	Brasilien ; Affe
68	Nukahiwer Wildenschädel	Nuku Hiva
69	Morai	Nuku Hiva
70	Ostrea mater perlarum	Nuku Hiva, Perlauster
71	Palinurus versicolor	Nuku Hiva, Krebs
72	Alca cirrhata, Papageitaucher	1. Kamtschatka-Aufenth., Vogel Rücksk. mit Vogelskizze, davon ein Aquarell auf Rückseite 133
73	Salmo salar das Weibchen	1. Kamtschatka-Aufenth., Fisch
74	Salmo salar der Hakenlachs	1. Kamtschatka-Aufenth., Fisch
75	Lachsforelle	1. Kamtschatka-Aufenth., Fisch
76	ohne Bezeichnung	Japan, nahe Papenberg/Nagasaki
77	Horners Dörfchen	Japan, Kaminosima bei Nagasaki
78	ohne Bezeichnung	Japan, Bucht bei Nagasaki
79	ohne Bezeichnung	Japan, Kibatsch bei Nagasaki
80	ohne Bezeichnung	Japan, Kibatsch bei Nagasaki
81	Quanwon Tempel und Pulvermagazin	Japan, Landschaft bei Nagasaki

82	Kaiserwache bei Nagasaki	Japan, Landschaft
83	erste Kaiserwache	Japan, Zweitfertigung von 82
84	Megasaki von innen	Japan, verm. von Löwenstern gezeichnet
85	Montgolfiere aus Megasaki	Japan, RückS. mit Zeichnung von Loewenstern : Desima, Holländische Factorey in Nagasaki
86	Langsdorfsche Montgolfiere	Japan, aufgestiegen, brennend. Rückseite : Federzeichnung von Loewenstern : Bau der Häuser und Schiffe
87	Prozession des russ. Gesandten	Japan, vermutl. nicht von Tilesius Rücks. : Landschaft bei Nagasaki / Fürstenboot / Matrosen-Uniformen
88	Japanerinnen	Nationale Physiognomien und Trachten. RückS. mit Skizze eines jap. Reise-Necessaires
89	Ober Banjos Wachboot	Japan, von Loewenstern gezeichnet, von Tilesius koloriert. Ein gleiches Boot auf Nr. 76
90	Scomber trachurus	Japan, Fisch
91	Coryphaena rubens	Japan, Fisch
92	Esox Sphyaena	Japan, Fisch
93	Aco arra	Japan, Fisch
94	Scomber olivaceus	Japan, Fisch
95	Chaetodon cornutus	Japan, Fisch
96	Sparus Dentex (?)	Japan, Fisch
97	Mugil Cestreus	Japan, Fisch
98	wie Nr. 97	97 + 98 Chris. Aug. Zimmermann pinxit
99	Pleuronectes ocellatus	Japan, Fisch
100	Raja aquila	Japan, Rochen
101	Uranoscopus maculatus	Japan, Fisch
102	Tetraodon fasciatus links	Japan, Fische
	Cottus Aracabú	rechts-oben
	Blennius Iris	rechts-Mitte
	Salmo lavaretus unten	
103	Squalus Sinensis (Squatina)?	Japan, Hayfisch

104	Rhinobatos melanorhynchus	Japan, Hayrochen
105	Synanceja tuberculosa	Japan, Teilblatt 1
	Synanceja papilaris affinis	Teilblatt 2, nur Text
106	Tetraodon undulato lineatus	Japan, Fisch
107	wie Nr. 106, ohne Text	Japan, Fisch
108	Muraena Conger	Japan, Fisch, von Horner gezeichnet, von Tilesius vollendet
109	Clupea sprattus	Japan, Fisch
110	Süßwasser Aal	Japan, Fisch
111	Exocoetus volitans	Japan, Fisch
112	Der rothe Seeteufel	Japan, Fisch, nach 1806?
113	Lophius viviparus links	Japan, Fische, kolorierte Andrucke
	Lophius transversus rechts	auf der Rückseite, unklar erläutert
114	4 Tintenfische	Japan, japanische Texte
115	Megasaki, Stadtansicht	Japan, Bellingshausen pinx.
116	ohne Text, Romanzoff-Bay	Nord-Japan, Iesso
117	Ainos auf Iesso	Nord-Japan, Iesso, Personen mit auffallend russ. Gesichtern, Aquarell von Loewenstern
118	Salmo leucomaenis (?) oben	Sachalin, Patience Bay
	Agonus laevigatus unten	
119	Peter-Paul-Hafen, von der Seeseite	2. Kamtschatka-Aufenthalt, auf der Rücks. : „...für Frau von Krusenstern auf Seide gemalt“
120	wie Nr. 119	vermutlich nicht von Tilesius
121	Peter-Paul-Hafen, von der Landseite	2. Kamtschatka-Aufenthalt
122	Alte Salzsiederei	2. Kamtschatka-Aufenthalt
123	Holzkaten in Peter-Paul-Hafen	2. Kamtschatka-Aufenthalt
124	Nadeshda Bucht, Siedlung	Nordsachalin
125	wie Nr. 124, jedoch anderer Ausschnitt	Rücks. : Häuserreihe wie Nr. 124
126	ohne Beschriftung	Sachalin, nicht sicher
127	Kopf eines jungen Argali	2. Kamtschatka-Aufenthalt, Schaf
128	Kopf eines jungen Argali	2. Kamtschatka-Aufenthalt, Schaf
129	Kopf eines jungen Rentieres	2. Kamtschatka-Aufenthalt

- | | | |
|------|--|--|
| 130 | Anas spectabilis, Eiderente | 2. Kamtschatka-Aufenthalt, Ente |
| 131 | Anas Penelope, Pfeifente | 2. Kamtschatka-Aufenthalt, Vogel |
| 132 | Alca cornuta, Papageitaucher | 2. Kamtschatka-Aufenthalt, Vogel |
| 133A | Colymbus marmoratus | 2. Kamtschatka-Aufenthalt, Vogel |
| 133B | Rücks. von 133A : Colymbus Troile,
Braune Lumme | siehe auch Nr. 72 |
| 134A | Alca pica & Scolopax torquata | 2. Kamtschatka-Aufenthalt, Vögel |
| 134B | Rücks. von 134A : Anas Glaucion,
Schellente | |
| 135 | Colymbus grylle, Gryll-Lumme | 2. Kamtschatka-Aufenthalt, Vogel |
| 136 | ohne Text [G.St. : Phalacrocorax pelagicus Kormoran, juvenil] | |
| 137 | Pelecanus Carbo, Kormoran adult | 2. Kamtschatka-Aufenthalt, Vogel |
| 138 | ohne Text [G.St. : Haematopus ostralegus Austernfischer] | |
| 139 | Sterna stolidi maxima | 2. Kamtschatka-Aufenthalt, Vogel |
| 140 | Bos Pallasii Schädel von links | 2. Kamtschatka-Aufenthalt? |
| 141 | Bos Pallasii Schädel von oben | 2. Kamtschatka-Aufenthalt? |
| 142 | Bos Pallasii Schädel von unten & rechts | 2. Kamtschatka-Aufenthalt? |
| 143 | Topographie von Macao | Macao, Stadtansicht Nr. II |
| 144 | Festung Guia & Kirche St. Lazaro | Macao, Stadtansicht |
| 145 | Hafen mit zahlreichen Schiffen | Macao, Stadtansicht |
| 146 | Fort Bomparte | Macao, Stadtansicht Nr. XI |
| 147 | Hafen oberhalb der Stadt | Macao, Stadtansicht Nr. XII |
| 148 | Camõens Grotte von der Seite auf der
Rückseite kl. Skizze des Pavillons | Macao, Stadtansicht Nr. XV |
| 149 | Camõens Grotte Rückseite
auf der Rückseite Eingang in die Grotte | Macao, Stadtansicht Nr. XVI
Ansicht Nr. XVII |
| 150 | Gegend hinter dem Kloster Benja | Macao, Umgebung |
| 151 | Mohrensklaven der holl. Factorey | Macao, Kopie von Nr. XX, das Original schenkte
Tilesius Blumenbach |
| 152 | Pers.v. Wehr-, Lehr-u. Nährstand | Macao ; Nr. XIX. Kopie, mit der sich
Blumenbach bei Tilesius für das
Original bedankte |

153	Orang-Utan, Kopfstudie	Macao, ohne Text
154	wie Nr. 153	Macao, ohne Text
155	Orang-Utan, Fußstudie	Macao, o. Text. Rückseite mit Skizze einer Pflanze, zerschnitten
156	Orang-Utan, Handstudie	Macao, o. Text. Rückseite mit Skizze einer Pflanze, zerschnitten
157	Richtplatz von Macao	Macao. Vermutl. Kopie von Nr. 158. Rückseite mit schöner Abb. einer Meduse
158	Richtplatz von Macao	Macao
159	Flußlandschaft, Wantong Insel	China, Mündung Canton River
160	Flußlandschaft, Tiger Insel	China, Canton River
161	Flußlandschaft, ohne Text	China, Canton River
162	Flußlandschaft, Dänen-Insel	China, östl. Canton
163	Flußlandschaft, Franzosen-Insel	China, östl. Canton
164	Flußlandschaft, Whampoa Zollhaus	China, East Whampoa Isl.
165	Landschaft, ohne Text	China oder Japan
166	Flußlandschaft, Rücksl. viel Text	China, Canton River
167	Flußlandschaft, ohne Text	China, Canton River
168	Flußlandschaft, Brantweinsthurm	China, Canton River
169	Flußlandschaft, Honam Tempel	China, Canton River
170	Palme, Blütenstand u. Frucht	China, Canton
171	Bambussproßling und Ingwertopf	China, Canton
172	Stadtansicht, Canton	China
173	Große Seeblase	(?). Ähnlich Nr. 23
174	James Town von der Seeseite	St. Helena
175	wie Nr. 174	St. Helena
176	James Town von der Landseite	St. Helena

Einzelheiten, z.B. Format, Datierungen, Signaturen, Erhaltungszustand, werden hier nicht berücksichtigt. Auf schriftliche Anfragen kann dazu Auskunft erteilt werden.

F. Abbildungen

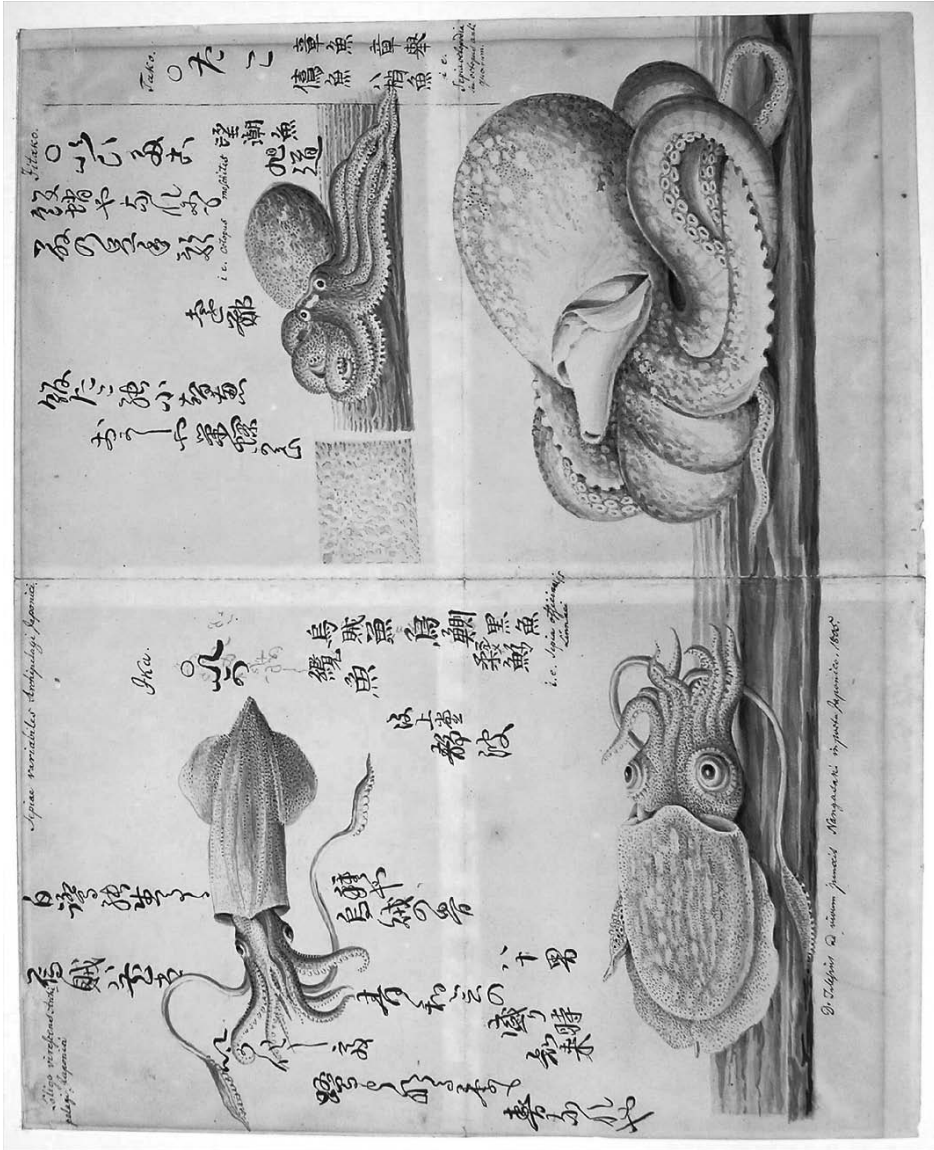


Abb. 1 Tintenfisch und Krake (Kopie nach jap. Original) (Kustodie der Universität Leipzig)



Abb. 2 und 3 KATSUMA Ryôsei „Umi no sachi“ (1762)

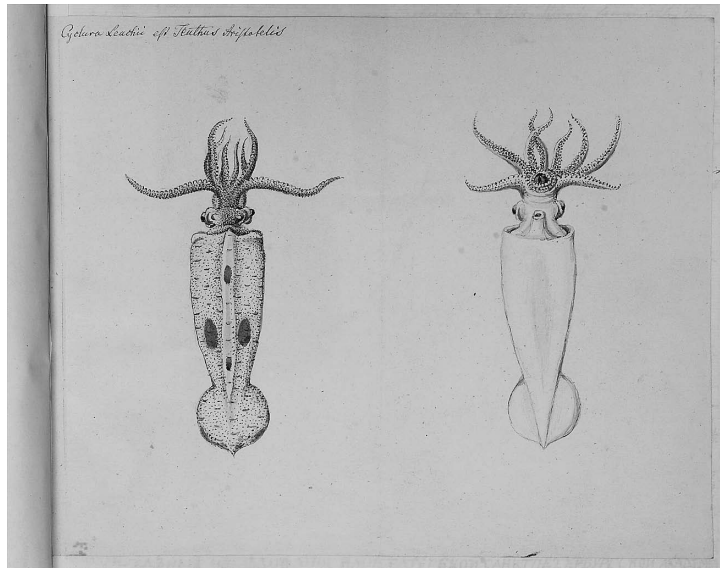


Abb. 4 Tintenfisch, gezeichnet von Tilesius (Senckenberg-Archiv, Frankfurt/M.)

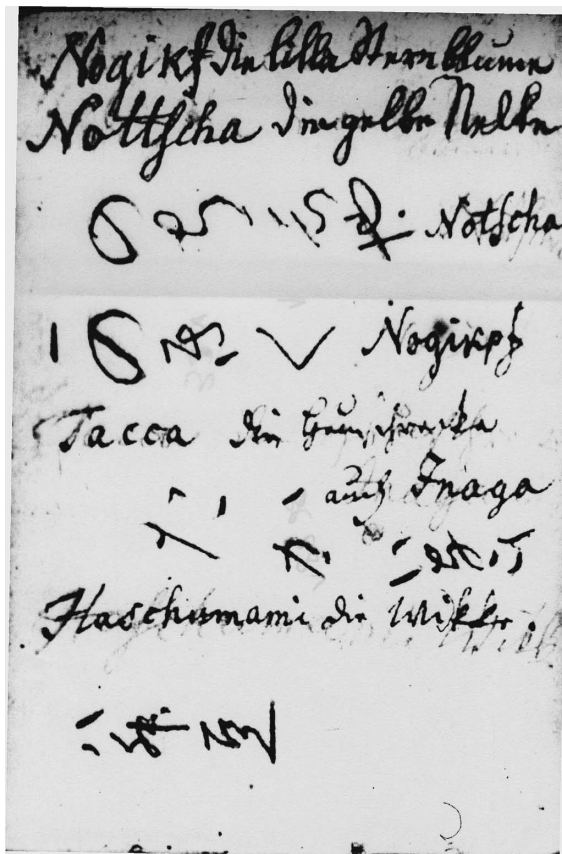


Abb. 5 Skizzenbuch von Tilesius (Nationalbibliothek Moskau)

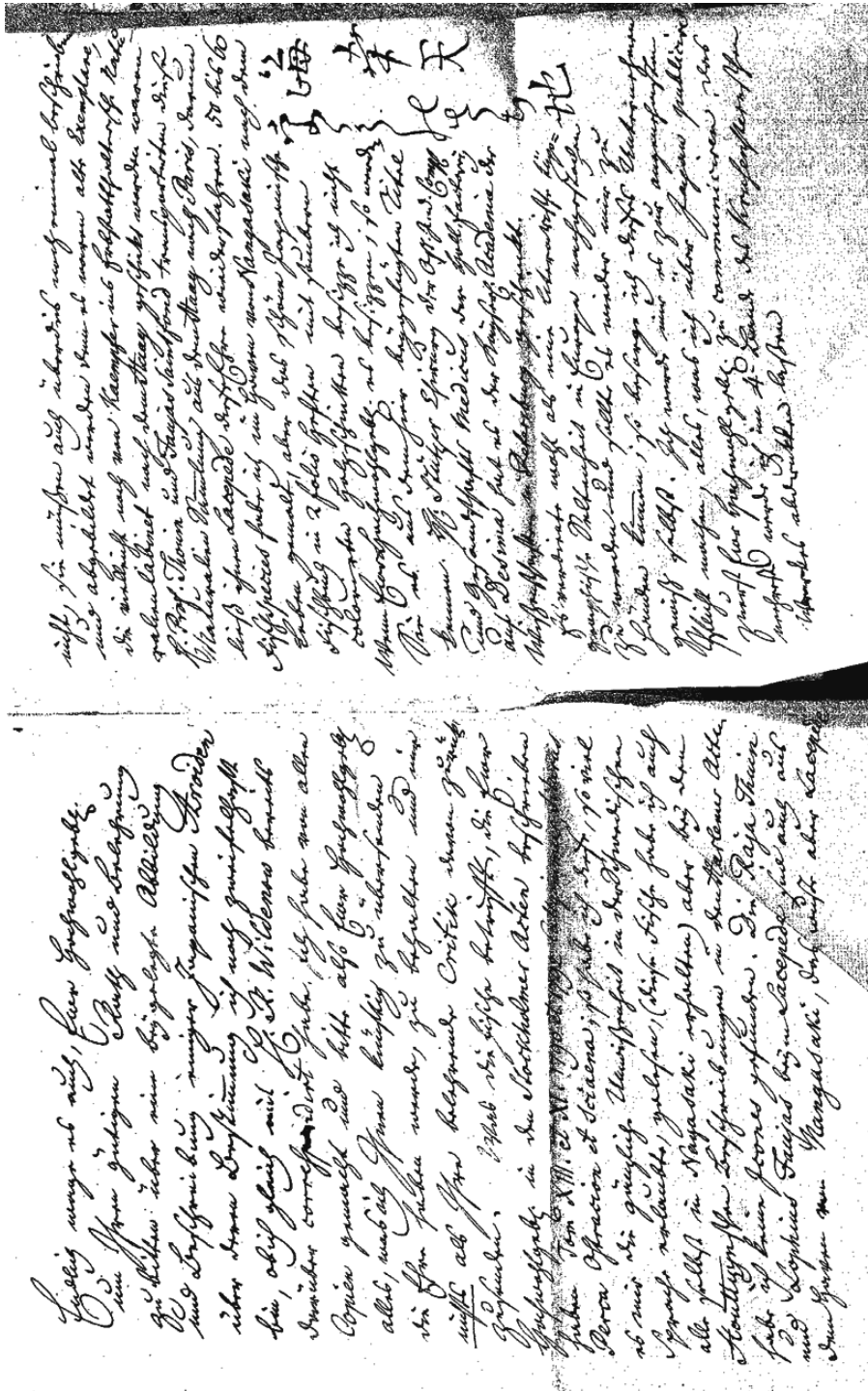


Abb. 6 Brief von Tilesius an Thunberg (St. Petersburg, 1. Oktober 1810) (Uppsala, Universitätsbibliothek)

Coming of Age in America : A Rite of Passage Away

Scott WATSON

Part One : A View to Live

The College of William and Mary and I did not get off to a good start. Now, after having spent three years there, I am on academic probation. There is one decent semester, just after quitting the football team, with a B average, but as academic study goes on textbooks and classrooms appeal to me less and less. I do find the various lecture forums — open to everyone on campus and free — stimulating, the speakers are all people from outside our school and many from outside academia. I still remember listening to Michael Harrington the famous sociologist and author of *The Other America*, which I'd read in high school and nodded at. David Premack, who at the time was doing vanguard research into primate intelligence. Jeroid X Green, a legal pioneer, early on used racism as legal defense. Leonard Matlovich, kicked out of the U.S. military on charges of homosexuality. John Dean of the Nixon administration came to speak about Watergate. The man who was saying the Kennedy assassination could not have been done by one man. After these forums — all at night — some of us would return to our dormitory rooms and have all night discussions. I am grateful to whoever it was who organized those forums.

William and Mary isn't where I wanted to go to college. Since my second year of (a four year) high school the image in my head is a small liberal arts college somewhere in New England. This image maybe comes from a summer trip we took there as a family when I was 15. The land is green, rocky and with many clear gently babbling brooks ; my parents would pull off the road at my urging to let me bathe in some.

The schools in New England that interest me (such as Bates or Colby College) do not offer athletic scholarships. William and Mary (in Virginia) does, which is why my father urges me to go there.

Two schools in Pennsylvania heatedly recruit me. One, Bucknell University, offers me early admission. At the time Bucknell does not offer athletic scholarships. Financial assistance, back then, is calculated according to need. There is a document called a Parent's Confidential Statement (PCS) that must be prepared. It tells completely a family's private money matters, and is sent to an agency located in Princeton, New Jersey. On that document we list three schools to which our family's financial information will be sent.

That is standard operating procedure, but, in the case of Bucknell University (BU), the assistant football coach there, the one who actively recruits me (making several visits to school and home, telephoning me often, inviting me as a guest for an all expense paid weekend visit to their campus), instructs my parents to send directly to BU's financial aid office a rough draft — not the official PCS form we send to the Princeton agency — a practice copy.

After BU receives that and performs their calculations, the coach telephones again to happily inform us that it has been determined that our family qualifies for financial aid for the full amount of the tuition cost. If I agree to play football at BU.

At the same time, Penn (University of Pennsylvania, an Ivy League school in Philadelphia, across the Delaware River from our home in Riverton, New Jersey) is also aggressively recruiting me. We are so close as to make their job easy. I am interested in writing and am told by a guidance counselor at high school that a good way to make a career of writing is through journalism. That is why Penn arranges for an alumnus named Frank Dolson to take me to a fine steak dinner at a ritzy restaurant and then to a professional ice hockey game in the city. Frank Dolson at the time was head sports writer for *The Philadelphia Inquirer*, a large and respected newspaper.

Not long after that, Harry Gamble, head coach at Penn, and an assistant coach named Anderson visit our home one evening to meet and talk with my mother and father and encourage them to send me to Penn. My father pleads that Penn is too expensive. He wants Penn to give me an athletic scholarship, but Coach Gamble explains that, unfortunately, Penn does not award scholarships for sports. He tells us that the financial aid office at the university has reviewed our PCS and has determined that we do not qualify for financial assistance.

At that point my father blurts out that Bucknell has offered full tuition as financial aid. Coaches Gamble and Anderson returned to Penn and contacted whatever regulatory agency oversees matters connected with university sports. Harry Gamble blew the whistle, cried “FOUL” ! Shortly after that we receive a phone call from Bucknell’s coach telling us that unfortunately BU has to retract its offer of financial assistance. He adds, though, that if I agree to attend Bucknell the university will honor its promise of money beginning with my second year.

I decide, at my father’s urging, to attend The College of William and Mary because they come up with a legitimate offer of money. As soon as I get there (football training camp begins in mid August, a few weeks before regular students arrive), all first year players are asked to sign a loyalty oath pledging to uphold the United States constitution. Why ? It’s all so strange to me ; it seems like paranoia. It is 1972. The war in Vietnam continues. Along with the pledge, coaches advise us to enlist in ROTC (Reserve Officers Training Corps, pronounced by students as “rot-see”). This is just two years after an ROTC building at a state university in Ohio was burnt down by students and activists (such as members of SDS — Students for Democratic Society) from outside the university.

ROTC has not yet been driven off the W&M campus, maybe because two years ago in Ohio the National Guard had been called out and four students had been shot dead (9 others injured).

Unexpectedly being asked to take an oath and advised to sign up for military training is confusing for 18-year-old me. What does any of this have to do with football ? I don’t get it. I am a bit naive, have no political leanings right or left. Still, it doesn’t feel right to be asked to sign papers pledging this or that and to sign up for military training. It is a shock.

I choose not to sign and not to enroll in ROTC. Later they maybe penalized me for my decision. It’s hard to say, and it depends on one’s interpretation of events. Nothing of course can be proved. It’s all in a thick mist, but one thing is certain : football at W&M is no longer football ; it’s politics and money.

The whole push for players to join ROTC is because, in the university’s eyes, we are financial investments. How much money will our play bring to university coffers ? There is a war on and there is a system for conscripting young men for the battlefield. Until recently students in universities have

been exempt from military conscription, but that system has been changed ; now a lottery is being used to determine who gets drafted into the army.

The College of William and Mary (probably other schools as well) devised a way to keep its players (= investments) out of the military draft. They do this by having us join the ROTC program on campus. If we are in ROTC, we are exempt from conscription. The army cannot, while we are enrolled in ROTC, take us off the football field and send us to Vietnam. I'm not saying it's illegal what the college did. They have a rather famous law school there. Neither is W&M the only place where a legal system is manipulated for the benefit of a particular group.

While some American males our age are in Vietnam getting their arms or legs blown off, crippled physically and maybe psychologically for life, getting blown to bits or blowing Vietnamese to smithereens, destroying entire villages, poisoning the natural environment for future generations, we are exempt because we can play football, so that people in America have diversion.

At that moment it is clear to me that these coaches do not really care about us as individuals. They are acting as agents for the institution. I decide not to join ROTC and not to sign their stupid pledge. The pledge is a surreal legalistic way of having us demonstrate that our intent is to behave as unconcerned dumb football players, that it is not our purpose to bring down the United States government along with all its connected institutions including places of higher learning. It means we're not commie red radical rebels.

It is too much for me, too much about fear. College life and I do not get off to a good start. These are difficult times. W&M is supposed to be a "good" university and is respected by many. Thomas Jefferson was there. George Washington was there. Many other early on big wigs. Thanks to the football coaches and to the whole paranoiac power system their behavior links back to, the true religion they worship, my initial impression is that a university is a fraud. Years later, from my life learning, I realize that the whole frantic scene is a madness about maintaining a certain — in this case capitalist — way of life.

I sensed back then — but could not articulate it — that there must be something wrong with a way of life if it has to resort to devious, unscrupulous, and at times ruthless ways to uphold it. (Because

there is big money and power for some in that way of life.) Then again, many might shrug and respond that these are minor examples of the everyday run of the mill corruption that is the way society works in America.

Starting out on my own in the world is a huge disappointment. Not only in athletics, but in scholastics my experience in college is not to my liking. Before arriving I have a dream. It is not about becoming this or that in an occupational world. It is a dream of being able to freely explore, to freely go where my curiosity takes me, to follow my spirit.

I cannot accuse William and Mary of bait and switch or any misrepresentation because the catalog they send me clearly outlines a course of study that has nothing to do with my dream of university life. Still, my imagination persists. The college does its best to kill my dream with required courses in predetermined fields of study. A college destroys many young people's dreams, young people who, in a state of suspended disbelief maybe, imagine college as a place at last to be able to learn what they want to learn. They imagine that college study can be about themselves. (It is about them but only about them in a dimension that is deemed useful by the socioeconomic powers that be, which means how to be put into servitude by the capitalist state, or a communist state for that matter. Work, work, work.)

Granted, there is a possibility of taking some elective courses, but those courses are more of a side show in a main event that is the predetermined course of study. It is possible that our dissatisfaction can be addressed by adding a totally free study program to balance the university-planned program, but doing that is too much to ask, maybe, too potentially revolutionary (= the true purpose of education being to change things for the better for all — for humans, and, in the sense that we might stop destroying ecosystems, for non-humans as well), for an atavistic and already paranoid administration and board. It's true too that for most it's not a do-what-you-want-to-do world, which is what education might set out to change if it wants to be truly education and not just indoctrination.

Being able to study freely. Where has that ever been possible? When? "Freely," here, does not have to mean that scholastic rigor is abandoned. It does not have to mean Timothy Leary and experimentation with LSD or using, with Castaneda, peyote with Don Juan. It doesn't have to mean delving into the paranormal or into mysticism or Daoist magic. Neither does free study preclude learning

about something by doing it. Experiencing it.

Liberating a university simply means that a university can be anything we imagine it to be. “Imagine” can mean anything. To me, the division of experience into rational and irrational arises from our human imagination. It is an imagined difference. Looking around at earth and sky, at flowers and moon, I don’t see any rationality or irrationality.

The thing is that liberatory pursuits are more often than not viewed as a threat to the throne of reason, which often is cosmetic for the throne of power. Are investigations into so-called fringe areas intended as threats or are they only perceived as threat because a scholastic institution, along with the particular socioeconomic way of life a school serves, which itself in its inhumanity and destruction does not seem all that reasonable, profits by labeling them as opposition — not as complementarity ?

Like a horror movie bogeyman, the college kills our dreams, devastates our curiosity. Starting out on my own in the world is a huge disappointment. For me, though, it is a private distress, disaffection, disillusion. I do not seek out others who may have similar feelings. I do not seek counseling. I do not join a protest group. I am a bit of a lone wolf. Cynicism is a popular attitude on campus.

Starting out is a worse experience for some. Some it devastates, destroys. Suicides or drug overdose or mental institutions. The violence Americans prove capable of in Vietnam is violence born of culture. It is not necessary for our survival, not instinctual. We don’t know it but we are in a struggle to survive our own society, our own minds. The supposed dangers of the tooth and claw natural world are replaced by a destructive world born of our own minds.

Still others, most others it seems, ones who look at the world only as a place in which to prove themselves successful, do not seem to mind. The more chances for success the more happily they wallow. They paste their lives all over with symbols of success. They don’t even know where their lives went.

I quit the football team before one year is over. Eventually I quit the entire university.

Unable to quit the adult world entirely, what happens ? Do I, with alcohol and other substances, try to numb myself to it ?

Maybe in our heads viewing a lake is more attractively peaceful than a pond view for those who plan to be dead.

This is a place to be dead in. I work here. That's closer than most get with their periodic visits. Situated right smack off a highway (route 130 in Cinnaminson, New Jersey), this memorial park is in a spot heavy with exhaust fumes and incessant noise from metal traffic. Not a great place for a breather. Night and day, vehicles slave a monotony, droning north and south.

Heading towards the cemetery you pass a squalor of commercial ventures ; dumpy cheap motels, Seven-Eleven, half-deserted shopping plazas, greasy smelling fast food franchises, gasoline stands, junk filled drug stores. Supply lines for our lives.

Then you drive through an entrance to this memorial park ; all of a sudden everything seems different. At first glance. In marble is Christ giving his sermon on the mount. A view spreads out eastward to take in a grass and tree expanse pocked with dark patches that are graves. These are not tombstone graves but ones with bronze plaques as markers that lie flat with the lay of the land.

Flowers are set on some of these. Pull in off the highway with all it's noise ; all of a sudden there's a quiet reverence. For loved ones under grass.

Nowhere are you permitted to see anything connected with death as it is. There is nothing that decays. Everything that rots is removed. Flowers visitors leave are taken away once signs of wilting appear. Nothing defiles loving memory.

It's a fictitious environment. Artificial. Fabricated. Staged. It is a deathless scene presided over and sanctified by statues of a savior of souls and figures of winged angels. The park is obviously Christian. If you go to Disneyland Mickey and Donald move around to set the mood. Here you see

Jesus and angels watching over. It's comforting.

Lakeview Memorial Park. There is no body of water much larger than a pond.

In real estate, property is worth more if it can be said to have a view of an ocean, a bay, a river, or a lake. Even if water can be seen only through a toilet window it's listed as "partial ocean view." They could have named the park Bleak Highway View, or Sky View, but these appellations, though not contrary to fact, do not readily translate into dollar value.

My job is to try to sell chunks of this scene to those who are not ready to make such plans and who are often uncomfortable with the topic of dying. It is my job to try to convince them that they need to prepare for death. Then get them to buy what it is I am selling. I do not present it as if their choice is to buy someplace somewhere or be tossed out with garbage in a landfill site.

No. I give them the sales pitch I learned. The circular sales pitch that always comes back not to death that dreadful topic but to closing a deal, to signing a paper, to writing a check. My job is to offer people an opportunity to take a reasonable, logical, approach to their death, but mostly they don't want to accept the inevitable. To ignore it as long as possible is what most choose to do. Some people just aren't planners, they don't plan for anything. I know where they're coming from.

My title is estate counselor, which is a fancy name for a cemetery plot salesperson. It's like calling yourself a sanitation engineer instead of a trash collector. A graveyard becomes cemetery, memorial park, mall of everlasting remembrance.

There is a one-week training period which enables me to refer to myself in the world as an estate counselor. There is a looseleaf booklet we are given which is a self-contained, step by step sales approach complete with laminated full-page color pictures we are to show "clients" as we go on with our sales pitch counseling.

At the end there is inevitably Lakeview, the photo of the Jesus statue standing at the park's entrance. We present it as if it's the only logical choice a person can make. As with the life insurance business there is an implication that anyone who truly cares must make the intelligent choice and be

prepared. We strive to let people think of themselves as intelligent in order to suck them in.

Other than that, it's probably much like the real estate business. We work from things called leads. These are postcards which have come back from mass canvassing. A potential customer (client) is any card that comes back. The cards are sorted according to a degree of interest reflected in the addressee's response to questions on the card : mild, very interested, contact me at once, dying to hear all about it.

There are three of us. Upon finishing the training session we are given cold, worn out leads. These leads are people who once returned the postcard sent them. Having returned Lakeview's card, they are contacted and contacted and contacted again but never buy. Maybe Lakeview should throw those leads away, but that is not the point. The company pays us on commission. Even if we do not sell, telephone soliciting these people over and over keeps Lakeview's name out there just as a T.V. commercial or other advertisement does. The company plays the odds that someone in a family eventually will die and wants the name in the heads of the grieving to be Lakeview. Having us telephone cold leads is, for the company, free advertising since they don't have to pay us for it.

Meanwhile with everyone on our sales force dialing up people in each surrounding township every working day year round and getting paid nothing to do this, the company has a slick system going.

Besides us newcomers, there are two senior estate counselors, Virginia and Susan. There is the sales manager Eli. And there is Mr. Cole, the director of the whole shebang. He seems really old to soon-to-be-twenty-one me.

Fat jowled and plenty of wrinkles, neither his age nor his substantial weight prevents him from shackling up with Virginia every Friday afternoon at the Super 130 Motel. We hear about it soon enough after we are out of the training period and are rookie counselors.

Virginia is nearing early old age. She's a redhead who some might have found attractive when she was younger or even now maybe. Both she and Susan have been through divorces, more than one for each.

Virginia and Susan get all the good leads, the hot leads. As does Eli because he is sales manager and automatically gives himself good leads. I don't know how Susan gets strong leads. Eli tells us it is because she closes a lot of sales, and she is able to do this because she has big boobs. Is he joking? I don't know. Cole is banging Virginia which is why she gets good leads. Is any of this true? Probably anyone who can afford to stay around long enough will someday be in line for the golden leads, the hot leads. Both women are collecting alimony, so they have at least something to live on.

Malone, Mendez and I get all the dead end leads. Mendez is recently retired from a career in the military. He has a check coming in every month from the army. He is not going to starve if he does not sell big time. Malone and I are about the same age, we live with our parents. Malone has spent time at a community college but does not catch fire there.

I could have continued on at college, graduated, and moved into a decent job, but to me it is a waste of time. To me it is a private disillusionment that is not the cynicism shared by many college students. What is the point of any of it: to graduate into America society and play adult? But here I am anyway, and it's likely I'm worse off than if I'd stayed on at school.

After one semester away, my father's good friend Robert "Shorty" Wallace, persuades me to return to and finish college. He even writes a check for my first semester tuition. I go back to my old school William and Mary, but soon stop attending classes. I don't even bother. I register, go to classes the first week; buy the textbooks, but that is it. Instead of attending lectures I go to the library and read. Just stroll down aisles, pick a book off a shelf. Whatever attracts me at the moment. How to prepare wild game for eating. Marshall McLuhan on hot and cold media. Playboy interviews. Timothy Leary. I take a book to a nearby desk and read until lunch or dinner. That's how my days go, my last semester there. My grades are all failing, which is why I'm on academic probation.

Americans are being told their country is in an economic recession and that the recession has to do

with what is called an oil shock. It seems likely, to me, we are being lied to or not told the entire story.

It might be said that I am in depression. My personal situation, it seems, is connected with various things going on in the world, or going wrong in the world. All within a few years' span. There is a shared sense that recent years of various counter culture movements have climaxed and that forces of social repression are regaining strength. My suspicion is that the government has artificially induced (is lying about) an economic recession knowing that conservatism will accompany bad times. Students and people in general, they anticipate, will attend to getting or keeping jobs and will dabble less in trying to make a better world, behavior which the government chooses to call rebellion. Nixon, though elected with a secret plan for peace, secretly bombs Laos and Cambodia in his deranged pursuit of a white whale. It's as if the ship of state is being sucked under in a whirlpool of its own lies, as if this is what Melville meant in *Moby Dick*. I'm on board. The Watergate scandal broke then. Lies. The Vietnam War — more lies — is making bad karma for everyone.

In a more personal dimension there is rejection, and there is my disgust about having to enter an adult world. In most adult faces I see people who are really messed up, out of whack, their lives feeding on non-vital things. Nor do I sense anything in an adult world about which to maintain a positive mental attitude. *As a salesman you have to sell yourself*, my father told me. I can't have a positive mental attitude about selling graves and do not have a positive mental attitude about selling myself.

It's three years since I entered college, times are worse than when I started. I am in a slump ; that much I can sense. I cannot articulate all the permeations and permutations of the scene. There is a feeling that something is wrong, something is missing in my life.

With my father down in his little basement office he built for himself, I make up excuses for my lack of ambition, for my poor performance at school, and for accumulated parking fines I have purposely neglected to pay. Suddenly in tears it comes out that I still love a high school sweetheart.

Is it a sly attempt to escape from being interrogated or is it a truth that's been suppressed coming to light all on its own ? A despair in me is looking to love for salvation.

Well, isn't there something you can do about it, dad wants to know. But she's already married.

At the time I'm not thinking of anything in my life as being moved by love. In high school there was dating, there was "going steady," but nothing, for me at least, pointed beyond that dimension. One girl seems to have touched me more deeply than others.

If I go to church maybe I will hear about God's love in our lives but I stay away from church. My conscious life, life as I am aware of it, is moved by others : doing what parents want me to do, not doing what they want me to do, doing what others expect me to do, what society expects, or not. Then rebelling against it all. What do I want to do ? Do I even want to do anything ?

In college I live a lie. My heart is not in it. I start off trying to play football there when I really don't care much about football once I get away from home. I try to play student though I don't have much feel for what is being lectured. I have what to me seems a natural interest in certain things. I am curious in certain ways. Not in others.

Living without heart and not knowing it. A heart can be shut away somewhere, somehow. Where does it go ? Where do our lives go ?

Are my tears love's ? It is a shock, a sudden glimpse of how vital heart is once you see you've lost it.

I am living at home and looking in the Burlington County, South Jersey, and Philadelphia newspapers for job listings. Everyday I go out, drive to different businesses, fill out applications, try to get an interview. Many if not all the personnel men — they are all men — tell me I should return to college and finish my education.

One bit in a newspaper is for Lakeview Memorial Park. I go out to be interviewed. It isn't too demanding. *What in particular about myself do I think qualifies me for a position as estate counselor ?* Well, I was a theater major for one semester at school. What am I supposed to say ? *I am qualified because I am a pathetic nothing of a human being with no desire to do anything. So do I get the job ?*

The Lakeview job just sort of died out. One afternoon I am “on duty,” which means it is me who must attend to and conduct business with any “at needs,” who are people who need a grave right away. It is my first experience. There is no training for this because we need no sales pitch. If someone shows up they are surely wanting a grave. Someone has died. Still, at the beginning of my time on duty, Susan quietly informs me that if someone comes in looking for one plot for the deceased we should try to sell them a family plot. She adds that we get higher commission for at needs.

There is no guidance in how to speak or what tone of voice to take or what to say or how to go about conducting business or how to handle situations when everyone around me is in tears broken up or in shock. Do they just assume it will be solemn ? There is no counseling for the counselor.

A group does come in that day. A family. A child, an eighteen year old son, died last night in an auto crash on this highway not far from here. I go tensely into a spacious, luxurious parlor to greet them. I tell them how sorry I am to hear what happened.

I am supposed to eventually escort them into a sales office where business is conducted. The mother is still in tears, sobbing. She has to be supported by someone next to her, a man. We stand longer in the parlor, people concerned with the mother. Longer and longer. People glance at me. I interpret their looks to mean that it’s up to me to get things going. Uptight, it comes as an electric current that I should say something along those lines, I don’t know what, something probably to calm the mother. Try to calm her, quiet her, then go conduct business. “Mam, you’re going to have to stop crying now.” I meant that she’s going to have to pull herself together if we are to get on with things.

One of the men goes into the office and asks that I be relieved. (That is what I am told later.) Susan comes in. She takes over, conducts the business.

It seems to me that I am a failure here at this adult job. With that comes the implication that I am a failure as a person too, as a human being. Do I believe that ? Maybe because of being in a sense perpetually disoriented I don’t have much belief in how the world measures behavior. I am not really

trying to succeed, nor am I even aware that I'm supposed to try. Is this experience a test of life? Why can't I say the right words that will offend no one and let the sale go smoothly? Is there something wrong with me?

My heart flees their grief. I cannot make pretend, and, with this family who just lost someone dear, I cannot bring myself to do business.

It's not their fault. They don't make the system that sends an inexperienced and untutored twenty year old to tend to a mother who can hardly stand being here. Looking at me, two years older than her dead son, her pangs get worse.

I am a confused young man. Who do I think I am? I don't want to think I'm anyone, but I feel the world forcing something, someone, on me. An adult identity. Then I will be able to answer the question "Who are you?" Right now I don't know who or where I am in the world. I'm disoriented. Am I supposed to be someone different from the me I have always been or is that me supposed to evolve into something more urbane, polished, and, to me, repulsive?

I sometimes screw up. The world creates pressure and fear in me and through pressure and fear I am not able to get a clear sense of what I'm about. A friend, less than a year before, took his own life. He is buried here. In a matter of weeks I too, boozed up, will crash into a pole just off this highway. I work at a cemetery.

A few nights each week I sit on a barstool with chums around my age. We come from the same town, attended the same schools. There are other locals of different generations. Some old timers. It is Mitchell's Tavern. We suck down beers, sometimes shots and beers.

There is a sports game on the bar's T.V. or there is music from a jukebox. Irv the bartender at times, especially Friday and Saturday nights, sings along to Frank Sinatra as the night goes on.

Relaxation and togetherness is at times the mood, which we have to pay for but which the next morn-

ing is gone leaving me in alone again. Then, facing out towards a bleak highway, there is a sales office. There are rubber banded stacks of cold leads to call. There are voices on telephones that do not want to talk with grave marketing me. I don't blame them ; I don't want to talk with them either.

What sort of life is this for anyone ? What sort of fulfillment is there supposed to be ? Where are all the people ? The ones from my high school days ? Life doesn't seem so wonderful to me. What else is there ? In my mind is a kaleidoscope of images ; things to do when you are lost. Going somewhere, getting out. Or Jobs, careers. The Peace Corps. Something fulfilling that doesn't require me to memorize things I don't want to memorize, something that let's me just be me.

There is no one I can put myself in care of. It's a human care I cannot give myself. Is that what others are for ?

Are booze and the bar scene what life is about ? Is going to college what life is about ?

This mother seeing in me her dead son : what will help ?

I am here with "at needs." This is what death can do. If there is such a thing as success death makes failures of us all. Not just me. This is sorrow life can be. You can't know anything and look at it fully. It has to be felt, just felt. You feel it expand as if the whole sky is a gaping wound.

Getting on with our lives grows over our eyes.

((Maybe here I should add something uplifting. After a couple years I return to college. By that time I could apply as a fully independent adult, which meant that I qualified to receive full financial aid. I didn't have to pay anything. Somehow, from somewhere, and for some reason, motivation to learn came my way and I became a serious student. Though honors never motivate me my name appears regularly on the Dean's List. The words "cum laude" and "departmental honors" appear on my

diploma. I continue on to graduate school and finish a master's degree. But : so what? I still suffer, I still die.)))

Part Two : Speak Truth to Power

Out of college on academic probation, my mother gets me a job at the dairy retailer she works for. Mom is office manager there, and, as she gets older, is promoted to administrative assistant to the president. It is a small, family run outfit that buys milk from a bottling plant, has it put in cartons with their own label, and sends their sales force out to establish accounts such as with the city of Philadelphia and what was called a Get Set Program. This, if I remember correctly, is a preschool or day care thing the city sponsors.

At this dairy enterprise is an office, in which my mother works, and there is "the dock," which is where delivery trucks are loaded from a refrigerated warehouse. Milk, juice, and other things are packed in plastic crates that fit into each other and stand as stacks. With a hand-truck we cart a day's order for these into our trucks, which are insulated and cool so the milk will not spoil. It is January and into February I am there.

A fellow named Joe teaches me his route. He is the one I ride with for a week or so until I get the hang of it. He is a Philadelphia man, and knows this city well. I am not. Across the Delaware River in Jersey is my home ; only a few places in Philly are familiar to me.

He is a quiet Italian-American guy. Dark complexion. Forty-something I'd say. Easy to get along with. Nice enough. He knows my mother. Everyone does. She treats people nicely which is why maybe the people there treat me nicely.

Charles is head of it all. He and his two brothers are owners and Charles is president. He is a retired naval commander. The other brothers are Ted and John. Charles's son Walter runs things out on the dock.

He hollers and swears a lot, has a bowlegged stride, talks like he is an officer at a military boot camp. He looks still boyish in his blonde hair and fleshy pasty white face with glossy blue gray eyes

behind tinted gold frame glasses. Walter in fact has been in the military, in the U.S. Marines as an officer, and has served in Vietnam, and has, he tells me, many notches on his weapon, which he says he is ashamed to say, but which he thinks he needs to say to me anyway, whether to impress me or to bring fear into me or what, I don't know.

Walter seems to have a lot of noise going on inside him. Which you can tell by his sound on the job. He comes from a family that is not hurting for money. The military takes care of its officers. While at the same time it seems that his upbringing may have been very strict, like home schooled military ; in all aspects groomed for the service.

His wife, he for some reason tells me, thinks he is cold. I wonder to myself why she would marry a cold man. His telling me these things surprises me. Is he in one of those groups sessions I hear about, is he seeing a counselor who tells him he has to get these issues out in the open, is this his idea of what we civilians talk about, is he trying to make ours a one big happy family workplace with himself and his troubles at its center, or is he falling apart and needing someone to speak to and I seem little brotherly enough or sensitive enough to reach out to. I dunno. Or is it a combination of the above and maybe more going on with Walter ?

From the higher ups he no doubt feels pressure, from his father and uncles. From the father especially. What does it feel like to have someone who is boss and who is father come chew you out in front of those who are working under you ?

Often he speaks of his men, those who served under him in Nam. Has he lost many ? Are their lost lives still clinging to him, freezing him, stiffening him little by little ? He tells me once how his wife wants to leave him. Take their two kids. There is a soap opera accent to these confidences. Life isn't any easier for Walter, not even with all of his military tough upbringing. A strange brew he is.

Supposedly cold and unlovable Walter comes up with odd, twisted turns of phrase like when he becomes angry at one of the office women about something. He's on the phone with one and I am in his prefab office on the dock waiting to receive instructions. Betty made some error (the drivers continually complain about mistakes made by women in the office and women in the office always blame things on the drivers) and when Walter slams down the receiver he shouts, maybe because I am there

to hear or so that someone maybe might care to understand him in all his frustration : “*THAT GOD-DAMNED PLASTIC-TITTED BROAD !*” Wow ! I’ve never heard such an expression as “plastic-titted broad.” This is a different world for sure. Work world. Walter world. An unfamiliar scene there on the murky predawn docks.

Another driver is Malcomb, a young dark-skinned African-American, small framed, a bit older than me. Friendly. He wears a woolen Africa-colored skull cap, keeps his beard trimmed short. Malcomb knows the ropes, works hard, has kids to support, talks the talk and walks the walk. Uncomfortable in these surroundings maybe.

Horace is a veteran. He drives the big tractor trailer. He is a tall slender African-American with a light complexion. There is a sensitive look to him ; he seems still a child, playful. Like me in a way.

Even in the early hours our work begins, Horace is “up” : wide eyed, talkative. Up on something is sure but it may have been something legal like coffee or No-Doze. I don’t know. Maybe just a morning man. Very very morning. Swigging coffee every free moment. Along with a bun his enormous Seven-Eleven styrofoam cup of coffee is a daily presence on a shelf off to the side of the loading platform. Any momentary break in the action he’s hurriedly there. He too is a hard worker. It is a job that requires much hustle loading our trucks until we get out on the road.

My mentor Joe is a laid back guy. Good sort to guide me. No pressure. Quiet. He’s obviously flustered by the morning pace, more at home with driving and the delivery aspect of the work. He still lives with his mother. Is he unmarried, or maybe divorced ? I forget. Plump, built like a butterball turkey. Balding. Smokes. Joe stops along the route at a bar for a beer, at another for a sandwich at break. He is from South Philly, home of the Stallone character Rocky Balboa. It seems to me Joe is into something. Secretive. Is he running numbers ? He may have some other operation going on. Or is it that he is barely holding himself together ?

Maybe Joe doesn’t want to say much to me because my mother works in the office ; she probably has

something to do with his paycheck. Maybe he is hesitant to say anything because he knows I've been in college and he is ashamed at his lack of education. It may be that he is just quiet to the point of making me suspicious. Strange, it's as if he clams up, like I am some foreign entity he is unaccustomed to, or afraid of.

I'm not much a talker either. Timid at first.

It is a relaxed route. We deliver milk and juice, and it has to be there for the kids' lunch or morning snack. There is no frantic rush ; there is no insane taskmaster in an office scolding us for having the truck out longer than necessary, warning us not to burn excess gasoline. There is no mechanic inspecting our truck after each run reporting to an office that we are too hard on the vehicle. Our route is not the whole city but one section of Philly called the Northeast.

Our trucks are not new trucks. The vehicle inspection stickers on their windshields are fake, obtained through the black market. Those trucks have never been inspected and are kept in such a condition that they will run, period. The way this knowledge comes to me almost takes my life and could have taken someone else's. Philadelphia is not what can be called a hilly town but there are a few and my route takes me down one of them. It is a long gentle slope I turn onto, a street lined with parked cars both sides, a residential avenue lined with tan brick homes, trees in a line along the curbs. My stop is a few blocks down after crossing a major intersection but what comes to me as I begin braking on my approach to that intersection is that there are no longer any brakes. Brakes are gone. They are fine until now. The truck is rolling along ; trying to shift into a lower gear the transmission grinds, will not allow it.

No cars are ahead of me. Trying to think of what to do quickly coming to an intersection where a traffic signal is just now turned red. How to avoid a crash, injury to myself or others. How to not wreck the truck. Nothing comes to me. No wonderful Hollywood action movie stunt enters my mind. Sorry to say. No sudden flash of genius or just plain common sense. There is nothing in me to mediate the situation, the rush upon collision.

Time up, horn blaring, truck and terrified me roll into crossing traffic honking horns screeching brakes. Right through ! Only to come to a stop once through the intersection crashing into a car

double parked along the street. The slope levels off at the intersection ; the truck's speed decreases. There is no injury to me. The car double parked is empty. It will need body work. I am shaken. No one is hurt.

It is Kenny who tells me after this accident that the trucks are never really inspected. Kenny is a good looking tall well-built middle-aged hair greying middle-eastern looking dark-skinned Jew who does quite a few things at the company. He is in sales. He is back and forth with the customers, he helps loading things, supervises that aspect of the work. Kenny has a lot on the ball and I think he likes this work where he does a variety of things as opposed to the same routine day after day. He can drive the tractor trailer if necessary, though I'm not sure he has a license to do so. I drive it once myself, down to a point south of Philadelphia. Paoli maybe. Just one lesson from Horace and now here's this many ton rig I'm driving. Neither do I have a license to drive a tractor trailer.

There is the time driving the regular delivery truck I break some traffic law such as turning without a signal. It is early on. Newly out on the route on my own, I am looking at map while driving and it suddenly occurs to me that here is the street I need to turn onto. Without signaling I make the turn and there happens to be a police officer around. He pulls me over and get out of his blue and white Philly squad car. Pinky white skin. Red hair springs out from around the rim of his cap. An officer of Irish decent. His name is on his uniform. He talks the Philly talk. He levels at me some angry-sounding authoritative gobbledygook which I can make only partial sense of, something about "*on MY beat !*" and ending : "*AND I DON'T CARE IF YOU DO DRIVE TRUCKS FOR A LIVING !!!*" He lets me off with a warning.

Walter tells me once that I can try sales too. Try to drum up business here and there. I try snack shops over in Jersey in my home town or places I can deliver small goods to on my way back from the city. I can take ice cream. Put a little dry ice in a bag. Cottage cheese. Things like that. Waiting for a sub at a delicatessen in a nearby town I ask the manager if he'd like to try any of our products.

A few days later Walter calls me into his dingy little office and asks me what I'm doing. It is about my pitching that deli. They buy from Maccio, he informs me. That means nothing to me. Who is Maccio? Maccio has Mafia connections. We don't try to introduce our products into a store that sells Maccio's stuff. That's not good business practice.

I can be rubbed out by the mob for trying to sell cottage cheese?! Wholly ravioli! This job is exciting in a strange and indelicate way. The deli owner must have informed someone at Maccio that Franklin is trying to "muscle in" or "move in" on their territory. Maccio calls Franklin. Will "Mr. Big" put out a contract on me? Will someone come "take me for a ride"? Will I get to meet Jimmy Hoffa?

I am getting nimble with the early morning loading dock palaver. The action jolts, everyone is in a frenzy getting milk on trucks. Often what is said is said in hurried passing, moving quickly in and out of trucks and freezers and coolers. There is job-connected communication about how such and such a children's center has a holiday today so no delivery there, but around this communication, through it, all sorts of expletives are threaded. As if to distance it. Because just naked information doesn't work for these men. Naked details bring too close the drudgery. We move like bats out of hell, all this fuss over cartons of milk.

What the men on the docks do is a sort of whistle while you work routine. Only, instead of whistling, the F word in various ways is worked into every mouthful uttered. Say the F word while you work.

Yet, when one of the women from the office comes out on the dock for some errand, the language is suddenly purified, a throwback to chivalry maybe. Or if someone doesn't see her he is reprimanded: "*Hey watch your mouth!*" But as soon as she leaves they say something crudely suggestive about her: "*Yeah I'd like to give her my order form!*" To which a reply comes such as "*What's she want with your poor little order when she's takin' the boss's big dictation!*"

Dock talk — however humorously irreverent it seems to me at the time — does not express us as we

are. It is work talk, talk of men who have been alive long enough to get a taste of life, who know its flavor is not that of their childhood dreams.

The vehicle inspection sticker on the truck I drive is fake, obtained on the black market because evidently the truck is too old or run down to pass official inspection. Buying fake documents is cheaper than buying all new vehicles, cheaper than keeping trucks in good running condition, cheaper than inspection. I later learn this is basic business. Bottom line.

I know from my father, who is a vice president at a candy company, also in Philly, that they give all the inspectors who come around cases of candy. Just greasing the wheel. Regular business sense. It makes me wonder if any business operates fully according to the law.

Bottom line. Dollars and cents. Sanitation? Hygiene? Yes and no. Here and there. Some try more than others. Sweat dripped into the peanut brittle. Read Orwell on Paris restaurants. I wonder if even the law operates according to itself.

That incident is my first brush with sort of official, adult, work-world unlawfulness; driving an unlawfully unsafe vehicle that could get me fined. Not to mention injuring or killing someone. Besides getting the whole operation shut down at least temporarily and having all of us without work and unable to support ourselves or our families. It is a practice that is fairly accepted. People look the other way. Philadelphia as a city — in its officialdom — as is told to me years later — is known for corruption. I have no idea the stickers are fake.

My milk truck is repaired and I am back on the road.

I work; I am at work on time and am there each day I am supposed to be there. Polite with customers. Driving around the city isn't all that demanding. I grow fond of it. Cruising around. Early morning it's poetic like in a Wordsworth sonnet:

This city now doth, like a garment, wear

The beauty of the morning ; silent, bare,
Ships, towers, domes, theaters, and temples lie
Open unto the fields, and to the sky . . .

I am driving a milk truck in all that heart — congested and coldly feverish though it is when awake and smelling of metals, grease and auto exhaust. Solitary now. Dust settled. Along with a sun's rising driving song. It is a mutilated calm, a roughly wrought silence with a hiss. Warehouses run down, smokestacks puffed out exhausted, factories still, crashed, stripped, burnt out abandoned cars, weather worn steel gray raised tanks of something, Acme supermarket out of business boarded up, motionless streets plastic bags blow down, a doorless refrigerator rusting in a vacant lot, an industrial yard its chemical liquids running here and there in pipes running silent now along this interstate running right along these trashed local streets a world abandoned to sleep the red brick city housing, working family houses or out of work houses worked out row after row, smack against one another block after block geometrically exploding dimensions a brain wave of brick regularity stretching off towards a horizon.

Things so quelled, so dead so quietly coming to light it is good to feel so a good job I give myself to.

Sun up over this junk yard is such a desolate soul. Peaceful music. Things give off warmth as rust, exude a holeyness [*sic*] decomposing to elementary nothingness : song of our own disappearance.

It feels for a moment spent, even poetic, being with sun rays on rust, dust, corrosion, crumbling and decay. Slowly moving through it all, mutely registering things.

Industrial cemetery. For which reason it is easy to be not moved to making sonnets. I don't weep for all the waste. No pity.

There are those across the river in Jersey who try to hide a sneer hearing what I am "doing." Kids I've grown up with, elementary school, high school : see me as truck driver milk man. They are in college still. Truck driving is what you do when you don't go to college, or go and don't finish like

me ; that is the gist. It could be that there is more life to delivering milk than there is in any job they'll ever know.

I'm raised hearing — not from my folks really (ditch digger was the occupation my father always used to designate the lowliest work a man could do) — things about driving a truck that are mostly negative. Like it isn't something chic to do. It is something then to feel ashamed of. To feel shame when I tell those middle class peers I drive a milk truck. To feel inferior, low. Because that is the thinking I pick up around me. Social junk thoughts I am picking up. Social junk city. Socialization.

One day a big change occurs at Franklin. Walter no longer runs the docks. Now Ted, Walter's uncle, is in charge. Maybe Walter botched something badly. I don't know. He is in hot water a lot. The father is hard to please.

The Marine moves to another job with another company. Ted is hell bent to make things more profitable. So he cuts drivers and combines routes. It is a simple matter of seniority, Ted tells me. Last hired, it is me who has to be first fired. Even though Helen in the office is my mother. Even though I am, he says, a good worker.

I go home. I weep. My grandmother is there. She lives with us. She calls and tells my mother. Mom comes home that evening with solace. She hears in the office what happened. To me things seem so unfair. Unreasonable.

The world is not necessarily a fair place. I can't report that fairness ever moves the way I am treated in the work world in America. A church of god teaches me about unfairness while I'm still a child. In grade school, 6th grade maybe, I play on a church-sponsored basketball team. It is at the time called the Epworth Methodist Church and it is on Maple Avenue in Palmyra New Jersey. There is a basketball court — not regulation size — in the church basement. The Coach is Mr. Hutton. His son John who is my age is on the team too. Our team isn't good at all. Not much talent. John is an okay guard. He hustles and all that. Fine attitude. His dad is coach. I am tall

for my age and am okay to have around under the boards for rebounding and short shots. Most of the others are not all that helpful on the court.

As our season comes towards its close two players are to be selected for a church league all star game. The coach's boy John is one obvious candidate. I am the other. Everyone seems to think so. One night after practice the coach's selections are announced. One of them is not me but Mark Sitzler. He is a kid whose father is on the church board of directors or whatever it is called. His dad is sort of a small potatoes big shot in our small town. He is in a profession that keeps him local ; he has an office in town, has a shingle out. Realty or insurance or accountant. A member of the Lion's Club or Rotary.

His boy isn't very useful out on the court. He can dribble a little bit is all. Mark thinks that being able to dribble a ball between his legs while bringing it up court — when no opponent is guarding him — is a feat that makes him our star player, even though opponents steal the ball away from him at will. Mark is stiff, not fluid. Anyway we are just kids.

Coach Hutton takes me aside while the others head for the locker room. He tells me he would have picked me but for the fact that Sitzler's father is on the church board and my own folks no longer attend church. So he has no choice, he tells me, but to choose the Sitzler boy, even though, he says, Sitzler is not as good a player. Because it's a church team. He hopes I will understand. I do. I understand about being dumped on in the house of god.

I do not like it. My parents being in church is never a condition for my being a member of the team. I am tall, the team is hard up. Now all of a sudden it has everything to do with being an all star. Coach has to do what he thinks is the political thing even though in his heart he knows it is not the thing to do. (Christ's message is one of conscience, is it not ?) He has to watch out for his own standing within the church, which has little to do with living as Jesus teaches.

Coach caves in ; god bless him. He cares more about church political abstraction than he does about this living being looking him in the eye, a being who will find it more difficult as a result to look people in the eye thereafter.

Henry David Thoreau tells us that humans are the most unstable of all living things. Is he right? I think he has pinned it down. It may be because the symbols we invent, through which we live our lives, do not root us as deeply in life — in survival — as does instinct. How are such unstable beings as us to make a religion? Maybe we try to make a religion to give us stability. Something to grasp, some way to confront the pure and ongoing revelation of livingdying. It's understandable that we might want to try.

It occurs to me, too, that although we are being told in church that with our hearts we are supposed to serve divinity, coach is serving the powers that be in the world. How can he or anyone live such a split? Won't it make us schizophrenic?

It hurts a bit, not being one of the chosen, but not many in my scene give a hoot about church league basketball, no one talks about it at school, few come to watch, a parent or two maybe. It is a disappointment to suffer privately. My dad tries to help; he tells me I'm on HIS all-star team, which is intended to comfort me. Dad's words, though they make me feel a bit better, don't change the unfairness I feel.

“Speak truth to power!”, one might say, expresses my attitude after this experience. Although I do not articulate it as such at the time. That expression originated, according to my reading, with a Christian group called The Friends.

My stint at Franklin Dairies lasts only a couple months. My mother works for that company until her retirement. Loyal, diligent, all that. On time, steady. Keeps the books straight; once she even discovers an embezzler in their office and saves the company a great deal of money not to mention exposing the bad guy.

Working in a city, in oxygen-depleted health hazard surroundings: miscreant city. Working in The City of Brotherly Love, in a brilliant social dream, in Scamelot [*sic*].

To thank my mother, in the end when she retires the Franklin gang did not honor their promise of a

pension ! On the other hand Charles the president at times does things for mom and others who work there that are at least helpful if not acts of philanthropic or charitable magnanimity. After all he gave me a (brief) job. He and mom are friendly, he and his wife and my mom and dad. He recently passed away.

It isn't Charles himself who wants to take from my mother that which she is promised. It may have been Charles who promises it without his brothers' consent. What backstabbing is afoot among those brothers in that city I can't say. I'm not sure anyone else among the staff there has a pension. Which is why I guess she doesn't sue Franklin Dairy.

Things happen which pain me, strain me. Things happen to us all. It's the scene I go into as myself, inexperienced as I am, it is a scene which makes me worldly, a scene I believe in as the way things are until I grow beyond belief.

Part Three : One for the Road

Baby portraits. Children's portraits. Our job is to profit from this cultural inclination to put our children on display. In the U.S. we like to do that — I don't mean profit but yes that too — like to have images of ourselves — our families — around us in our homes or work environment. Our loved ones. Is it because cameras and photos can be had at not much cost? Is social class involved? Do the Winthrops decorate their homes with photos of themselves? More likely they have portraits painted.

This is a job I apply for from a newspaper ad. "*Looking for talented sales personnel for a growing photographic studio . . .*" The studio is an apartment in an apartment complex. It might be called a condo now. Ground floor. All over the surrounding area outside is grass turf with a few young trees. Inside is wall board, off-white interior. French Provincial furniture. Matching mirror. Carpet of embossed patterns. This is their home. Harry and Marion. *Marion's Portraits* is the name of the franchise.

They are an aging childless couple. Nice people. Marion I don't get to know well since she isn't out with us on the road. She remains at the "studio"; answers the phone, does the paperwork.

The photos are taken in customers' homes. A fellow named Bob is our photographer and he goes to each home with his equipment, back drop screen and all, takes the shots, develops them and returns to each customer with photos displayed in various sizes and shapes: wallet size, wall size, desk size, heart shaped, oval.

This is the catch. We, the door to door salesmen, take orders, make the initial connection, get a cash or check deposit for five dollars. We take an order for ONE 5 by 11 photo. We receive a deposit, set up a date and time for the shoot. Then on the day scheduled Bob goes there, takes a good number of shots, and when the one that was originally contracted for is developed either Bob or Harry returns with it set in a decorative card backing, but they have all of these other shots in all different sizes and shapes that are so flattering and lovable that the customer only naturally wants to order more. That's where the real money comes in, because Marion's doesn't make anything at all from the one photo sale.

Harry is short, stocky on a small scale; square faced. His gray hair is neatly trimmed, combed, but front strands fall down from behind the ear and hang over one eye. He blows them back or pushes them up with a free hand. He talks in a bit of a whine out of one side of his mouth. Smokes non-stop even though he has a heart condition. Wears short sleeve casual shirts. Banlon. It is summer. Casual slacks. Black wing tip shoes. No tie. Collar open.

Mornings I drive out to their place in Marlton, New Jersey. There are at times one or two other young men with us; they are out of high school or in community college doing this as a summer job. Once or twice Bob the photographer is with us. We'd set out all of us in Harry's Chevy Impala.

Bob is several years older. Married. A Vietnam War vet. Dark, thick hair longish, thick mustache. Large frame. Fleshy. Pot belly from beers. Frank joins us about a month after I go aboard. A frizzy hippy haired dumpy looking kid just out of high school attending a community college. I don't like him. He's obnoxious. He had a public speaking class at community college and

because of that thinks he knows more than me about selling door to door and makes those days I break him in unbearable. Because he tells me after we finish one house what I am doing wrong. Afterwards, and sometimes during my pitch. Frank is ridiculous : when someone answers their door he stands there like he is delivering a prepared speech. Like there is no person standing right there in front of him.

It is a relief when Frank gets another job or Harry fires him for some reason. He is no longer with us, which is fine with me. Another guy named Michael joins our “sales force.” He steals things along the way. Like if he knocks on a door and no one is home, maybe inside a front porch he sees a pair of Adidas that look like a fit for him so he walks off with them and throws them in the car’s back seat. This he does not with Harry but when we are out on our own. He throws them in my car and it is a hard time persuading him to return them.

My first day on the job we are busted. There are three of us. We are cruising around thinking of good neighborhoods to “hit.” We discover we are driving right by Fort Dix, the army base. It’s as if fate brings us there. No soliciting signs are posted all over as we stop at a guard house. A soldier asks our business. Harry lies. I forget what he tells the guard but it isn’t that we are intending to solicit.

Bob shows me the work. We go around together. He pitches a few places. Shows me how to fill out the forms, how to write a receipt for the deposit and leave a carbon copy of it with the customer. How to negotiate for dates and times so our photographer will have a day’s shots all in one area.

Then he lets me pitch a few homes. We are going along very pleased with ourselves, getting many orders. Many mothers seem eager to have photos done. We are gleeful. Bob explains that it is because other franchises such as Fuji Studio are not on the base soliciting. Fuji is our biggest competitor. Bob teaches me how to criticize and belittle Fuji photos even though I’ve never knowingly seen one. Too glossy. This and that. Fuji is no good. They don’t give you a good deal, etc.

We are making a killing. Raking it in. A couple hours we are going fine. Life is good, beauti-

ful. This is a good job, I think. Our take already — we keep the deposits, they are our commission — is a hundred dollars. Not bad at all for one day and it is still morning I am thinking on my way out of one home multiplying one hundred dollars by three-hundred-and-sixty-five until I see two big brawny MPs waiting for us. Harry is nowhere to be seen. He is off somewhere checking out other neighborhoods. Which is his usual routine. It's not that he abandoned us. He leaves us off somewhere and comes back at a designated time. That's the way we work.

Bob and I are taken away in an MP sedan. They take us to the base station. A desk sergeant, thick and muscular too, questions us. I think the fact that Bob is a vet gives us some pull with the sergeant. They don't throw us in the brig. It is all very military, cut and dried. According to the book. What time did we arrive. How many photos had we scheduled. He explains to us the base policy that photographers are permitted on base to photograph personnel and their families but that we are not allowed to come on base to take orders for such photo shoots. We don't have to return the money we'd collected and the sessions can go ahead as scheduled but if we ever are caught on base again soliciting we cannot be released with just a warning.

Off we go. They escort us off base in that MP sedan. We wait along a civilian road for Harry's return.

Harry explains to us once that people have no idea what they really want. He tells us that people are in consumer land that is like one big television program collage going on in their heads. He uses the words "people" and "they" as if we are somehow outside that world because we ourselves are right here and now trying to sell something to "them."

Salesmen. You can sell people, Harry claims, a bucket of poop. They buy it because we make them think they want it ; we present it so they think it's something they need. It's all in the presentation, how it's packaged. And it helps a great deal if Jones thinks he needs it too. And Smith, and a lot of other people in the same social economic class. That's the big poop market. According to Harry.

So, wow, far out, I think. Harry is into some ultimate way gone cosmic truth. And he smokes only

cigarettes.

Certainly, hopefully, the photos mean something more than poop to those who look at the pictures, who see the young ones in them as family, who, gazing, feel something unsayable come to life as they look.

The photo speaks to something that is alive inside ; a look of tenderness comes over faces as they look, a gentleness as they dote. People can be wonderful when they are not afraid. Portraits of their children let them feel good inside.

If they'll buy poop, we ought to be able to sell them a few priceless images. Which is Harry's point. That seems logical to me at the time. Maybe. It is hard to tell. I haven't worked things out much. The problem is photos cost money and money shuts people down when they see their tight budget being strained. So a potential customer says something like "*come back when I have money. . .*" It is mostly to the lower class neighborhoods we go. People here have little. Their surroundings might be called dumpy. Deep down these homemakers would like pictures of their kids. They say so, most of them. But money threatens them. Having to pay. Can they afford it?

Some are afraid there might be some gimmick. They might get cheated. Their husbands might get angry. They know they'll want more than that one photo. They'll want one to send some to aunt Martha and some to Grandma Weaver and some to sis down in Georgia. They'll want some to have at home to put in round holes bored in a long curving varnished wood knickknack that junior made in wood shop class, something that hangs on a wall over a spice rack. Little Jamie's face beaming out from a magnet holding a shopping list tight to a refrigerator door.

It is nice to see the kids all scrubbed and sparkling. Big smiles, corny at times. Innocent. Playful. Overflowingly alive. Will a photo keep them in that blissful dimension, lift them from the smelly diaper world the whining tantrum child world mom has to yell at and scold and nag every day? "*Wash those hands before coming to this table mister!*" "*Didn't I tell you to clean that up!*" "*How many times do I have to tell you!*" The driving her crazy child world. The worried

sick world. All that is transformed now into this budding life set in twinkling eyes looking out from within a portrait.

Where does that sweetness go ?

Bob tells me it is no easy business working little ones into a picture perfect state of childhood, into an image of potential and plenitude, into an essential affirmation of life. It's hard to get them to look like a blessing, get them glowingly divine.

He has a bagful of gimmicks : lollipops, toys, noisemakers, puppets. Sometimes the little ones cry. You can't shoot a child whining. Or they want to be held by mama or they won't sit still. Or there's a spat between siblings. Mommy has to promise them cookies and candy. "*Sit still and mommy will take you to Dairy Queen.*"

Though too there are children here and there he photographs who seem to understand. Getting their picture taken is something elevating. It somehow makes them important. Like being king or queen in a kiddie play. They see it has some value. Future politicians.

Is it a generic undertaking ? The business is selling portraits of children — not necessarily individuals. I'm reading Emerson. My readings are in my head as are other things as I go about my work. I am thinking about what an individual is. The word "individual" : does it mean, for many of these people I see every day, idiosyncrasies, crankiness, orneriness, eccentricities, and craziness others who live with them are to learn to put up with or even eventually in some way maybe savor ? Certain twists of character. Peculiarity. Odd, off-beat responses to being alive, but is this something vital to be shared, something that will contribute to the spiritual-emotional well-being of a community ? I wonder if this is what Emerson means.

It's likely that, for these people I'm soliciting, "individual" does not mean being footman to divine infatus. There are various dimensions to the word. At depth are each of us unique, unlike any other ?

I never get to know anyone well enough to say.

It is for most an existence that blisters, rubs in painful ways. Pemphigoid.

These people aren't looking for a work of art in a photo.

Do those we solicit have any interest in art even if it is their own kids ? Would it be wise to mention the word art to them or would that word get in the moneymaking way ? Would they become suspicious that some high culture sophistication is involved, that this is something they will not "understand ?" Will they think it's not for "people like us ?" Though there might be "somethin' purty" hanging on a wall, some beach scene like you might see in a hotel room or a rented condo.

Do they choose what they do because they don't have to look at it ? They listen to music they don't have to attend to, watch movies they don't need to think about. There are various dimensions to art appreciation too.

They have difficult lives overwhelmed with paying back loans, keeping or looking for jobs, paying doctor bills, having check ups believing they are fighting off sickness and death. These make it difficult to keep your mind in art, on life. Distractions make up the content of their day to day lives, making it difficult to live those lives or to be at all as we most deeply are in our natures : the mystery we are to ourselves. A spiritually charged mystery. Unless we make an effort to attain an original sense of all these undertakings. Make art of distractions they become no longer distractions. Transcend, says Emerson. That doesn't make living less difficult though, does it ? Fuller maybe. Deeper.

If you tell someone hey your life is art they shrug, they look around, think the monotony the boredom the frustration the narrowness the confinement the laundry the diapers the exhaustion the loneliness. Sigh. It could be the detail of a novel. Like if this is art, who cares ? Sitting in front of a t.v. each night, falling asleep in a chair ; snoring. Talking about nearly the same things day after day. What's new is in the newspaper (because "it is difficult to get the news from poems"). Same old same old routine day in day out is all it is, they say.

★★★★★

Usually it's a woman at home daytime. A homemaker/mom. Sometimes a child answers. Once in a while a man's at home, men who work night shifts and these are their sleeping hours we disturb. Grizzly sounds some make finding they've been wakened for door to door sales. Some men come bluster at me. I am frightened they might be holding a gun or an axe. From behind a closed door one bellows "*I'm gonna kick yer ass, ya little shit!*" Has he mistaken me for someone else? Or is he this nasty to all callers?

Some are sleeping even though they are awake. Something that goes to sleep in them because there is no one to listen. They don't listen to themselves so have nothing to say or because they have nothing to say. Inarticulate. Is this where the children we are go? Into a mechanical hum, into a stale face. Too much standing at an assembly line, mind numbed.

They buy into becoming lost to themselves. They don't know any better.

Too much sitting behind a desk. Processing data people. Rules whirring in heads. Things in the world whirling in us. Disoriented, more at a loss than any nonhuman animal can possibly be unless confined in a zoo or removed from its native territory. Eyes gazing out from life unlived [*sic*].

Confronting the particulars of how a spirit is crushed, how vitality is destroyed, in this house at this door standing in front of me. Many don't take kindly to being disturbed and I can't say I blame them.

Starting in with my pitch, fear in my throat. Confronting "life." Though we share a nationality and language, this burly belligerent hairy chested sleeveless T-shirted bundle is a total unknown to me, as am I to him. It's as if we are so different, so distant. Trying to make out is what brings me to him and is what keeps us apart, a world between us. What in the world will let us come together?

Some of the women I come across; this one her hair's up in curlers covered with a net. Still in her night gown, smells of sleep, booze, tobacco. Cigarette hanging out of her mouth, ashes falling as she moves her lips to speak, voice raspy. Or a blonde bikini young one is in her backyard sunbathing,

glistening oil all over her tan body answering her door. Toenails painted. One señorita in Millville, young Puerto Rican girl invites me in. In her hair's a flower. Sixteen she might be, living alone in this bungalow at town's edge. Sweet looking girl though she may be a teenage prostitute for all I know. Posters of Bruce Lee are all over the walls inside her two room bungalow. Sweet of her to ask me in.

Some would offer me coffee. We chat. One young mother and her elder sister who is over for a visit. Probably bored stiff out here in a low cost development. No town, no community to speak of. A few young trees planted here and there. Lawns to care for. Just this development plopped where it is — a 7-11 a mile down a new asphalt road — at the edge of the Pine Barrens, passing which, headed east, takes you to the Jersey shore.

Back in the car we share our experiences, this smorgasbord sensuality, this facial kaleidoscope. This confusion in me this collage of inexperience experienced. What forms it all so variously, so strangely, so singularly ?

Out in the summer heat in a tie and a short sleeved cotton shirt and slacks. With a handkerchief wipe sweat from my brow. My shirt's underarms, chest, and back are dappled with perspiration by ten a.m. Sweat soaks through by afternoon, chills dry once back in Harry's air-conditioned Impala. The tie I loosen, eventually remove.

Harry treats us to soda or ice cream as an afternoon break. He finds some root beer stand or a hamburger joint with a wooden picnic table under a large umbrella. We'd beat the heat in the shade, or try ; shoot the breeze. Speculate, speculate : how to get rich, how to beat the system, all sorts of harebrained schemes, things we all know will never happen.

Most summer afternoons in the sun we are drooping ; our ambition to sell evaporates. Potential customers are wilting in the heat as well, or shut inside, skin gray, dry and puffy, air-conditioners hanging out windows heaving, dripping. They come to the door as if from an inner sanctum of secluded cool, out of a place of soft tones. Subdued funeral parlor tones. A television jingle faint from another room. *THE PRICE IS RIGHT!*

A late middle-aged woman opens her door, squints into the glare, is discomposed (decomposed) by a sudden wave of heat. A coolness escapes from her home ; for me it's like standing in front of a refrigerator with its door open. She's well preserved.

We go on. Through afternoon cooling showers at times. Torrential downpour days Harry calls in the morning, tells me to stay home. There are days when it's too hot to bother. We go out for an hour or so in the morning ; even early it's as if there is no air to breathe. No breeze at all. Just stillness. Unrelenting ruthless heat you can't stay still in. Though you don't want to move either. You have to try something. Finally stillness is all. As the day goes on it seems like a fevered madness trying to do anything : to work, to move, to talk. Imagine being transported to another planet where there is very little atmosphere. Only it is here in South Jersey. It seems pointless to go on living. We are reduced to breathing ; it is hard to do that.

The heat this afternoon — and I am so close anyway — plus out on my own (Harry'd given me my own territory) — leads me to the sea. Keep right on going, cross a caseway to Long Beach Island. Little kids are playing on a beach where an ocean breeze has things a bit cooler. Watching them play, their small bodies' bouncy movements, leaping, running, they seem so brimming with potential, so freely and happily playing, as if they are emanations of hope. New life. Embodiments of love.

Late afternoon from up on grassy dunes look out at a sea at the horizon, noting its deep hue, its jewel-like richness. Cross the hot sand beach, take off shoes, roll up pant legs, step into the surf. Feet sink into wet sand. Ooze. Waves break, make a frothy rush, flatten-spread-fizz, are drawn back. Cupping seawater in my hands it looks so clear : no color at all.

社会学はなぜ応用されないのか

—— 公共政策における社会学利用の一研究（部分訳後半）

ロバート・スコット，アーノルド・ショア共著 久慈利武訳

第6章 政策に志向する社会学に向けて

はじめに

社会学を政策にもっと関連をもち役立つものにするのに、何ができるか¹。「何ができるか」の問いに答える一つの方法は、社会学の知識と方法を社会政策に応用しようとする彼らの努力の結果に作用する要因を社会学者がどんなコントロールをしてきているか？と尋ねることである。その答えは明白である。われわれはいくらかはコントロールしてきているが、そんなに多くはないであろう。明らかに、ある事柄は変更したり影響を与えたりする社会学の能力を超えるものである。一部の異常な政治的發展の場合を除いて、政府が社会学との関係を支配し続けることは確かである。異常な危機を除いて、政治的実行可能性は、あいかわらず変革の提案を評価するために政策作成集団が用いる基本的基準のママであろうし、変革は革命的なものでなく漸進的（累積的）なものであろう。

社会学者が影響力を行使できる他のものが存在する。例えば、我々は自分が研究するものと、どのように研究するかをコントロールできる。ある程度、我々はリサーチの問いとそれらを研究する手続きを采配することができる。研究のための変数を注意深く選択することによって、我々は生じる知識の形態を確定せざるを得ない。我々が何を研究し、我々の研究をどのように実施するかは、公的な事柄への社会学の寄与を向上させるための梃子である。

与件に当たる要因の大半は、社会学者が一部でもコントロールしている要因に比べて、公共政策に社会学を適用する試みの帰結に決定的な影響力を持つ因子であることを何よりも

¹ この問いかけは社会学がレリバントであることが望ましいということを前提としているので、論争を呼ぶ見解である。「社会学の唯一の正しい仕事は、社会を理解するために社会と制度を研究することである。もし結果として生じた知識が有益であることが判明すれば、それは好ましいことであるが、社会学の進歩は公的な事柄へのインパクトによって測定されるべきでない」という根強い意見がある。我々はここでこの見解に戦いを挑もうとは思っていない。実は、それに関しては我々が同意する点が多くあるからである。その代わりに我々はこの争点を意図的に避ける問いを尋ねる。つまり「つかの間だけ人が社会学が政策に関連することを望んでいると仮定すれば、社会学をもっと政策に関連あるものにするために何ができるか」。この問いに答える際に、読者は次の点を肝に銘じておくべきである。「公的な事柄に関わることは犠牲（代価）を伴う。これが科学としての社会学の将来にとってもつ含意を最初に考察することなく政策のレリバンスにコミットする余裕のある学問は皆無である。」

言っておきたい。これは公的な事柄における社会学の役割に対し二つの含意を持つ。

- (1) 状況の最善のものであっても、社会政策に寄与する社会学の能力を向上させることは社会学者には周知的にしか可能でないであろう。
- (2) 政治や政治家が我々の社会の政策決定を支配している限り、公的な事柄における社会学の役割は不可避免的に慎ましいものとなろう。

社会学者と政治家がパートナーであるとするウォードやラズウェル型の大規模なスキームは、政治の現実にもっと注意を払い、学問的、ユートピア的な関心に少し距離を置く、強がりやを和らげたアプローチのために放棄されねばならない。

第 1 節 社会政策のための社会学についての若干の思索

政策リサーチを行う社会学者がかくも頻繁に兆候を見落とす一つの理由は、彼らが十分なリサーチをしていないためでなく、彼らがどんな種類の研究が求められているかを理解していないためである。我々が今持っているものよりも社会政策にもっとレリバントな応用社会学を開発するための鍵は、研究すべきなのはどんな種類の問いかということである。これはとりもなおさず、視点を社会学から切り離して社会政策に向かうことを意味する。

政策の世界への社会学の侵入がいかに学問的関心事で始まり、学問的関心事で終わっているかをこれまで見てきた。社会学者は念頭にある学問的争点で応用リサーチを構想し、専門の同僚である聴き手を満足させるつもりで自分の研究を行っている。彼らが尋ねる問い、彼らが問いを尋ねる形式、結果が解釈される仕方、結果が公表されるフォーラム（討議の場）はこの営みを反映している。このアプローチでは、政策と政策の関心事は単なる残余変数である。政策により大きな関連性を持たせるのに要求されるのは、冒頭から政策関心事により多くのウェイトを置き、政策作成者を報告書の主たる読み手とする視点と手続きであるといいたい。この最終章の我々のねらいは、このシフトが何を引き起こすかを一般的なタームで説明し、我々が提案する政策に関連した社会学的研究を例示することにある。

要求される視点のシフトは、政府が政府と社会学の関係を支配している事実の承認から始まる。具体的には、これが意味するものは、政府が社会学者の支援を求めることなしに政策を作成することができる、ということである。すなわち、政治家がコントロールしているので、社会学者にささやかな顧慮すら払うことなく社会政策を立て実施する任務に従事することが可能なのである。疑いもなくこの主張には真理がある。基底にある事実、政府の政策作成集団は政策過程に我々を参加させたり、我々が言うことに耳を傾けねばならない公式の義務はない、ことである。それなのに、我々社会学者は我々の保有する専門的知識技能が使われなければ政府は仕事をうまくこなせないと思いこんでいる (C. Weiss 1976 : 221)。

少なくとも公式には、我々がどれだけ多くの知識を持っていたとしても、我々のリサーチ技法がどんなに洗練されたとしても、先の指摘は常に当てはまるであろう。ただ、政府の役人が我々を無視することを一層難しくするためのステップをとることが社会学者に可能である。実は、政策に志向した社会学の現実的な目標は、政策の審議で考慮されねばならないデータ、知識、情報を産出することである。定義によりこれらは政治的に到達されねばならないので、行方を直接に決定することはできない。これは、政策作成集団の基本的関心事である問いと問題点を研究し、政策関心事を念頭に置いて研究を行うことによってなされる。つまり、生じた知識がその一部でも役だってくれと、かすかな望みをつなぎながら、学問的視点から政策リサーチにアプローチし続ける代わりに、むしろ政策に直接関連する知識を生み出すのにどんな種類の研究が要求されるかを発見するために、政策過程が実際にどのように稼働しているかから研究し始めねばならない。このように述べると、時間と視点は我々の側にあるので、展望は明るい。基礎的で反復的な問題に我々の焦点をおき、政府の外部の位置から問いを組み立てながら、我々は政策的争点の核心にあるものを判別するのに有利な政治的行為者の小手先の定式化を避けながら、政治的関心事に一層広く深い見地をとることができる。

我々が目下述べていること、我々の分析が示唆するものは、社会学者が社会政策作成に従事する人の仕事に最大に関連のある問題を同定するために、政策過程にもっと注意を払わねばならないということである。これらを念頭に置きながら、社会学者はそれらを研究するために彼らの方法と手続きを利用することができ、政策作成者に、それらに関する新しい洞察と知識を与えることができる。その結果は社会政策関心事にとって中心的な事柄に関する知識群であろう。もちろん政策作成者は我々を無視し続けるかも知れないが、彼らは我々の知識が関わっている争点、問題は無視することはできない。というのは、これらは彼らの仕事にとって内在的なものだからである。社会学者が政策への関心を持って、研究すべき問題を選び、アクションをにらんだ、世界のなかで役立つ情報を提供するならば、政策作成者が我々のいうことを無視することはますます困難になるであろう。

政策に関連した社会学研究とはどんなものか。その質問は目下の時点では答えることが難しい。というのは、研究対象になる争点と問題を同定することは、政策がどのように形成されるかに関する認識に左右されるからである。これは現時点では我々の手に入らないものである (J. Weiss 1976 : 234, Uliassi 1976 : 241)。政策を明示的に扱っている社会科学の文献はないし、政策過程を描写している場合にも、実際のそれではなく、社会学者が願望するか想像するそれを述べているに過ぎないので、この点では社会科学文献は概して助けにならない。このトピックに有意的にアプローチするために、我々はすべてのリサーチ片の持つ二

つの主要な側面（分析カテゴリー、手続き）に取り組み、ついで図式的になるが、我々が提案する研究と従来型の研究との間の違いを披瀝する。本章の編成は次の問の順ようになる。

- A. 政策変更とは何か、政策審議において頻発するカテゴリーに何があるか。
- B. 上記の頻発するカテゴリーを我々の研究で有用に使用するためには、リサーチ手続きにどんな変革が必要か。
- C. 政策志向研究と従来型の研究の間で変数と結論の選択にどんな主要な違いがあるか。

A 政策審議で頻繁に使われるカテゴリー

政策に志向した研究実行のための基本的指針を探る際に、政策作成者が政策を審議する際に彼らが何を審議するかを論じている文献をどこにも見いだせなかった。もちろん、最後の瞬間に偶然か突発の事柄によって政策がどのように変更されたかの事例を満載した多くの事例研究は知っているが、政策問題の研究のために、当初から我々が自ら編集するのを助ける持続的なカテゴリーというものは生憎なことに見あたらない。我々の目標は広く適用される分析カテゴリーを引き出すことにあるので、この問題を広く取り上げることにした。最も簡単な進め方は、かなり大量のデータにパターンを識別しようと努めるので、カテゴリーが形をとれるように広いストロークで立法史を追跡することであった。我々は（我々の課題に無用な混乱を招く）一つのカテゴリーを除いて政策分野ごとに分類した。分配政策と規制政策²という二つの領域内からのトピックの選択は、我々が読んで楽しめるものに基準をおいた。分配政策の領域では、住宅と雇用政策の立法史を追跡し、規制政策の領域では、通信と労務関係政策の立法史を追跡した³。任務をこなしやすくするために、（一部はそれ以前のデータが混じることもあるが）1930年代以降の政策発議に絞ることにした。最後に、我々は一般的カテゴリーを引き出すことを望むので、個々の政策アクションに過度に詳細に立ち入らないようにした。にもかかわらず、一部は行論の都合で避けがたい必要な詳論をしたところもある。

A.1 政策変更の性質

われわれの研究から政府内の政策形成に関する次のような印象を得た。これらの中で特に目立つのは、政策は累積的に進化することである。これは Lindblom の指摘である（1968：26-27）。それは 1945 年～1969 年に起こった連邦政府による住宅政策の一連の資料によって

² 分配政策と規制政策の区分は Lowi によって述べられている（1964：689）。

³ 我々は、分類図式を避けたいので、二次的な議論を避け、プライマリーな資料 The Congressional Record, The Congressional Quarterly Almanac に直接向かった。

例証される。この期間に、議会によっていくつかの新しい住宅立法が制定された。1946年に戦後の経済政策と立案に関する上院委員会の下位委員会「住宅と都市再開発」は、戦後期の住宅問題の公聴会を持った。その最後の報告書で、私企業の優勢を維持したままで適切な住宅供給を達成するという国内住宅政策の目標が設定された。報告書には、国内のニーズに応えるためにどれだけのタイムスパンでどれだけの住宅ユニットが必要かの推計も含まれていた。それは、住宅ローン連邦部局、私企業へのFHAによる援助のような建設資金給付の様々なメカニズムを点検した。委員会はまた政府に低価格住宅の奨励と賃貸住宅に投資するインセンティブを与えることを助言した。それはスラムの一掃、都市再開発のような問題に特別の注目を狙ったものであった。下位委員会は議会に a national housing agency を創設することと、建設方法、住宅市場、住宅問題にとって基本的な他の事柄に関するリサーチに研究資金を与えることを促した。本来の上院の下位委員会報告書に、付録として上下院合同聴聞会議事録が収録された。(1947年に聴聞会が行われ、1948年にその報告書を発行した)住宅に関する合同委員会のこの報告書は、上院の下位委員会によって既にカバーされていた争点——低賃貸公共住宅への連邦政府の援助に関する事柄——のリストに追加された。

かくして1947年までは、住宅に関する全国政策のための包括的なプログラムが存在していた。だが1947年から1959年までの立法の制定 legislative enactment の歴史は、これらの聴聞会で提案された発議はこの12年間にわたって漸進的に制定されてきたことを物語っている。この期間に問題全般のなかの単一の要素だけを取り扱うような希釈された提案を含む個人法案が導入された。これらの中で最も包括的なものは、1949年の住宅法であった。それは、低所得世帯のための公共住宅と住宅への私的な投資の問題に取り組むものであった。1950年にスラムの一掃と都市再開発のための資金にお墨付きを与えるもう一つの法案が議会を通過した。1951年には、どれだけの数の住宅ユニットを建設し、個々のコミュニティのための住宅プロジェクトに関して意思決定をする際にどの基準を用いるかを明確化しようとする住宅法案が通過した。1953年と1954年に導入された法案は1947年の住宅法によって創設された多数の様々な住宅機関の管轄責任を明確にした。1956年と1957年に制定された法案は、これまでの法案がお墨付きを与えたスラムの一掃と都市再開発の指針を設定した。1959年の立法の制定は、私的領域に属すると彼が信じた領域に連邦政府が関与することを縮小するアイゼンハワー大統領の命令に応じて、住宅への連邦政府の関与の度合いを厳しく制限した。

この事例は漸進的、累積的、不連続的である立法制定のごく一般的なパターンを例証する。基本的姿勢が一度定義されると、大半の政策形成活動は一つのプログラムのなかの単一の要素についてだけ審議を重ね、洗練させ、再解釈する the gradualism 漸新主義を引き起こ

す⁴。ただし、包括的な立法プログラムは全く成立したことがないということではなく、少数だが例外はある。1965 年の経済的機会法、1933 年の the National Industrial Recovery Act がそれである。しかしながら、これらは例外であり、一般的なのは上述の the gradualism である。

政策に関連したリサーチに関与したいと思っている社会学者にとってこの事実の持つ意味は明白である。我々は、これまでの社会学者はすべての可能な世界の最良なものの中で、何が望ましく最適であるかを発見するために「ビッグな問い」から始める傾向があることと、これを通してするために現在を優先することをいかに改めねばならないか、をみてきた。政策的視点から見ると、少数の例外を除いて、このアプローチがいかに非現実的か。大抵の場合、可能で実行できる変更がささやかなものである。たいていの場合、起こりうる変更はささやかなものであろう。社会学者が変更を引き起こすため役割を果たすそうと思うなら、いくぶんつまらない、知的に興味を湧かない争点か問題（立法プログラムを実施するときに段階的に累積するやり方で立法府がこつこつと勉強するにつれて生じるそれ）から研究し始めねばならない。

A.2 政策に関連するカテゴリーの定義

そのような争点と質問の例にどんなものがあるか。先に我々は議会による政策制定（政策の法案化）を考察する際の我々の目的を説明しておいた。それは、政策作成集団がよく直面する争点（カテゴリー）の若干を同定するために、政府による政策作成活動に一層精通することであった。我々が集めてきた資料を検討した第一印象は、つながりがなく、衝動的で、まとまりがないプロセスであった。だがだんだんそれらに沈潜して行くにつれて、我々が研究した議会の政策活動のすべては、究極的にはプログラムが正しく作動できないうちに解決を要求しているように思われた少数の主要な政策争点をめぐるものであることに気づいたので、この印象は正しくないことがわかった。

争点自体は同定することが難しいものではない。争点は次のものが含まれる。

goal プログラムの目的は何か

coverage 恩恵を受けるのは誰か

financing プログラムはどのように、誰によって、どの支援水準で資金が与えられるか

administration そのプログラムの実行に責任を持つのは誰で、どのように実行されるのか

equity プログラムの恩恵を受けるものの中で、誰がどんな種類の利益を受けるか

⁴ まったく同じパターンは、住宅に関わる他の二つの政策発議の連続（1932-1939, 1961-1968）にも現れている。我々は福祉、デーケア、貧困に関する連邦立法にも同じパターンを見いだすことができる。

time frame そのプログラムが続くのはどれだけの期間か

もちろん、これらは今まで政策審議で登場した唯一の争点であるといっているのでは毛頭ない。もちろん、上記および他の政策領域に関するもっと網羅的なリサーチがなされるにつれて、リストに他のものが付け加わることも疑問の余地はない。我々が考察してきた政策領域では、上記の争点はいずれの事例にも登場し、登場するときには、議会がそれらを解決するために立法の指針を提供するまで、乗りつぶされる関心事となった。上記の問いに答えるための指針（ガイドライン）が存在しないと、プログラムはうまく機能しないかまったく機能しない、印象を持っている。かくして、もし the enabling legislation（権能を付与する立法）が上記の争点の一部に取り組みことに失敗すると、プログラムがもがき方向性を失うので、問題が持ち上がる。議会にこれらの未解決の事柄に指針を提供するように圧力がかかり、立法行為を生じる。ポリテックスが次第に進化させる傾向がある知識と相まって、この事実は、応用リサーチをする社会学者に、リサーチのためのトピックスと問いを選択する有用な手がかりを与える。

我々がこれをいえるのは次の根拠からである。政策が徐々に進化する事実の一つの含意は、きわめて例外なく、立法の大半の法が、プログラムが機能できる前に解決されねばならない争点のほんの一つ（あるいはせいぜい2、3）しか取り上げないことである。近代に制定されてきた住宅に関する立法の主要なものは、この点を例証している。

略

大半の立法の制定は、既存のプログラムの単一の側面の修正だけか、何らプログラムがないときには、政策形成にとって基本的な若干の争点だけに取り組み立法の制定を引き起こす。この観察は政策に関連するリサーチをしたいと望んでいる社会学者にとってどんな意義を有するか。この知識はその社会学者に、政策の審議でいずれ登場することになる争点をあらかじめ予想することを可能にする。プログラムが正しく稼働するのに解決されねばならないある争点がいずれ生じること、大半の立法の制定はいずれの時点でもそのうちの若干しか扱えないことを知るならば、社会学者は政策作成集団がいずれ直面することになる問いを予期することができる。これらをあらかじめ研究することによって、そしてそれらが必要なときに政策形成過程に融和する結果を生じる手続きを用いることによって、社会学者は彼らの関心事に直接関係する知識情報を政策作成集団に提供できるだろう。

例えば、新しい政策発議がプログラムの目標だけしか取り組まないことを知った社会学者は、議会その他の政策作成集団による後続の審議で、資金調達、プログラム管理、恩恵を受けるものの範囲、どんな種類の恩恵、プログラムの継続期間等の争点が解決されねばならないだろうと予想することができる。複数の争点がかれまでの立法で取り組まれてきているこ

とを知った社会学者は、立法府がどの争点がまだ解決されずに残しているかを知りうる。いずれのケースでも、社会学者は政策関心事に関連する結果を生じるために要求されるのはどんな種類の研究か、これらの争点が討議にかけられる前に実行に移す時期を知るという二重の利点を持つ。政府内の政策形成と結びついた上記の規則性は識別が難しくなく、任意の領域の立法制定のこれまでの歴史をほんの少し予備的に考察するだけで予想を立てることが可能である。

略

議会における政策形成過程の力学へのもう一つの洞察を我々の分析から得ることができる。基本的な政策争点が解決されないとプログラムが宙づりになる傾向がある事実に明らかのように、議会における政策形成過程は予想通りのコースを辿る。しかしこの要因は政策形成過程の予測可能性のほんの一端を説明するだけで、完全に理解するには他の要因も考慮されねばならない。

我々が論じてきた争点—— goals, coverage, equity, finance, administration, time frame —— は互いから隔離されては存在しない。その代わり、我々は、ある側面の変化が他の側面に波及する仕方では有限個の構成部分が存在するプロセスを政策形成が体现することを発見した。つまり、finance という争点は goals をめぐる問題と無関係ではない。administration という争点は coverage, equity に影響を与えることなしには解決し得ない。これは政策形成活動が一般的に辿るコースの理解に重要な含意を持っている。権能を付与する立法は典型的には政策にとって基本的な一つもしくは少数の争点だけを取り上げるという理由で、我々は当初の政策言明によって取り込まれずに放置されている他の争点が、取り込まれている争点にとられるアクションにそれ自体が影響を受けないと想定することはできないのである。つまり、例えばコストと financing に関する明示的な決定は goals, coverage, equity, administration, time frame に対して含意を持つ。

かくしてたとえ権能を付与する立法が、他の争点を無視して、我々が挙げた争点の一つか 2, 3 のものにだけ注目するとしても、これは、個々の争点についての当初の決定が権能を付与する立法が取り込まない他の争点に波及しないことを意味しない。波及するのである。これは多くの場合、社会政策の基礎的争点が不履行によって解決されることを意味する。議会ないし大統領が貧困のような問題を扱うために所与のタイプの行政機関の創設を提案することによって、同時に貧困を伴う他の争点が解決される仕方について気づかずに意思決定をしているのである。この事実は社会政策を形成する過程に関わっている人々によって気づかれることは珍しい。彼らの関心事は必然的に政治的なものであり、彼らは周りの政治環境の圧力に素早く反応して行動しなければならないので、彼らはしばしば、念頭に置いた一つの

争点のためにとられた決定が同時に彼らが気づかない争点に関する決定を伴う事実を理解ができないことを招く。これは、社会学者が社会政策形成に特別な貢献をしようとするもう一つの仕方に目を向けさせる。それは何かというと、争点のどれか一つに関わる決定を提案する社会政策にとって基礎的なすべての争点についての含意と影響を同定することである。そのような任務は、社会学者の概念のスキルと社会調査を実行する能力を必要とする。彼が解決するために政策が作られる争点の全範囲をひとたび理解すると、彼はアクションの個々のコースの含意と影響をあらかじめ同定し研究し始めることができる。

政策形成のシステム状の性質は公的事柄への社会学の貢献に関わるもう一つの含意を持っている。任意の争点に関して行われる決定はいつでも最終的なことはめったにない。かくして、政策過程の任意のあるセグメントの変化がシステム全体に波及するがゆえに、今日とられる任意の有意義なアクションはこれまで解決された争点に含意を持つことが帰結する。これは連邦政府のコミュニケーション政策を支配する立法の場合に顕著である。

ここでは、権能を付与する立法、1934年のコミュニケーション法は、我々がかなり直截に議論してきた政策争点の大半に取り組んだ。その法案は、回線とラジオによって州相互と海外との商業的コミュニケーションを規制しようとする the FCC（連邦通信委員会）の目標を定めたものであった。それは FCC の管轄を詳細に述べ、FCC が financing を一切持たない領域を指摘した。ここに、我々は社会政策にとって基本的な争点の大半を明確に把握しようとする政策発議の事例をみる。この分野の立法の後続の歴史の大半は、当初の立場の修正と拡張に関わっている。これに関して興味深いのは、立法が予想されたパターンを辿っている点である。始めに、管轄の問題が提起された。教育モニターによって放送されるラジオ番組に干渉することを不法となものとし、この法律が執行されることを監視する権限を FCC に付与する法律が通過した。別の法案が mail order insurance（郵便で注文した保険）を FCC の管轄下においた。3番目の法案は、飛行機会社と鉄道会社のラジオ回線を監督し監視する権限を FCC に与えた。これが達成されると、当初の立法の他の構成部分のすべてに変化が起り始めた。まず、新しい管轄権限を扱うのに a set of administrative corrections（管轄の修正）が要求された。今度はこれが financing に疑問を提起し、この問題に取り組む一連の法案を生じさせた。議会はコストの上昇に関心を向け、FCC にある分野の縮小、基礎的コスト全体を増加させることなく他の分野に component coverage を与えることを命じた。

政策形成を越えているところにある predictable dynamics は、部分的にシステムの一部の変化がシステム全体に波及し、システム全体に変化を強制する自己修正過程に由来する、という点がポイントである。この洞察は社会政策が徐々に変化するというアイデアに新しい意味を付加する。もちろん、社会政策がそうする一つの理由は政治的なものであるが、他の理由

はあるセグメントの変化が必然的に別のセグメントの変化に導くという事実と関係している。社会政策の進化の the gradual stepwise incremental dynamic の一部は単なるこの事実の反映に過ぎない。これが応用社会学者にとって持つ含意は、かなり直裁である。政策過程についてのこの洞察で武装して、応用社会学者は、所与の時点までの所与の領域の政策形成活動の過去の歴史に関する知識に基づいて、政策活動がどの方向に進みがちかを今や知ることができよう。それは、政策作成集団がいずれ取り組むことになる全範囲の争点を地図に描くことを可能にし、これらの問題に高度に有意味で有用な仕方で行き届く彼らに関連した質問を研究し始めることを可能にする。

実効的であるには、応用社会学は政策の関心事で始まり終わらねばならない。これは、社会学者が応用の仕事に対して抱いている視点の根本的なシフトを要求する。それは社会学者に政策を一プロセスとして研究し始めることを要求する。社会学者が政策がどのように活躍するのか知らないならば、それらについての知識を産出するためにリサーチすべき類の問いを知ることはできない。我々の議論は、議会のなかの社会政策についての我々の研究から開発したアイデアの一部とこれらが応用リサーチに対して持つ意義を提示するものである。これらのアイデアがどれだけ維持できる（耐えられる）かを言うことはできない。これは広範な政策領域に関するもっと入念な網羅的なリサーチを行って初めて確定しうるものである。このリサーチの結果が登場したので、我々は、自分たちが提示した例示はかなりの修正を被るのではないかと懸念するが、この事実は決して我々の基本的な見解の妥当性を浸食するものではないだろう。

B 調査研究の手続き

議会の政策形成活動は定例的で予測されるコースを辿る傾向があることを我々は発見した。この知識は政策を志す社会学者にひとつの利点を与える。というのは、権能を付与する立法が法律に大して知識を持たないことによって、また権能を付与する立法によって制限された手続きの枠のなかに目下の争点を位置づけることによって、以後の政策審議にかけられる問いを予測して、研究することができるからである。これらのカテゴリーが何かを知るならば、社会学者は主要な争点と問題を明確化するために、政策形成過程に実際に関与する人に相談することができる。これは我々がリサーチの営みの中で通常用いる手続きに付加された次元を意味する。

政策に志向したリサーチをするプロセスにとって基礎的なのは、政策関心事で始まって終わるコミットメントである。社会学者が政策過程に寄与したいという希望を持つ前に、彼は政策過程の自生的発達を研究しなければならない。われわれの関与する領域の大半は一連の

立法努力が既に存在する領域であるから、社会学者の最初の仕事は、社会問題に取り組む最近や過去の立法努力を研究することである。すなわち、特別の目的を持って文献レビューに着手することである。そのねらいは、社会科学の文献をレビューすることではなく、どの政策争点がこれまで取り込まれ、どれが無視されてきたかを確定するために、これまでの立法の制定史をレビューすることである。提案されている立法が、既存の政策を斬新なアプローチで置き換える大胆な新しい発議を提示するかどうか、これまでの立法がこの領域の政策にとって基本的なある争点に取り組んでこなかったという事実由来の問題をそれが解決する漸進的な努力であるかどうか、どんな問題がこれまで取り込まれずに残っているか。これがひとつたび着手されると、社会学者は研究のトピックを決定することができる。

決定は少なくとも次の二つの問いに取り組む必要がある。

- (1) この領域のすぐかそれに続く政策審議で登場しそうな争点の種類をすでに同定しているのであれば、社会学者は政策作成集団のメンバーである専門家に、これらの争点についての問いが生じそうな連続（シーケンス）と形態（フォーム）に関する彼らの見解を尋ねることができる。
- (2) 各争点に関して、社会学者は、政策作成者に、政治的、実際に実行可能とみなされる最も有望な政策オプションは何かを尋ねることができる。

その際次の二つの点を考慮する必要がある。

- ・政治的な争点は実際に実行可能なオプションの範囲を見分けることを含む。このオプションは政策空間という政治的に定義される領域に属する。
- ・社会学的な争点は、論争になっているこれまでのターゲットのインパクトを含む。どのオプションが過去のアクションの結果として既に手をつけられており、どのオプションがまだ手をつけられていないか。提案されているオプションは既に取り組みされている争点が解決されてきている仕方にどんな含意を持つのか。

争点に関して現実的なオプションが同定されたら、社会学者は政策上の問題に照射するのに何かを寄与できるかどうかを知ることができる。上記の問いは政策作成集団が審議を始めたら、結果が得られる期限内に答えることができるものであるのか。上記の問いは審議のなかでどれだけ重視されそうなのか。ここでもまた、適切な政策作成集団に相談ができるものでなければならない。社会学者は様々な問い、トピックに関するリサーチがどれだけ有用かを最もいえる立場にいる。

そのような問題が存在すると仮定すれば、社会学者は指針のために自分の学問に依拠することができる。研究対象の問いにかかわる既存の社会科学の文献が存在するかどうかを見つけるためにレビューに着手したいと望むだろう。文献リサーチの目的は社会学者が研究すべ

きはどんな問いかを見つけるためではない。というのは、助けを求めて社会科学文献に向かう以前に、問いは既に決定されているから。社会学の蓄積された知識の中に、彼が研究することを決めた政策問題に適用されうる経験的素材（情報，データ）ないし一般理論が存在するかどうかを識別することである。

社会学者が行ってきたリサーチの大半は学問的な関心によって導かれているので、既存の社会学文献が、政策問題の豊富な情報源であることに気づかない傾向がある。おそらく、社会学者は自分が提起した問いに答えるために自分自身で調査を行わねばならないことに気づくであろう。調査を設計し、変数を選択する際に、社会学者は自分の理論モデルが単純で堅固でなければならず、研究される変数が運用プログラムのコンテキストで鍛えられねばならず、知見が政策の発議を承認するのに十分にドラマチックなものでなければならぬことに気づくであろう。

文献がレビューされる順序を変更すること（最初でなく最後に）と、研究のために選ばれた変数の効用をテストすることに加え、社会学者は、政策作成者とのカジュアルな相互行為以上のものがリサーチの概念化の間ずっと有用であることに気づくであろう。これは、政策に志向した社会学者がかなり異なった二つの視点（実践に志向した政策作成者の視点と総合的で、省察的で、経験に志向した社会学者の視点）を統合しなければならないこと、を意味する。たとえば、社会学者がこの二つの視点に架橋するために上記のステップを踏み出したとしても、彼の問題の定式化が立法者、政策作成者、プログラム・ディレクターにそっぽを向かれる危険を覚悟しなければならない。もちろん、リサーチのために選ばれた概念化が政策作成者の日常言語とやや異なるし、ステートメントと再ステートメント、プレゼンテーションと討議の反復過程によって獲得されるニュアンスはリサーチの適合性を確保するのを助けるであろう。このアプローチは、社会学者が研究の最後に研究されている主題にコメントを求めるときに社会学者によって時折用いられるそれとは異なる。ここでは、問題のステートメントは冒頭から研究者と政策作成者との討議に持ち込まれる。社会学者は、もっと抽象的争点ないし理論群にもっと直接関連のある争点を研究するのではなく、彼が挑もうとしているアクション、今日の定式化にどれだけ密接であるかを確定する。

リサーチがいったん取りかかれると、社会学者は任意の政策作成集団に報告書を提出することができる。社会学者は自分が取り組んだ問題が審議集団が直面する政策上の問題に意味があることを縷々説明するであろう。彼らが今着手しようとしている仕事のなかで自分の結果がどんなに有用かを証明する労を払うだろう。しかし彼の影響力はここまでである。政策作成者が彼のいうことに耳を貸す保証は与えられていない。彼らは彼のいうことを無視するかも知れない。しかしながら、これらの指針が遵守されるならば、社会学者は自分が研究す

る問いが政策作成者が何ら選択できないが直面せざるを得ない争点を扱っているという確信と、得られた結果のいくつかは政策の審議への直接の採用にかけられだろうという確信を持つであろう。

C 政策に志向した研究と従来の研究の変数と結論の主要な違い

本章での我々の分析は短く一般的だが、応用の仕事に従事する社会学者が彼らの研究を政策関心事を念頭に置いて開始し終了しなければならないことがどんなことを意味するかを例証する。我々の考えは、もし我々が社会政策に関してもっと学習することに着手するなら、取り組まねばならないのはどんな種類の問いと争点かを知ることができるという点にある。政策リサーチを行う社会学者がかくも頻繁に印を見落とす理由のひとつは、彼らが充分なリサーチをしてきていないことではなく、適切な種類の研究を理解していないことにあることを我々は述べてきた。これは、我々が政策決定をそれ自身の権利で過程として研究し始め、それがどのように稼働しているか理解し始めるにつれて次第に明らかになる。これまで、学問的知識とリサーチ方法を政策問題に適用することに関心のあった社会学者は、学問的関心事が彼らが尋ねる問いを指図するのを許してきた。しかし社会学者が政策関心事が彼らのリサーチを指図するのを許すなら、彼らは別種の問いを尋ねるだろう。我々が推奨する政策アプローチと学問的アプローチを対比するために、3つのリサーチ・プロジェクトを簡単に述べるつもりである。それらは我々が単独か共同で参加したプロジェクトである。

C1 居住の研究

数年間 Shore (Junior author) はコンサルタントとして Oskar Newman's Institute for Community Design と関わった。この経験で彼は居住の学術研究と政策研究の対照性を観察する機会を持った。居住についての大半の学術研究は次のように特徴づけられる。居住のようなものは社会活動とどのような関係にあり、今度はこれらは、年齢、学歴、社会経済階層等の一連の標準的統制変数とどのような関係にあるか、を理解することに力点が置かれる。研究される変数は、居住の人種差別、テナントへの満足、人種の緊張の水準、居住者のライフスタイル、年齢・学歴・社会経済階層・地理と関連する近隣パタン、住区に転入、転出入口移動、これが近隣の安定、成層に及ぼす影響。そのような研究の知見が登場する形式は特徴を持つ。例えば、近隣の凝集性はその居住者の人種混合に左右される。世帯は主要制度との一体化を通じて近隣に一体化する。自発結社への参加は社会経済的地位と共に推移する。後者は学歴と民族に正の相関がある。居住への注目は不動のものでなく、大きな集合体（近隣やコミュニティ）研究の一部としてなされる。

居住についての政策志向研究は、根底的に異なる。それはマネジメント・アクションによって操縦されうる居住変数に注目し、変化を起こすコストにしっかり注目する。従属変数は行動の測定で、独立変数は直接の政策関心事から引き出される。この研究所でのリサーチに情報を伝える政策関連変数の例は、居住タイプ（例：4 高層、エレベーター設備のない建物、平屋）、エリアのタイプ（例：ホール、階、遊ぶエリア、座るエリア）、費用のかからない修正（カービング、照明、塀）、マネジメント変数（エスニシティの占拠率、家族のタイプ、テンエージャーの数）、その他の変数（犯罪被害率、文化破壊、占有率）である。その変数が直接政策に関連する研究に由来する知見の種類には次のものが含まれる。既存の居住のささやかで費用のかからない変更が防衛行動に大きな影響を及ぼすことがある。例えばエレベーターのない建物の外側の照明やカービングの変更が住民が座るところ、子供が遊ぶところ、誰が喧嘩を止めさせるかに影響するだろう。家族のタイプによる占拠者の比率の統制は転出率、占拠率を減らすだろう。社会学者は「居住プログラムに融資する様々なメカニズムの社会的な含意は何か」「その地区内に広く分布する社会集団の中である集団ないしローカル者に特別に的を絞った居住の社会的含意は何か」「居住の管理を編成する様々のやり方の包括的なソーシャル・アクション・プログラムをこなす彼らの能力に対する効果はどうか」と尋ねる。

C2 盲人研究

Scott (Senior Author) は長年にわたって盲人研究に従事し、このトピックに関する論文、著書を発行してきた。顧みると、その著作は本書で定義された意味での政策志向よりもっと因習的なものであった。著者のリサーチフィールドとの長い関わりは、彼を盲人に政策志向した研究の主要変数と関心事のいくつかに釘付けし、いくつかの一般的結論を引き出すように導いた。彼の当初の研究は学術的なところに焦点をおいたものであった。「盲目であることは人格にどのように影響するか」「盲人のステレオタイプは文化ごとに異なるのか」「これらのバラツキは人々が自分の不慮を体験する仕方にどんな影響をするのか」「盲人のための機関は彼らのクライアントに盲人に関連した社会的役割へとどうやって社会化するのか」「どちらの盲人が機関によって社会化され、どちらが社会化されないか、またそれが各々にどんな帰結をもたらすか」「リハビリへの個々の機関のアプローチを決めるものは何か」。

この仕事が純粋の学術的関心事からより政策に志向した争点に移るにつれて、別種の問いが登場してきた。例えば、「盲人が生存するためにはサーヴィスプログラムはどれだけ大きく、ないしは多様に分化しなければならないか」「サイズが分かれた機関の社会学的帰結は何か」「カバレッジはどのように定義されるべきか、スネル・チャートのような標準的基準によって、

主観的基準によって、その組み合わせによって」「カバレッジを定義する仕方それぞれの社会学的帰結は何か」「プログラムは自宅ないしコミュニティに個人を復帰させるために開発されるべきか、施設の中の個人のためのケアを目指すべきか」。学術的関心によって示唆された問いは、盲人は生まれながらではなく、後天的に作られること、組織は個人の盲目体験の形成に主要な役割を果たしているという結論に導く。政策に志向した研究は、プログラム管理は大部分に左右されること、それゆえ盲目を査定するために用いられる基準、プログラム活動の性質と多様性は主として規模の節約と政策によって決定される。翻って、この結論は様々なサイズのプログラムを持つことの社会的帰結を同定するのを助ける。

C3 負の所得税の福祉改革的研究

執筆者双方は長年にわたってニュージャージー州、ペンシルバニア州の負の所得税実験に携わってきた。そのうち Shore はシアトル、デンバーの実験の設定にも携わった。この問題への通例の学術的アプローチは、社会学的文献のレビューに基づく研究のための問いをコンパイルするプロジェクトに携わる他者によって仕上げられる。このレビューは彼らを次の質問へと導いた。「自己有効感負の納税を受け取る結果変化するか」「ボランティア組織への参加はプランの寛大さに応じて推移するか」「所得維持の健康に対するインパクトはどうか」「所得維持は宗教参加にどんなインパクトを持つか」「生活の質に対してはどんなインパクトを持つか」「政治への関与、政治参加にどんなインパクトを持つか」「アメリカ社会についての我々の見解にどんなインパクトを持つか」。

政策志向アプローチは問題の管理（運営）と問題の政治的受容性に影響する主要問題に注目する。「負の納税プランは時間の経過につれて世帯構成にどんな影響を及ぼすか」「家族を単位として定義できる場合と個人を単位として定義できる場合で、ルールと構成の間にどんな関連があるか」「管理（運営）形態を単純なままに保つ一方で、横の equity と縦の equity を設定するニーズに照らして、プログラムのための所得をどのように定義するのか」「プログラムルールの知識が行動にどんな影響を及ぼすのか。例えば、諸個人はプログラムが支払いそのものに基礎をおく場合と所得の変化の関数として支払いの変化を予測する彼らの能力に基礎をおく場合で、異なった反応を見せるか」。

結論

我々が提示してきた視点と我々が輪郭を述べてきた手続きは、今日応用社会学者によって利用されているそれとまったく別というわけではないが、基本的な点では異なる。いわゆる

純粹なリサーチと応用リサーチの間の関連について根本的な問いを提起するのに十分に異なる。我々の分野で目下提示されている手続きは、上記の関連が時には入り組むことがあっても直截なことを意味する。それらは、真に政策と関係した社会科学リサーチは我々の分野の他の種類のアプローチと有意に違わないものと仮定している。我々が提示する手続きとそれらが由来する視点は、これらの主張を疑問視するものである。社会政策関心事にレリバントであるためには、リサーチのための問いは学術的関心事でなく社会政策関心事によって指令されねばならない。我々が見てきたように、この視点が採用される時に生じる争点の類は、学術に志向した社会学者の想像力をかき立てる傾向のあるものではない。学界人が関心を持つのは、貧困の社会的性質や帰結であって、現時点で貧困立法がどの進捗段階にあるかではない。我々の分析が正しければ、我々はルーチンの学術リサーチをする社会学者と政策的問いのリサーチに従事する学者の亀裂が生じることを予想するだろう。この亀裂は決して完全なものではなく、我々の分析が意図するよりも深刻さははるかに少ないだろうが、社会学に問題を投じる亀裂ではある。それは、応用リサーチにキャリアを乗り出したいと考えている社会学者に院生の養成の問題を提起する。それは、社会学者が基礎リサーチ、院生教育、多くの公立大学での社会学部の設置の支援を政府に求める基盤に関する問いを提起する。最後に、社会における社会学の目的に対する問いを提起する。社会学者の想像力を最もくすぐる知識タイプが計画されているソーシャルアクションに適切な基礎を与えないならば、社会学の究極的な justification（承認）はどうなるのか。我々はここでは上記の問いに答えようとは思わないし、それらを今後議論することも提案しない。代わりに、尋ねられねばならない問いを明確化するのを助ける分析が社会学内に余地があるだろうという希望で擱筆する。

(付録) 理解のための知識とアクションのための知識

はじめに

我々は、社会学者が政策作成者に提供してきたものは学問的手続きを用いることによって実施されたリサーチがほとんどもっぱらであることをみてきた。この事実は「学問的リサーチから獲得した社会学的知識は政策を行う目的に適した知識なのか」という疑問を引き起こす。学問的知識を発展させるために採用したい手続きと政策に有用な知識を獲得するために使用したい手続きのあいだには些細ではない差異が存在する。上記の問いに答えるためには、我々は学問の世界とアクションの世界のお互いを区別する特徴のいくつかに気づく必要があ

る⁵。我々の読者は疑いもなく鼓舞を欠いた学問の世界に気づいているので、我々の焦点は、政策作成者の世界が学問の世界と異なる主要な仕方におくことになる。

最も基本的なのは、目標の違いである。学術的な社会学者の主要な目標は、社会に関する理解を増進することであるのに対して、政策作成者の目標は社会を変革するためにソーシャルアクションのプログラムを発議することである。学術的な社会学者が研究する問題は社会学の内部にあるのに対して、政策作成者は実在する社会的世界の差し迫った緊急事態に関心を払う。たとえ両者が同一の問題を選択しても、彼らが問題に問いかける問いは異なる。前者は「我々は何を知っているか」と尋ね、後者は「我々は何をするのか」と尋ねる。前者はタイムレスで没利害の雰囲気の中で回答を追求できるが、政策作成者はリアルタイムで、対立、希少資源の制御、自己利害と集団利害の追求を伴う政争化した世界の中で仕事をしなければならない (Coleman 1972: 3)。前者の任務は、彼が観察する出来事を説明するために力強く儉約的な理論を開発すること、出来事についての法則と一般化を定式化すること、彼の予測力を高めることである。政策作成者のすべきは何かを知りたがる。彼にとっては、予測は所与の政策が問題にどのように影響するかを予想することである。学術的な社会学者は、人がある現象について知れば知るほど好ましいというアイデアを受け入れる。政策作成者は、知られていることは何がなされるべきかを指示するかどうかを知りたがる。政策作成者にとって、知識の増大はじつは争点を攪乱する。学術的研究の最終産物は、専門の社会学者を読者として配られている専門誌に掲載するか著書の出版である。政策作成者の努力の最終産物は、差し迫った問題の解決を助ける社会政策である。

政策作成者の世界がその周りに編成されている原理は彼らの目的にとって必要な研究タイプに大きな意味を持っている。そこでの理論とリサーチ知見は、学問的リサーチにおいては必ずしも重要でないある種の性質を必要とする。まず政策作成者の仕事にとって必要な理論の特徴から見ていこう。

第1節 理論の特徴

その自然状態での社会問題は単一の現象である。それらを理解することはそれらの全体性を考慮に入れる視点を要求する。対照的に、学術的学問は専門化のために開発されてきている。従って、単一の学問だけでは最も入り組んだ社会問題を扱うことはできない。政策作成者はアクションの追求に際して、学際的理論と視点によって情報を与えられるリサーチに

⁵ Kathleen Archibald は応用的で政策に関連した社会科学リサーチに対する3つの基本的アプローチを同定した。アカデミックなアプローチ、臨床的なアプローチ、戦略的なアプローチ。これらの各々やサブタイプに関しては、Archibald (1970) 参照。

よって助けられるであろう。Irving Louis Horowitz はその問題を次のように描いている。「政策問題は学問の境界がはっきりしたパッケージでは到来せず、むしろ伝統的にいくつかの社会科学の領域と見なされてきている争点の同時的考察を要求する (1971: 3)」。同様に、David Easton は、「社会科学は分析的であるのに対して社会問題はトータルのである」と指摘している (1972: 88-89)。Klaus Lompe は、やや異なったアプローチからであるが、同じ問題点に気づいている。「社会科学の知識を社会政策に適用する問題点の一つは、そのような知識を適用する学際的チームが存在しなければならないことである (1968: 172)」。

難点は、大半の社会学理論が学際的ないしホーリスティックでないし、ソーシャル・アクションのプログラムが要求する学際的視点を引き出すために、社会学が他の社会科学にどのように適応したり、融合したらよいか知らないことである。David Easton が指摘するように、問題点は「分析的に引き出された社会的知識の統合に理論的な障害が存在する (1972:88-89)。その障害は大きすぎて、その観点から社会科学における科学的営為全体を通用させようとする科学哲学をまず開発しなければならない (1972: 89)」ことである。これがなされることが可能だとすれば、我々の一般化された知識をもっとたやすく応用的形態に変換することを可能にする社会科学の再解釈を可能にするだろうと感じている。……「もし社会科学の各々がこれを自分のもっと専門に特化した説明の基礎として使うならば、一般的な知識から応用的な知識への転換の困難は減じられるであろう (1972: 88-89)」。

Easton と Lompe は、ともにこの問題に対する可能な解決策を提案している。しかしこれらの解決策は依然として実行されないままである。それらが実行されないうちは、我々は、社会問題に取り組みねばならない政策作成者によって要求される学際的知識を大半のルーチンの学問リサーチは提供できないだろう、と認める覚悟をしなければならない。我々が第 2 章で見たように、これは今日応用の仕事に関わる社会学者の関心事の主要な源泉である。

政策の世界は単純な説明に高いプレミアムをおく。政策作成者にとって、「単純」は「実行可能」を意味する。政策作成者は彼らが政策を設置するのを助ける問題の説明を欲する。この見地からは、事態が複雑でないほど、望ましい。人が複雑な問いを最も単純な形態に縮小ことができ、最大限効果的な変革を達成するのに必要な最小限の努力で実行可能な努力を同定できれば、研究から政策的含意が導かれるであろう。しかし、提出される説明が過度に複雑とか、洗練されたものとか、知的にエレガントなものの場合には、政策的含意は導かれないことはほとんど確実である。かくして、政策形成者には単純は、ストレート（直截）、操作可能（workable）、実行可能を意味する（Caplan 1976: 232）。

アカデミックな社会学者も単純な説明を重視するが非常に異なった意味（知的にエレガントとか儉約的な）が念頭に置かれている。Coleman が我々に思い出させるように、その仕

事は情報の節約を意味している（1972：3）。学界人の目的は、ほんの部分的な情報しか存在しない特定の事例で予測を可能にすることである。つまり、アカデミックな世界の人は、一般法則や理論を使うことによって、少量の情報を長い道のりに引き延ばそうとする。これらの法則理論が単純であればあるほど、入り組んでいなければならないほど、付帯条件が少なければ少ないほど、社会学者は限られた情報しか存在しない特定の状況と結びついた出来事や帰結を予測することができる。

単純な説明の上記の意味が必ずしも両立しないとしても、それらは同義でないことは確かである。これは政策リサーチを行う社会学者が、社会学の見地から見て単純な説明である、ある出来事に関する説明を開発できることを示唆する。だが政策作成者にとってそれは単純でもなければ満足いくものでもない。というのは、それは操作可能（workable）、実行可能な解決がどんなものかの指摘を与えることができないからである。例えば、社会学の意味では、スラムの存在の最も単純な説明の一つは、コミュニティ構造ないしコミュニティ帰属の不在である。この説明は単純であるし、ある者はそれは問題の核心を突いていると感じる。しかし政策作成者の用語では、これは絶望的なまでに複雑な説明である。それはスラムを緩和する手段に明白に言及していないからと。それはいても社会科学者のほとんどが克服したと主張した者のいない課題である、代替種の社会構造の創出を要求するように思われる。この点で、学問的なりサーチのための基準と手続きは、政策に志向したりサーチに完全に適合的とはいえないと想定する根拠がある。

政策作成者はまた、状況ないしは状態の原因を与える理論を要求する。単一の要因ないし諸要因群が原因として摘出されるなら、有効な介入が一つの可能性となる。用いられるモデルは、臨床医学からの借り物である。政策作成者が変革のために介入できるように、説明は因果的でなければならない。

学問的リサーチもまた因果的説明を開発しようとするが、因果的の用語の意味は社会科学者にとって幾分異なっている。実際、学問的なりサーチでは、これほど注意を払って使われている用語は他にはほとんどない。まさにその性質のゆえに、科学的探求は、研究者に彼が研究しているものの複雑さを認識するように強いる。自分の任務が学問的なエレガントの意味で単純である説明に到達することであっても、彼は自分が研究する現象の複雑さを認識して初めてそれをすることができる。かくして、因果的という用語を不用意に用いる科学者は、彼らの同僚によって軽蔑されるであろう。Blalockら（1971）の因果のモデル化に関する仕事が例証するように、その意味は微妙で洗練されたものである。変数群の因果関係に関する科学的に有意な言明は困難であって、従って因果的説明はまれである。

学問的な基準に従って行われたリサーチは因果的説明を生じることは少ないので、政策作

成者に不満を抱かせる傾向がある。しかしながら、政策視点をとる社会科学リサーチは、政策作成者の意味では単純で因果的ではあるが、科学的観点からは単純で因果的ではない、説明に導く。そのような説明は必ずしも学問的理論の前進を構成しない。もちろん、人は応用リサーチが学問的な仕事に重要な貢献をすることが出来る可能性を排除することはできないが、そのような貢献は確実でもないし、ごく一般的なものでもないことは明白に思える。

その性質上、政策形成は出来事に関して、学際的で、単純で、因果的な理論の開発を要求する。奉仕可能であるには、そのような理論は堅固でなければならない。統計テストの性質を描写するために用いられるこの用語の意味の比喻によって、我々は仮定がほんの一部でも充足される状況においてさえ、適用にある程度の成功を収める理論や説明を意味するものとして「堅固」という用語を用いる。アクションの世界（政策作成者の世界）は、攪乱や変化によって絶えず翻弄される開放システムである。理論モデルは、これらの厄介で移ろいやすい、実生活状況のなかで持ちこたえられるほど十分に堅固である。Coleman はそれを次のように説明する。

応用リサーチは、より洗練された技法よりも高い確率で良い結果をもたらすリサーチ設計とリサーチ手続きの利用を必然的に伴う。より洗練された技法は、仮定の一部が充足されなかったり、測定エラーが存在したり、サンプリングに偏りがあったり、一部の変数が見落とされたり、欠陥のあるデータの類出の源泉の上記以外のものが存在する場合には、非常に不正確な結果をもたらす（1972：5）。

対照的に、学問的リサーチを行う社会学者は傑出した有利さを持つ。というのは、彼は特に関心のある関係を摘出し、研究し、特定するために諸変数が一定に保たれ（制御され）うる閉鎖システムを扱っているからである。彼は仮定と変数に大きな制御を持つので、彼の理論は（応用リサーチと）同程度の堅固さを持つ必要はない。大半の社会学の学問的リサーチを先導する理論と概念モデルが実生活状況に適用されるかどうかは、真剣な研究に値する未決の問いである。応用社会科学を行う多くの社会学者が想定するように、大半の理論と概念モデルがそのまま政策に関連した現実世界の研究に当てはまると想定することは未熟であるように思われる。

この点で、社会学よりも公共政策に大きなインパクトを持ってきている経済学のような他の領域について考えることは興味深い。公共の事柄の世界において経済学が重要な役割を果たしている理由は多くあるが、その一つに経済学者が「堅固」の問題を処理していることが挙げられる。通常、社会学者は社会学理論を存在するがままの現実世界に単純に適用しようとしてきている。対照的に、経済学者は、経済学理論に基づいて可能な予測を行うのに必要

な特色を想定し始めるように、現実世界を修正するプログラム、法律を制定するように政治家を説得に努めてきている。つまり、経済政策と呼ばれるものの一部は、時間の経過につれて、このユニットが、介入、制御、予測が可能で人為的特色を獲得し始めるように、国内経済に対する制約の創出を伴う。経済学者は理論モデルの堅固さによって提起される問題は次の3つのいずれか（理論モデルを変える、人が理論モデルを適用する状況を修正する、二つの組み合わせ）によって処理されうること気づいてきている。ほとんど例外なくこの問題に少しでも思案する社会学者は、上記の3つのオプションの第一のものだけを検討してきている。

かくして、社会的世界についての学問的知識を前進させるための理論と概念モデルを実生活状況に適用することは、複雑さと問題に満ちた過程であることが明白になる。実践的活動としての政策形成はホーリスティックで、単純で、因果的で、堅固な理論と概念モデルを要求する。これらの性質は学問的理論が必ずしも保有しないものである。

政策作成者の特別のニーズと目標は、リサーチで用いられる理論に少なくとも一つの含意を有する。我々は、それが彼に介入のオプションを与えるので、政策作成者は広義の意味での「因果的」説明を重視することを述べてきた。また状況を変える政策作成者の介入という目標は問題をはらむものと見なされるので、彼は独立変数に基づいた理論と説明を制御と操作にかけられるものと見なす。学問的リサーチでは、研究のための変数を選択する唯一の考慮は、一つの従属変数と関連した偏差を説明するのを助ける見込みの程度である。しかしながら、政策リサーチでは、ある変数が別な変数と相関することを示すのでは十分でない。政策のために有用であるには、その研究は、運用中のプログラムのコンテキストで、操作と制御にかけられる独立（原因）変数を含まねばならない⁶。

多くの社会学者は政策研究における従順な変数の理論的利点を理解しているように思われる。しかしながら、従順な変数の利用に基づいたリサーチ研究を実際に設計する困難さを理解しているものはほとんどいない。

⁶ 多数の社会学者はこの事実気づいている。Amitai Etzioni は次のようにいっている。「基礎的リサーチにとって無関係だが、政策調査者、政策作成者にとって重要な区別が存在する。つまり、変数が操作可能な程度、つまり動かすものの特徴づけられる程度（1971：1）」。Howard Freeman は指摘している。「独立変数は高い影響ポテンシャルを持つ必要がある。独立変数は従属変数と相関する必要があるだけでなく、オペレーティングシステムのメンバーによる操縦にかかる必要がある（1963：152）」。James Coleman は、政策操縦に従う政策変数と従わない状況変数を別々に扱う必要があることを指摘している（1972：5）。最後に、応用社会科学の新天地を開拓した論文の中で、Alvin Gouldner は、「応用社会学者は社会問題を説明するだけでなく修復する独立変数を同定することに究極的には関心を払うこと」を強調した（1957：93）。つまり、「応用社会科学の知識はある種の特徴を持たねばならない。というのは、独立変数が制御にかけられる程度を確定するために、独立変数を調べねばならない。……応用社会科学は予測力のある独立変数に関心を払うだけでなく、制御にかけられる一部の独立変数を発見することにも関心を払わねばならない（1957：96-97）」。この点のさらなる議論は、Bauer/Gergen（1968：107）。

我々が他所で指摘してきたように、大半の政策に関連したリサーチは、実際は公的事柄の問題に関してなされた学問的リサーチにすぎない。これは、これらの研究で独立変数を選択するために用いられる手続きが学問的研究と同じであることを意味する。従って、変数は主としてその高い予測力のために選ばれている。社会学者はこれらの変数のいくつかは御しやすいと想定しているからである。この手続きは政策リサーチに深刻な問題を突きつける。というのは、詳しく検討すると、社会学では、予測力がありかつ運用中のソーシャル・プログラムのコンテキストで制御と操作にかかる少数の独立変数が存在するからである⁷。Henry Riecken はその問題を説明している。「社会学における非常に多くの中範囲の理論は誰一人として制御できない変数をめぐって構築されてきている。幼児期の体験、核家族の構造、父親の職業、年齢と性、家族の出生順（1969：110）」。政策リサーチで通常遵守される手続きを所与とすれば、政策に関連した社会学的リサーチが統計的に有意で非常に興味深い、だが政策形成者は制御や操縦が利かないのでまったく役に立たない知見を頻繁に産出しているのを見ても、我々は驚かないはずである。我々が第1章で見してきたように、政策に関連した社会学的リサーチの知見の有用性についてのこの指摘は、今日応用社会学を実践する際の問題点に関する議論で中心的な論点である。

ここで言及されるべきさらなる論点がある。社会学的研究は政策のために役立たないだけでなく、有害である。Riecken はその問題を簡潔に述べている。

社会学的説明は事態はそれが辿った道以外にはなり得なかったという結論にどうにかしてたどり着いている。説明の性質は、過去のビジョンと異なった将来のビジョンに到達しないとといったものである。何らのアクションがとり得ない変数に注意を固定することによって、大半の社会学者は、社会問題の解決者がそれらをハンドルとしてもレバーとしても使えないので、後者にとって関心も見込みも湧かない理論的・説明的言明を提供している（1969：110）。

従順な独立変数の選択を強調する政策に関連したリサーチ研究の代替の手続きを仕上げることによって、この問題を解決することが論理的であるように思われる。要するに、Howard Freeman が説明しているように「因果性の理論的発想に基づいて研究する変数を選ぶのと、従属変数と見なされる現象に変化を引き起こすために操縦されうる変数に基づいて研究する変数を選ぶのとの間にかなりの違いがある」のである（1963：152）。他所（Scott/ Shore 1974）で、我々は得られる結果がアクション可能な変数を含む可能性を最大化する社会学的

⁷ 我々の印象は Gross/Fishman (1967), Glock/Nicosia (1967), Coleman (1972), Riecken (1969) によって共有され、立証されている。

政策リサーチを実施するための手続きの輪郭を述べた。その手続きは特別の考えから、政策問題と相関したり、影響することが過去のリサーチと理論から知られている、また応用コンテキストで従順となりがちな独立変数をあらかじめ選択することが企図されている。そのような手続きは、高い政策的卓越性を持つ帰結変数と運用プログラムのコンテキストで操縦可能な変数の経験的関連の研究に焦点をおく。いわば御しにくい変数は、それらに関する知識が知見に条件を付ける際に利用されうるので、完全には無視されてはいない。

そのような手続きは、真に政策に関連する独立変数を含む知見の産出を保証するのを助ける。しかしながら、それを適用する我々自身の努力の中で、我々はそれが研究のための主要変数の範囲を大いに狭めることを発見した。我々が研究している問題についての厳密に学問的な研究におそらく含まれるであろう標準変数の多くは、たとえ我々がそれらと従属変数の間に強い関連を見いだしたとしてもその知見は識別しうる政策含意を何ら運ばないので、二次的関心しか引かない、ことに我々は気づいている。

この問題からの一つの脱出法は、経済学の先導に従い、社会についてのケインズ流の社会学理論を開発することであろう (Feuer 1954: 683-684)。我々がこのように述べるのは、ケインズ以前の経済学の領域で、この領域が直面した状況が今社会学が直面している状況と似ているからである。様々な経済学理論があったが、みなアカデミックには価値があるが、国の経済政策を決定しようとしている政府の意思決定者の見地から特に有用なのは一つもなかった。この問題は、独立変数が少なくとも原則として操作と制御にかけられる経済学理論を提供したケインズによって解決された。そのトピックに関する論文の中で、Feuerは「ケインズのアイデアは、その独立変数が間近な現在において制御にかけられうる一組の因果法則を提供した」と語っている (1954: 603-604)。Charles Lindblom も語っている。

ケインズの最大の意義は、政策作成者が彼のモデルの変数を操縦できるという限定された意味で操作的である一組の概念と理論モデルを提供した点である。初めて人は政策を直接先導する一組の概念と理論モデルを持った。ケインズの分析は国民所得計算と相まって、世界にとって今までにない一種の合理的ないし科学的政策形成を可能にした (1972: 3-4)。

ケインズ経済学の事例は、もし社会学が自覚的に原則として直接の制御にかけられうる独立変数からなる社会学理論を開発するなら、社会学が有効な社会科学になるかも知れないことを示唆する。

しかしながら、そのような社会学理論の開発は学問のブレークスルーとはならないかも知れないことに気づかねばならない。我々はそのような社会学理論を創出することによって、必

然的に社会についての我々の理解を高めるであろう、と想定することはできない。この点で、経済学の経験は、単一の理論が二つの目的に奉仕できるという考えに対して我々を用心させるはずである。ケインズ理論の長所に関する他の点では才能豊かな彼の論文の中で、Feuerはその問題点を断固として指摘している。「ケインズのアイデアが受け入れられてきたのは、他のものよりもそれが多くを説明しているからでなく、独立変数が身近な現在においてアクセス可能である一組の因果法則を産出しているからである（1954：683-684）」我々は経済学のトレーニングを特に積んできてはいない。我々は Feuer の説明が正確かどうか判定できる能力があると思っていない。経済学に精通しうる他者は、経済学の領域がケインズ理論を取り込んだときに、経済学の中核的な知的な問いについての経済学者の理解を増進しない「アクションのための理論を受け入れた」と語った。だがそれは、その操縦と制御を直接導く用語で経済に関する考え方を提供した。Jerome Ravetz は、この見解の最も熱心な提唱者の一人である。彼はケインズ理論の優勢はそれとともに経済学という学問に不利益ももたらしたという。「ケインズが経済学を政策のために大いに役立つ科学にしたことは確かであるが、経済学がこのモデルを取り込むと経済学の大きな学問的争点の多くに学術的にリサーチすることを断念することになるとわたし(Ravetz)は信じている(1971：377-402)」。Ravetz にとって、政策とのレリバンスは非常に高い代価を払って獲得されるものであった。Ravetz の議論はそれが社会学にも関連があるゆえ、注意深く検討されるべきである。制御可能な独立変数からなる社会理論の開発は政策とのレリバンスの欠如という現在の難点への明白な解決策であるように思われるが、そのような開発は社会学に新たな問題を導入する a mixed blessing 両刃の剣であることが判明しよう。

第 2 節 リサーチ知見の特徴

アカデミックな社会学者の目的に適ったリサーチ知見と政策作成者の目的に適ったそれとに重要な違いがある。この基本的な事実を例証するために若干のことを簡単に触れよう。

社会政策にとって有用であることを証明するためにリサーチの知見は限定的でなければならない。これは、研究される変数が狭く正確に定義され、そのようなリサーチ結果がアクションの有効な指針として役立つと思うなら、それらの間の経験的な関係が明確に特定されねばならないことを意味する。限定された知見のニーズは、そのような正確な結果を生み出すことができるほどに洗練された社会学理論がほとんど存在しないので、一つの問題を提起する。社会学理論の多くは、あまりに大きすぎて区別がつけがたいために実用に使えない変数からなっている。医師の役割、ニーズの達成、病気役割、社会的コンテクストがその例である。Henry Riecken はこの種の概念の旧態然たる厄介さを描いている。「そのような概念は

おそらく consequential phenomena を指しているのであろうが、それらの概念がアクション準拠の点で有用であることを十分な限定性をもって我々に教えない (1969: 10)。

その上、学問的なりサーチでは、研究者の関心は、任意の与えられた項目で比較した集団間で統計的に有意な違いが存在するかどうかにおかれ、政策リサーチでは、知見は統計的に違うだけでなく劇的にも違っていなければならない。Freeman が指摘するように、「それらに資金とマンパワーを投入することを承認できる政策成果をもたらすほどに十分に劇的 (ドラマチック) でなければならない (1963: 149)」。例えば、服役中に職業訓練と他の支援サービスを受けた者は受けなかった者に比べて再犯率が低いことが明らかになっている (Martinson 1973)。しかし統計的には有意であるものの、二つの集団間の違いの度合いは刑罰システムでこのコストのかかる選択肢を広範囲に採択するのを承認するほどに劇的ではない。

限定的と劇的に加えて、政策のためのリサーチ知見は行動に間接的に関係するか全然関係しない変数と対照的に、直接行動を測定する従属変数に力点を置かねばならない。これは、政策作成者が特定の政策の採択を承認するために結果の違いが存在することを証明できる証拠を持たねばならないためである。通常、これは行動の違いに関する証拠を意味する。Freeman はそれに気づいている。「一つのリーズナブルで安全な仮定は、政策システムが態度現象にほとんど関心を払わず、大半は行動現象に関心を払う。従って後者は大きなアクション・ポテンシャルを持つ (1963: 150)」。例えば、近隣住区の安全の研究では、政策作成者は住民の安全感情の変化を示す従属変数よりも、警察管区の犯罪率の増減を示す従属変数を好むであろう。理想的には、彼は両方の種類の情報を欲するだろうが、どちらかを選ぶことが強いられる場合には、実際の犯罪統計を好むであろう。かくして Freeman は述べる。「社会政策リサーチは実は常に態度や動機よりも行動の測定される従属変数の選択を要求する (1963: 150-151)」。通常の学問的リサーチ手続きに従った社会学者の問題点は、この要求から生じる。というのは、社会学的リサーチの多くは態度を扱っているからである。態度と行動の関連は知られていないので、この複雑な問題が解明されるまでは、態度データに主として基づくリサーチの政策への含意を確定することは可能でないであろう。態度に基づくリサーチ知見の特定政策との関連も依然として不確定のママである。

限定的で、劇的で、行動で測定される知見という要求は、通常の学問手続きを使って行われた多くのリサーチの有用性を制限するであろう。上記の特徴を持つ知見を産出する障害は、学問的知見が自動的にさして容易に政策問題に適用できないことに我々が気づくことを要求する。しかしながら、もっとはるかに重要なのは、その問題が政策のために必要とされている特別な種類の理論によって提起されていることである。いずれにせよ、政策のために必要

とされている特別な種類の理論と学問のために必要とされている理論に関する我々の議論は、学問的理論は政策に関連していると想定されるリサーチを行うのにしばしば不向きな基盤であることを示唆している。これは、学問のための理論とリサーチ手続きを強化することによって社会学のリサーチとの関連を高めるためになされてきている提案のいくつかの妥当性に根本から疑問を投じる事実である。

第 3 節 社会学という学問にとっての意義

この議論の主要な目的は、政策作成者がアカデミックな社会学の理論と方法に基づいたリサーチから社会政策を立案するのに必要な知識を受け取る傾向があるかどうかを検討することである。我々がこの主題に関して到達した結論は、社会学という学問にとって重要な意義を持っている。金銭的な影響は確かに最もシリアスなものの一つである。もし学問的な社会的リサーチがルーチンで政策のために役立つ見込みが低いなら、アカデミックな社会学の公的的金銭的な支援の主要な根拠の一つが崩れる。伝統的には我々の学問のアカデミックなリーダーたちは、社会学の基礎的リサーチや院生教育に公的なお金を投資することは、究極的には、社会の抱える問題を緩和するための効果的なソーシャルプログラムを開発する基礎として役立つ知識の形でペイオフするであろう、と論じてきている⁸。我々は、社会学における基礎科学的リサーチへの支援の撤回を見ることは欲しくないが、社会学がこの約束を果たすことが求められる展望についてはただちに不安である。もし我々が本章で展開してきた議論に真理があるなら、これからの社会学者は学問的な手続きだけに従ってリサーチを追求することによっては実現されないレリバンズに不用意な約束をすることは避けねばならない。おそらくもっと安全でもっと正直なコースは、一つの原理に代わって二つの原則に立った公的支援の要請を条件とすることであろう。我々が実現を期待できない約束を避けるようにそれを注意深く修正した後で、公的支援のこれまでの承認を利用し続けるであろう。

支援のための第二の議論は、尊敬されているアカデミックな領域のすべてがそれに基づいて展開されてきている伝統的公準、つまりそれ自身のために知識を追求することは、十分に市民化されていない社会でないと着手する余裕がない固有財 (inherent good) であるからというものである。この意味で、社会学のアカデミックな部門を支援する目的は、それ自身のために社会の理解を増進することであろう。上記の二つの原理の一方にだけ基づくなら、安閑としておられる社会科学は一つもないであろう。しかし確かに、アカデミックな社会学者が社会問題に対する具体的な回答を追求する強迫的な装いから解放されるなら、そして政策に

⁸ House of Representatives, 1967 *The Use of Social Research in Federal Domestic Programs*.

志向した社会学者がより学界に志向した同僚の目の中で地位と尊敬を保持するために自分たちの仕事の潜在的な理論的意義を定義する必要がなくなるなら、我々が同定してきた緊張の多くは減るであろう。

もし学問的リサーチがしばしば社会政策形成に有益な知識をもたらさないという結論が正しいならば、社会学的リサーチの公的支援を承認するための旧来の議論はミスリーディングであるばかりでなく、社会学の発展にとって危険でもある。約束されている政策のレリバンスが今度は政府資金給付のパタンによって鼓舞されることになるからである。Philip Green が指摘しているように、「政府への社会科学の関与は社会科学の独立性に深刻な脅威を提起する。社会科学が政府の役人にとって有用であるためには、実在性と実用性という彼らの基準を満たさねばならない (1971: 17)⁹」。Herbert Kelman は、その危険を詳細に説明している。

正当な社会科学リサーチの中で承認されうると見なされるものの主要な基準がどんなリサーチが支援され、鼓舞され、許可されるかによって決定されることになれば、科学的過程の基礎全体が脅威にされされるであろう。……もし我々が短い範囲のレリバンスの基準を採用するなら、社会変革を引き起こそうとするものの視点から最も重要な仕事のいくつかは排除されるであろう。我々がこの種の判定をするとき、我々は実は、何が研究されるべきで、何が研究されるべきでないかについて政治的決定を行うことに関与しているのである。社会科学リサーチが何を研究すべきで、何を研究すべきでないかに関する決定が政治的基準に基づく事態を助長することは、私が社会科学の基本的な役割と見なすものを放棄することである。それは社会、社会制度、社会生活に関する独自の視点の源泉としての役割である (1972: 196)。

上記と同じ感情は David Truman によっても叫ばれている。

発展途上の学問の尺度の一つは、それが科学者の一員として重要と見なすものの観点から議題を設定することであり、公共政策の領域からの少なくとも一時的な撤退は、社会科学の成熟につれて予想されることである。もしある学問を大部分定義する preoccupation (先取) が公共政策の問題によっても設定されるものとするなら、知的な営みとしてのその学問が直面している問題によって多少設定されるものではないことになる (1968a: 509)。

⁹ Irving Louis Horowitz は『社会科学の利用と濫用 (1971)』のなかで同じような指摘を行っている。Eliot Friedson は『医師という職業 (1972)』の中で、医療という領域との関係で社会科学の予想される影響に注目した。

最も厳しい警告は Jerome Ravetz によって発せられている。Ravetz は、社会科学を自分自身のコントロールされた経験の閉じた世界のなかに、事実をしばしば設置することができない学問として描いている (1971 : 383)。彼はそのような学問は生で不安定な実在の問題について結論を引き出すことすらできないと警告している (1971 : 383)。だが、「ソフトな」科学の実践者による政策領域に関わりになりたいという誘惑は大きいし、それをする事への十分な承認は常に見いだされる。つまり「差し迫った実際的なないし技術的な問題に適切な意思決定が下される以前に大規模なリサーチ・プログラムが必要であるという信念、……拡げたいという自生的な願望、ある分野が問題によって要求される成熟点に到達しているという幻想、あるいはその問題への関与がその分野をトップの座に押し上げるという幻想…… (1971 : 383-384)」。彼はさらに続ける。「その分野のリーダーがこの点でその実効性に私的な疑念を持ったとしても、彼らはその介入がないところでは、無知と自己利害がとられる意思決定間で支配するであろうと、自分を正当にも安心させることができる (1971 : 384)」。

これらの議論を受け入れ、誘惑にかられる学問に提起された危険とは、学問の異常発達である。成長率があまりに急速すぎて品質管理の既存の社会的メカニズムが彼らの恒常的機能を果たせない事態である (1971 : 384)。助けになるリサーチへの差し迫った要求に答えて、Ravetz は、賢い凡人がより多くの良心のとがめを犠牲にして帝国を築き、権力と威信を獲得する可能性が存在することを危惧した。学問内部からのコントロールの努力のないところでは、成熟科学を模倣する教義の中に職人的技法と格言的な知恵が埋め込まれているので、Ravetz は、「陰の」科学 Shadowy Science の最悪の過剰が起りうることと、院生の研究プログラムが未熟な科学の教授に固有の矛盾のすべてをますます先鋭化させる大学となりうると信じている (1971 : 385)。これは厳しい警鐘である。Ravetz は危険を誇張していると思えるものの、もしそれが政策のレリバンスにあまりに大きな短絡的力点を置きすぎるならば、社会学という科学的学問に見舞う運命についての彼の予測を我々の学問は無視するわけにはいかないだろう¹⁰。

学問的リサーチと政策リサーチが目的と手続きを異にするという我々の結論のもう一つの帰結は、それらが同じ場所で行われる必要がないということである。実際、あるものは政策リサーチは大学というセッティングの外で追求される方が好ましいと主張している。Coleman は、政策リサーチを大学というセッティングから除外する理由の一つを説明している。「大学では、学科の構造もセンターや研究所も、あるタイプの政策リサーチに不向きにする一つの特性を持っている。すなわち、リサーチ結果の公表への邁進である。大学は政策リサーチを

¹⁰ Ravetz は、それを幾分軽蔑してクリチュエ科学と描き、他の社会科学に起こっていることと信じる事柄の主要な事例として経済学の領域を取り上げている。

行うには不向きな場所である (1972: 19-20)」。Alvin Gouldner も別な理由を挙げている。応用社会学者は、その利用が意図された変化を妨げるのではないかと恐れるなら、知識源がどんなに豊富なものであってもそれを放棄しなければならない (1957: 96)」。明らかにこの姿勢はアカデミックな社会学者には想像できないことであろう。Herbert Gans と Amitai Etzioni は、アカデミックな社会科学が政策リサーチに不向きであることをコメントしている (Gans 1971: 19, Etzioni 1971: 9)。Coleman によって政策リサーチにふさわしい代わりのセッティングが提案されている。リサーチに専門特化した組織ユニットによってなされるのが最良である、なぜならそれは政策作成者に身近であるが独自の開発を許可するのに十分独立しているからだと彼は考えている (1972: 19-22)¹¹。

彼らの議論は理解できるが、それは必ずしも明快でないアカデミックな社会学の支持に真剣な含意を持っている。リサーチと学問の発展をこれまで支持してきた公共体が彼らが定式化を要求する問いに対して即座で具体的な回答を求める環境では、社会科学のために存在する乏しい公的な資金が、独立したリサーチ会社によって行われる政策に関係したリサーチに向かうであろうと予想される。多くの社会学科は院生養成の基礎的プログラムの支援をそのような研究資金に大いに頼っているのも、政策リサーチと学問的リサーチの物理的な組織上の分離は学問的リサーチの非常に深刻な減少に導くことになる。

参考文献一覧

- Archibald, Kathleen 1970 "Alternative Orientation to Social Science Utilization." *Social Science Information* 9: 7-34.
- Bauer, Raymond A./ Kenneth Gergen (eds.) 1968 *The Study of Policy Formation*. New York: Free Press.
- Berelson, Bernard/ Paul Lazarsfeld/ William McPhee. 1954 *Voting: A Study of Opinion Formation in a Presidential Campaign*. Chicago: University Chicago Press.
- Blalock, Herbert 1971 *Causal Model in the Social Sciences*. Chicago: Aldine.
- Campbell, Donald T. 1969 "Reforms as Experiments." *American Psychologist*. 24(4): 409-429.
- 1971 "Methods for the Experimenting Society." Paper presented to American Psychological Association. Washington, D.C., September.
- Caplan, Nathan 1976 "Factors Associated with Knowledge Use Among Federal Executives." *Policy Studies Journal* 4(3): 229-234.
- Caplan, Nathan / Eugenia Barton 1976 *Social Indicators 1973: A Study of Relationship Between the Power of Information and Utilization by Federal Executives*. An Arbor: Institute for Social Research.
- Charlesworth, James c. (ed.) *Integration of Social Sciences Through Policy Analysis*. AAPSS Monograph 14. Philadelphia: AAPSS,
- Churchman, C. West 1967 *The Use of Science in Public Affairs*. AAPSS Monograph 7. Philadel-

¹¹ この立場を支持する他の声明として、Pye (1968: 260), Lindblom (1968) 参照。

- phia : AAPSS, pp. 29-48.
- Coleman, James 1972 *Policy Research in the Social Sciences*. NJ : The General Learning Press.
- Cook, Thomas D. et al. (ed.) 1975 *Sesame Street Revisited : A Case Study in Evaluation Research*. New York : Rusell Sage Foundation.
- Crawford, Elizabeth 1972 "The Sociology of the Social Sciences." *Current Sociology* 19(2) : 7-10.
- Demerath, N.S.III/ Otto Larsen/ Karl Schuessler (eds.) 1975 *Social Policy and Sociology*. New York : Academic Press.
- Dror, Yaezkel 1971 "Applied Social Science and System Analysis." in Horowitz (ed.) pp. 109-132.
- Easton, David 1972 "Comment on Robert Lane's Political Science and Policy Analysis." in Charlesworth, James c. (ed.) pp. 88-89.
- Edelman, J. 1960 "Symbols and Political Quiescence." *APSR* 54 : 695-704.
- Etzioni, Amitai 1971 "Policy Research." *The American Sociologist*. 6 (Supplementary Issue) 8-12.
- Feuer, Lewis S. 1954 "Causality in Social Sciences." *Journal of Philosophy* 51 : 681-695.
- Freeman, Howard E. 1963 "The Strategy of Social Policy Research." *Social Welfare Forum*.
- Friedman, Elliot 1972 *The Profession of Medicine*. New York : Dodd, Mead, and Company.
- Froman, Lewis A.Jr. 1967 "An Analysis of Public Policy in Cities." *Journal of Politics* 29 : 94-108.
- Gans, Herbert J. 1971 "Social Science for Social Policy." in Horowitz. (eds.) pp. 13-33.
- Glock, Charles Y. 1961 *Case Studies in Bringing Behavioral Science into Use*. Stanford,CA : Institute for Communication Research, Stanford University.
- Glock, Charles Y./ F.M. Nicosia 1967 "The Consumer" in Lazarsfeld et al. (eds.) pp. 359-390.
- Gouldner, Alvin W. 1957 "Theoretical Requirement of the Applied Social Sciences." *American Sociological Review* 22 : 92-102.
- 1970 *The Coming Crises of Western Sociology*. New York : Basic Books.
- Green, Philip 1971 "Knowledge, Power and Democratic Theory." *Social Science in the Federal Government Annals*. AAPSS pp. 13-27.
- Gross, Neal/ Joshura A. Fisherman 1967 "The Management of Educational Establishments." in Lazarsfeld et al. (eds.) pp. 304-358.
- Horowitz, Irving Louis (ed.) 1971 *The Use and Abuse of Social Science*. New Brunswick, NJ : Transaction Books.
- Horowitz, Irving Louis/ James Everett Katz 1975 *Social Science and Public Policy in the United States*. New York : Praeger.
- House of Representatives. 1967 *The Use of Social Research in Federal Democratic Programs*. Washington,DC : U.S. Government Printing Office.
- Huntington, Samuel P. 1961 *The Common Defense*. New York : Columbia University Press.
- Janowitz, Morris 1972 *Sociological Models and Social Policy*. Morristown NJ : The General Learning Press.
- Kelman, Herbert C. 1972 "Roles of the Behavioral Scientist in Policy Oriented Research." in George Coelko/ Elia Rubinstein (eds.) *Social Change and Human Behavior : Mental Health Challenge of the Seventies*. Rockville, MD : NIMH.
- Komarovsky, Mirra 1975 *Sociology and Public Policy*. New York : American Elsevier Publ. Co.
- Lane, Robert 1972 "Political Science and Policy Analysis." in Charlessworth (ed.) pp. 71-78.
- Larsen, Otto 1975 "The Commission on Obscenity and Pornography : Form, Function and Failure." in Komarovsky (ed.) pp.9-42.
- Lasswell, Harold 1971 *A Preview of Policy Science*. New York : American Elsevier Publ. Co.
- Lazarsfeld, Paul F./ Jeffrey G. Reitz 1975 *An Introduction to Applied Sociology*. New York : Elsevier Scientific Publ. Co.

- Lazarsfeld, Paul F./ William H. Sewell/ Harold Wilensky (eds.) 1967 *The Use of Sociology*. New York : Basic Books.
- Lerner, Daniel/ Harold Lasswell (eds.) 1951 *The Policy Sciences : Recent Development in Scope and Method*. Stanford, CA : Stanford University Press.
- Lindblom, Charles E. 1968 *The Policy-Making Process*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall.
- 1972 “Integration of Economics and Other Social Sciences Through Policy Analysis.” in Charlesworth (ed.) pp. 1-14.
- Lompe, Klaus 1968 “The Role of the Social Scientist in the Process of Policy-Making.” *Social Science Information* 7 : 159-175.
- Lowi, Theodore J. 1964 “American Business, Public Policy, Case Studies and Political Theory.” *World Politics*. 16 : 677-715.
- Martinson, Robert 1974 “What Works? Question and Answers about Prison Reform.” *Public Interest* 35 : 22-54.
- Merton, Robert K./Edward Devereux 1949 “The Role of Applied Social Science in the Formation of Policy.” *Journal of Philosophy of Science* 16(3) : 161-181.
- Merton, Robert K./ Daniel Lerner 1951 “Social Scientists and Research Policy.” in Lerner/ Lasswell (eds.) pp. 282-307.
- Moynihan, Daniel P. 1969 *Maximum Feasible Misunderstanding*. New York : Free Press.
- Myrdal, Gunnar 1968 “The Social Sciences and Their Impact on Society.” in Herman B. Stein (ed.) *Social Theory and Social Invention*. Cleveland : Case Western Reserve University Press. pp. 145-163.
- National Science Foundation 1969 *Knowledge into Action : Improving the Nation's Use of the Social Science*. Washington, DC : U.S. Government Printing Office.
- Orlans, Harold 1968 “Making Social Research More Useful to Government.” *Social Science Information*. 7 : 151-158.
- Price, Donald K. 1965 *The Scientific Estate*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Pye, Lucian 1968 “Description, Analysis and Sensivity to Change.” in Ranney (ed.) pp. 237-272.
- Ranney, Austin 1968 *Political Science and Public Policy*. Chicago : Markham Pub. Co.
- Ravetz, Jerome R. 1971 *Scientific Knowledge and Its Social Problems*. New York : Oxford University Press.
- Reiss, Albert J.Jr. 1970 “Putting Sociology into Policy.” *Social Problems* 17 : 289-294.
- Rieken, Henry 1969 “Social Science and Social Problems.” *Social Science Information*. 8 : 101-109.
- Scott, Robert/ Arnold Shore 1974 “Sociology and Policy Analysis.” *The American Sociologist*. 9 : 51-59.
- Spengler, Joseph H. 1969 “Is Social Science Ready ?” *Social Science Quarterly* 50 : 449- 468.
- Stein, Herman 1968 *Social Theory and Social Invention*. Cleveland : Case Western Reserve University Press.
- Truman, David B. 1968 “The Social Science and Public Policy.” *Science* 160 : 508-512.
- Uliassi, Pio D. 1976 “Research and Foreign Policy : A View from Foggy Bottom.” *Policy Studies Journal* 4(3) : 239-243.
- Watts, Harold 1969 “Graduated Work Incentive : An Experiment in Negative Taxation.” *American Economic Review* 58 : 463-472.
- Weiss, Carol H. 1976a “Introduction by the Symposium Editor.” *Policy Studies Journal* 4(3) : 221-224.
- 1976b “Policy Research in the University : Practical Aid or Academic Exercise ?” *Policy Studies Journal* 4(3) : 224-229.

Weiss, Janet A. 1976 “Using Social Science for Social Policy.” *Policy Studies Journal* 4(3) : 234-238.

Williams, Walter 1971 *Social Policy Research and Analysis*. New York : American Elsevier Publ. Co.

【訳者後書き】

訳出したのは、1979 年刊行 Robert A. Scott と Arnold Shore 共著 Elsevier 1979 年刊行 *Why Sociology Does Not Apply : A Study of the Use of Sociology in Public Policy* の約 3 分の 1 である。訳出した部分は太字の箇所である。

Preface

Introduction

Ch. 1 Sociology in Policy: An Assessment.

Ch. 2 The Disciplinary Perspective in Applied Sociology.

Ch. 3 Conceptions of Policy in Applied Sociology.

Ch. 4 Origins of the Impetus to Plan.

Ch. 5 The Limits of Planning in Politics.

Ch. 6 Toward a Policy-Relevant Sociology.

Appendix : Knowledge for Understanding and Knowledge for Action

全体で 240 頁に及ぶ著書からできるだけ少ないボリュームで著者の見解を誤解のなく伝えられるように、訳出箇所を選択した。第 4,5 章は歴史的事例で第 6 章の提案の前提となる叙述で、それより何よりこの二つで 120 頁を占めるので真っ先にカットすることに決めた。残る 3 章の中で著者たちが最も問題視したい応用社会学者自身の「政策に役立つ社会学観」を真っ向から取り上げているというので、第 2 章を訳出することにした。付録は第 2 章の補足として書かれたもので、第 6 章の提案の理解にも不可欠な内容なので入れることにした。

本書の全体像は序文と序論の本書のアウトラインで把握できる。省略した第 1 章は、応用社会学は政策に役だった試しがほとんどない、応用社会学者が政策勧告を出すことすら希であること、その勧告も実用にほど遠い空想であることに触れている。第 3 章は応用社会学者の政策観（科学的プランニング）を問題視している。

序文に書いているように、シニアオーサー、スコットは 1935 年生まれ、プリンストン大学 盲人に奉仕する組織研究ディレクター、ジュニアオーサー、ショアはラッセルセージ財団の研究員（1979 年当時）で、二人が知り合ったきっかけは共にシュージャー、ペンシルバニア州負の所得税実験に携わったことと語っている。

本書を訳出しようと思いついた動機は、何より本書の題にあった。また著者たちが現状の把握、問題点の洗い出しに際して300点に及ぶ著書、雑誌論文、報告書を点検して執筆していることが本書訳出への気持ちを一層高めた。また訳者がその見解に注目してきているコールマンの1972年の著書、ワイスの論文（残念ながら1978年の社会調査と公共政策の関係を向上させる提案¹²や1977年の公共政策における社会調査の利用¹³ではなく、1976年の*Policy Studies Journal*の掲載論文だが）を好意的に何度も引き合いに出していることも本書訳出への気持ちを高めた。

本書は応用社会学の成果が行政、議会の政策形成者に利用されないのはどこに原因があるかという、それは応用社会学者が成果をまとめるのに政策に活用されるための知識を意識せず、成果のオーディエンスとして政策作成者でなく学術世界の同僚を意識しているところにあるとみる。また彼らは、優れたものであれば、政策作成者が自然に成果に関心を寄せ耳を傾けるものと楽観しており、作成者がどんな場合に研究成果に着目するか、作成者を取り巻く政治的コンテクストにも目配りする必要がある。応用社会学者が学術への未練を捨てて、政策作成者が関心を寄せ、耳を傾けるようにするための方策を提案している。

彼らの提言は、政策作成者でなく、同僚の社会学者にも向けたものである。仮に応用社会学者が彼らの提案に賛同したとして、政策作成者が社会科学の成果を政策立案に役立たないものと決めつけていけば、応用社会学者の提言、勧告、社会科学的知見に耳を傾けたり、目を向けたりはしないであろう。政策作成者が調査成果や勧告を採用するポーズを取るのは、有権者や世論へのポーズのためで、プログラムの効果が見込まれるためではない。これはコールマンも指摘するところである。

著者たちは、応用社会調査が政策レリバンスを高め、政策作成者に取り入れられる場合に被る高い代償（研究対象の選択の自主性の放棄、政府による研究資金操縦による応用社会学者の飼い慣らしの危険）にも警鐘をならしている。一方で焚きつけておいて、他方で警鐘を鳴らす、まるでマッチ & ポンプでないか、と言う印象を持つかも知れない。

しかし、後者を危惧するよりもまずはロードスを渡れ、そのような心配を恐れて足踏みするのは意気地なしだ、といっているように聞こえる。

社会調査に従事する日本のアカデミックな社会学者が彼らの提案にどのように反応するか、この翻訳の反響を楽しみにして攔筆することにする。

¹² C.H. Weiss 1978 "Improving the Linkage Between Social Research and Public Policy." L.E. Lynn (ed.) *Knowledge and Policy: The Uncertain Connection*. Washington, D.C.: National Research Council. 拙訳「社会調査と公共政策の関係を向上させる提案」東北学院大学教養学部論集 第149号(2008年)

¹³ C.H. Weiss (ed.) 1977 *Using Social Research in Public Policy Making*. Lexington, Mass.: D.C. Heath.

訳語の注記

policy making body 政策作成集団, policy maker 政策作成者
policy making process 政策形成過程, policy making 政策形成

前号〈156号〉について

前号（156号）に下記の誤りがありましたので訂正します。

訂正箇所	(誤)	(正)
欧文表紙の目次	Yoshimochi SENJI → YOSHIMOCHI Senji	
執筆者一覧	掲載漏れ→(フリーダー・ゾンダーマンの後に) ギュンダ・シュテルバ (ライプチヒ大学名誉教授) を追加	

前号（156号）は

〈http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_156/index.html〉にて公開中です。

東北学院大学学術研究会

会 長	星宮 望
評議員長 編集委員長	吉田 信彌
評 議 員	
文 学 部	遠藤 裕一 (編集) 佐藤 司郎 (編集) 辻 秀人 (編集)
経済学部	越智 洋三 (会計) 細谷 圭 (編集) 郭 基煥 (編集)
経営学部	菅山 真次 (会計) 目代 武史 (編集) 折橋 伸哉 (編集)
法 学 部	黒田 秀治 (編集) 白井 培嗣 (編集) 木下 淑恵 (庶務)
教養学部	吉田 信彌 (評議員長・編集委員長) 野村 信 (編集) 柳井 雅也 (庶務)

東北学院大学教養学部論集 第 157 号

2010 年 12 月 9 日 印刷
2010 年 12 月 16 日 発行 (非売品)

編集兼発行人 吉 田 信 彌
印刷者 笹 氣 幸 緒
印刷所 笹氣出版印刷株式会社
発行所 東北学院大学学術研究会
〒980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
(東北学院大学内)

FACULTY OF LIBERAL ARTS REVIEW TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

No. 157

December, 2010

CONTENTS

Articles

- Saturation and Latent Changes of the “Middle” Status Identification :
Note on Status Identification in Postwar Japan (2)
..... KANBAYASHI Hiroshi..... 1
- A Reading of *The Waste Land*, 2. “A Game of Chess”
..... KIKUCHI Hiroshi..... 25
- Tilesius und Thunberg (4. Teil)
..... Frieder SONDERMANN und Günther STERBA..... 39
- Coming of Age in America : A Rite of Passage Away
..... Scott WATSON..... 75

Translation

- Robert A. Scott & Arnold R. Shore: Why Sociology Dose Not Apply: A
Study of Use of Sociology in Public Policy (The Second Half)
..... KUJI Toshitake..... 111